
MAINE TRAFFIC

紫電改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MAINE TRAFFIC

【Nコード】

N0514X

【作者名】

紫電改

【あらすじ】

静岡県に住む鉄道大好き少年。この小説は彼の生きがいをも小説にしたものです。
中学生の彼の心が回り始める。
目標は・・・一人前の運転手。

1列車 鉄道少年（前書き）

この小説はフィクションです。

なお、鉄道に興味のある方にはこのことを頭の中に入れて読んでいただければ幸いです。この小説には現実と違う個所がございます。どうかご了承ください。

1列車 鉄道少年

僕は静岡県に住んでいるどこにでもいる中学3年生。スポーツは全くダメ、勉強はできるとは思いたくない少年である。そんな自分であるが、一つだけ自分を輝かせることができるものがある。それは鉄道である。

僕の将来はもう決まっている。それもそこ以外考えてもいない。だが、そこへ行くためには高校をかまさなければ行けないことも分かっている。もちろんその高校生活にも鉄道が絡んだ方が面白いと思っているのは事実。そのためにはどこに行ったらいいものか？と考え悩んでいるが、めったにパソコンでそんなこと調べていない。だが、暇があると自分の家にある離れにこもって、模型で遊んでしまっている。中学3年生の6月となれば、僕は最悪の中学生かもしれない。いや、そうに違いない。

と、ここまででは前フリ。ここから本題に入るのだが、まだ自分の名前を言っていない。永島智暉ながしまとともき。これが僕の名前である。

6月8日。今日は久しぶりにフリーな日だ……。久しぶりというのはウソ。本当は毎日フリーなのだ。いつものように離れに行つて模型もけいを走らせている。言っていないが、僕の離れに展開しているのは新幹線しんかんせんと複々線ふくふくせんの在来線ざいらいせんが走っている鉄道模型。周回の大きさは実物にたとえて10キロぐらいになるといふほどの大きさ。車両は別の部屋に置かれている。ここには折りたたみケースに入つた鉄道模型が30箱入っている。内訳は22箱が父のもの。3箱が祖父のもの。2箱が従兄いとこのもの。3箱が自分のものだ。レイアウトは大きすぎだし、車両は持ちすぎではと思つているかもしれないが、自分の持っている量などまだひよこ。いや、卵にもなっていないかな……。世の中にはそう言う人もいるくらいだ。ここで前述した通りの時に遊んでいる。もちろん、やっていて飽きたことは一度もない。

遊んでいると離れのドアが開く音がした。顔を上げてみると女の子がそこに立っている。僕と顔つきはよく似ている。

「ナガシイ。6月14日に岸川きしかわっていう高校で文化祭があるんだけど、見に行かない。」

第一声はこれか……。彼女は坂口萌さかぐちもえ。僕の理解度が一番いい人だ。

「ええー、文化祭。行くの面倒くせえじゃん。」

「そう言うと思ったよ。……でも、これ見たら行くっきゃないでしょってなると思うな。」

「どっという意味だよ。」

聞き返すと萌もえは何のためらいもなくモジュールを置いている長机の下をくぐった。ためらいがないのは当然だろう。小学校の時はほぼ毎日。中学になってからだと土日はほぼ毎回と多いからだ。僕の近くまで来ると、手に持っていた岸川きしかわ高校のパンフレットを差し出した。受け取って中をサラサラっとみてみる。するとあるところが目にとまった。

「でしょ。」

「……。」

「ねっ。だから行こうよ。絶対満足できること間違いなしだから。確かにそうなのだが。この手の部活があるというのは今初めて知ったことだ。」

「よしっ。決めた。行こうか。……で、何日だっけ。」

「忘れるの早いねえ。6月14日。パンフレットの裏に書いてあるけど、遠江急行とんげいきゆうの涼ノ宮すずのみやえんてつが遠州鉄道えんてつの助信すけのぶから行くのが近いんだって。どうする。」

「じゃあ遠州鉄道えんてつで行って遠江急行とんげいきゆうで帰ってくる。」

「なんでもいいよ。そこは任せる。」

「つつかその文化祭何時から始まるんだよ。」

「あつ、言い忘れてた。9時からだよ。それで終わりが15時。」

「15時終わんのかよ。もうちょっと長くやれよ。」

「まあ、そこ文句言ってもしょうがないし……。じゃあ行ってくて

「ことでいいね。」

言い終わるとグルッと部屋の中を見まわした。ほぼ毎日来ている状態で見るものなんてないはずなのだと思うている人は分かっている。この部屋にあるのは鉄道模型のモジュールレイアウト。つまり探しているのは……。

「ナガシイ。あすこに走ってる寝台特急何。」「北斗星」……じゃないか。「さくら」かなあ。それとも「あさかぜ」。

目的のものを見つけて僕に問いをした。

「「出雲」だよ。」

「えっ、「出雲」。」

今度はじっくり見て、走っているものを確認する。その姿がはつきりしてくると、

「あっ、ホントだ。よく見たら24系引つ張ってたのがEF66じゃなくてEF65だった。」

「だろ。EF66とEF65じゃまず見た感じが違うんだから。」

「そう言われればそうでした。EF65は箱っていう感じだもんね。その箱っていう感じで赤いのがEF81だけ。」

「……そんな感じでいいよ。」

立って、長机の下をくぐって車両庫のほうへ歩いて行く。

「えっ、もう車両換えるの。換えるんだったらさあ「カシオペア」にしてよ。」

「うーん……。どうしようかな。」

車両庫の奥に入って従兄の箱を見つけて中身を出す。

（あれは貨物を取ってくるね。高速貨物かな。それともタンク貨物。いや、紙……。）

12両編成用の箱を見つけて2つ取りだす。とりあえず中身を確認して、次は機関車を探した。機関車は地元のEF210（桃太郎）をはじめとする機関車を大勢引つ張り出した。機関車の次は機関車に対応する車両を探す。例えば、EF210が貨物列車を牽引している時は313系や223系など東海道本線を走っている車両。E

F64が重連じゅうれんでタンク貨物を牽引している時は383系「特急しなの」など中央本線ちゅうおうほんせんを走っている車両という風にする。その車両を一つか二つ見つけて、戻った。

「やっぱり「カシオペア」は持ってきてくれないんだ。」

「その代わりにもつと面白いもん持って来たぞ。貨物だ。」

「また26両やる気。準備するだけでも疲れない26両つて。」

「26両以外走らせる気ないし。それに萌もえが手伝うからそんなに関係ないじゃん。」

車両の入った箱を萌もえに渡して、机をくぐる。中に入ると萌もえはすでに着発線荷役方式の貨物駅にいて車両を並べ始めている。その並べるのに合流して、4両5両と並べていく。その数が26になったところで、その前に機関車を連結する。スタートはDF200（レッドベアー）だ。

「「レッドベアー」だっけ。」

「ああ。」

「「ブルーベアー」とかいけないのかな。雷かみなりものは「レッドサンダー」と「ブルーサンダー」でちゃんというのに。」

「まあ、作らなかつただけだろ。じゃあ、もうちよつとしたら出発だつぞ。」

今まで走っていた「出雲いせ」を駅で止めて、車庫まで回送する。その回送が終わると貨物の番だ。貨物列車が停まっている線路に電気が行くように変えて、コントローラーのブレーキを解除。マスコンを入れて、貨物駅を発車する。発車した後は放っておくだけ。走っていくところを子供のように追いながら、その工程を見守る。やがて貨物列車は新幹線の高架橋こうかきょうの下をくぐり、また新幹線の高架橋をくぐる。坂を上って鉄橋てつかを通過。次に坂を下ってこのレイアウトの緩行線かんこうせんの下をくぐる。緩行線の駅を通過した後また坂を上ってこのモジュールで一番大きい駅を通過。やがてまた元の貨物駅に戻ってくる。しばらくこの動作を繰り返して、EH500（金太郎）にバトンタッチ。また動作を繰り返して次の機関車へとバトンを渡してい

く。

「そろそろEF210（桃太郎）に変えない。」

「EF210（桃太郎）はまだ。次はEF510の北斗星色ほくとせいに引かせるんだから。」

「なんでそこでそれ。EF510の北斗星色ほくとせいも貨物引くけど、ED75から引き継ぐっていうことはないでしょ。つうか東北本線とうほくほんせん通ってきて常磐線じょうばんせんに入る貨物なんてあるの。」

「あるわけねえだろ。究極にありえない貨物やってんだから。」

「・・・。ねえ、ナガシイ。気になってはいたんだけどさあ、日本で一番長い貨物つてどこからどこ結んでて、どこをどう通ってるの。」

「知るか。多分東京とうきょうから西鹿兒島にしかりしまあたりまでじゃない。」

「こういう貨物列車もあるだろう。だが、この貨物列車は日本一ではない。日本一は札幌貨物さっぽろかもつと福岡貨物ふくおかかもつを結んでいる列車。走行路線は札幌さっぽろから千歳線ちとせせん、室蘭本線むろらんほんせん、函館本線はこだてほんせん、江差線えさしせん、津軽海峡線つがるかいきょうせん、奥羽おうう本線ほんせん、羽越本線うえつほんせん、信越本線しんえつほんせん、北陸本線ほくりくほんせん、湖西線こせいせん、東海道本線とうかいどうほんせん、山陽本線さんようほんせん、鹿兒島本線かりしまほんせんの順だ。」

「それって「はやぶさ」とごつちやになってない。」
速攻でツッコまれた。

「そうだな。でも、これって仕方ないんだよなあ。駿兄ちゃんしゅんあにちゃんも貨物マニアじゃないし。分かる人いないんだよなあ。」

「へえ。駿兄ちゃんしゅんあにちゃん貨物の模型結構持つてるから一見すると貨物マニアって感じるけど、違うんだ。」

「ああ、本人が言ってた。」
「ふうん・・・。」

お互い走っている車両に目を向ける。今走っている貨物列車は26両のコンテナ貨車にコンテナを満載している。当然ずっと満載では面白くない。

「そろそろ牽引機変えるかあ。」

「変えるんだつたらコンテナ満載もやめない。」

「そうだな。じゃあ、長いタイプのコンテナと載せ替えるか。」
貨物駅に列車を止め、そこまで歩く。まずここまで牽引してきたE
D75を貨車から切り離し、ケースにしまう。次に後ろに続いてい
るコンテナ貨車のコンテナを必要数外し、20フィートコンテナに
載せ替えていく。この20フィートコンテナは1両の貨車に3個載
る。載せ方も何パターンがあり、満載。12フィートコンテナを2
0フィートコンテナで挟む形。その逆。こういった方法。もしくは
満載されているコンテナすべてを外し、そのままにするということ
だつてある。僕は26両中18両にそれを施した。そのうち10両
を何も載せていない状態にした。編成は満杯から一気にスカスカに
なつた。

「空コキ多いなあ。」

「なんか別なほうがいいのか。もっと空コキ増やすか。」

「なんでそうするんだよ。もうちよつと空コキ減らすべきだよ。」

「常磐線だつたらこんな感じなんじゃないの。あれ、EF510の
北斗星色は。」

萌もえの手にチラツと青い物体が見えた。真ん中には金色っぽいライン
が入っている。

「おい、それ返せよ。」

見つかつているということが分かつていたようなのですぐに感じる
と思いきや、

「せめて、あと2両増やしてくれないとヤダ。」

「空コキ。」

「違う。コンテナ載せてあるコキ。」

「外すのより載せるほうが面倒くさいんだよ。」

「知るか。載せる。」

5秒ほどいがみ合つて、

「最初はグー。ジャンケンポン。」

チヨキとチヨキであいこだ。

「あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あ

「そつだな。東海道本線つて言つたらEF210（桃太郎）の王道だもんな。」

「その隣は313系。・・・ねえ、ナガシイ。5000番台（313系）2編成連結して、12両編成やつてよ。223系みたいに。」

「気持ち悪い。やめろ。」

「やつてよ。面白いじゃん。」

そう言いながら、萌は僕に近づき、わき腹を指でなぞつた。

「やめろ。くすぐりたいから。」

「ナガシイがやるつて言つてくれればやめろよ。」

「お前・・・。」

「ねえどつち。やつてくれるの。」

「はあ。今日だけだぞ。」

そう言うつと萌のくすぐり攻撃は約束通りなくなった。車両庫に行つて313系の箱を探す。車両庫には父の313系5000番台と従兄の313系5000番台がある。それを探し出して、車両庫から戻ってくる。

「はいよ。やるつて言つたけど、並べるとは言つてないからな。」

「・・・。並べてくれたつていいじゃん。」

「ダメ。」

この言葉で萌はあきらめたらしい。自分で313系を並べ始めさつき言つた通り12両編成にした。並べ終わると萌はコントローラーの位置まで来て、

「外回りは借りるね。言つとくけど、出してる間に貨物がぶつかるつてことないようにね。」

「大丈夫だつて。さつき貨物駅通過したばっかだから。今鉄橋のところにいるし。」

「了解。」

車両基地のポイントコントローラーで313系が止まっている線路に電気を行かせる。次にコントローラーのつまみを回して、313系の発車を促す。それを確認すると、自分の運転するコントローラ

ーのブレーキを解除。マスコンを入れて、出庫してくる313系を本線に乗せるよう電気をとる。313系が本線に乗るところ問いてきた。

「ナガシイ。313系、脱線しないよねえ。」

「知るか。脱線するんだったら、どつちかの編成にモーターぶち込めばいいじゃん。駿兄しゅんちゃんの「スーパー雷鳥」みたいに。」

「そうだね。もし、脱線したらさういうよ。」

「さういう……。まさか、自分じゃやりたくないって思っ
てない。」

「チエツ。ばれた。」

どうしても萌もえはさうしてほしかったらしい。舌打ちをした。

「チエツ。ばれたじゃなくて、自分でそれくらいできるだろ。」

「あー。何も聞こえません。」

「ウソつけ。」

このあと30分間ぐらい313系とEF210牽引の高速貨物列車を運転した。

他にも223系1000番台の12両編成と223系2000番台の12両編成のしんかいそく新快速。京浜東北線の209系と山手線のやまのてせんE231系など。いろんな列車を走らせていたらもう時間は5時。いつも思うことだが、気付くともう夕ごはんの時間だったりする時もある。時間が足りないのだ。

「ヤベ。家帰らないと。ナガシイじゃあね。明日学校でな。」
時間に気付いて萌もえが離れのドアに向かう。

「6月14日忘れんなよ。」
ドアを半開きにした状態で行った。

「忘れねえよ。これ見ちゃったんだから。」

パンフレットをかざすと、ニツと笑って帰っていった。

「岸川きしかわかあ……。」

裏付ける思いで、つぶやいた。

人物
ながしまともき
永島智暉
さかくちもえ
坂口萌

誕生日
誕生日

3月11日
10月3日

血液型
血液型

O型
A型

身長
身長

161cm
159cm

1 列車 鉄道少年（後書き）

感想がございましたらお書きください。

2列車 見に行きます 文化祭(前書き)

6月14日。岸川高校文化祭を見学しに行った永島と坂口。
そこには今まで見たことのない編成と個性的な先輩たちが・・・。

2列車 見に行きます 文化祭

6月14日。岸川高校きしかわの文化祭に向かった。岸川高校は遠州鉄道えんてつの助信すけのぶから西へ歩いて25分ほど。岸川きしかわの正門についた時刻は9時03分だった。もうすでに受け付けは始まっている。受付をスルーしてからはすぐに鉄道研究部てつどうけんきゅうぶが展示を行っているというホールに向かった。

ホールは人でたくさんだ。その人が集中しているところには建物が建っているとても小さい風景が見える。家の離れでよく見なれたレイアウトだ。

「家のより小さいな。」

「ナガシイ家のちは大きすぎるだけじゃないの。」

「いや、そうかもしれないけど・・・。」

「ほら、なんか走って・・・。」

汗が出てきそうだった。そう言う頃には他の子供に混じってかじりついてそれを見ているからだ。でもいつものこと。萌もえにとっては普通のことと受け止めた。永島ながしまを追ってモジュールとこころにした。

「313系だ。これ東海とかで走ってる車両しゃだぜ。」

「これだつて毎日走らせてるじゃん。新快速だか、普通で。知ってるよ。」

「ああ、そうだった、そうだった。」

今度は313系の走っていった方向からまた列車がやってくる。前面が白くオレンジと緑のラインが入っている。湘南色しやうなんしきという塗装うすまだが、その車体にはステンレスボディーの部分が多い。211系という車両だ。

(211系でシングルアーム。こんなの見たことないけど・・・。) カープを曲がりきってきた6両編成の車両の後ろにはさつき走っていた313系がくっついていて。こんな編成あるのだろうか。僕は初めて見る編成に少し違和感いわかんがある。だが、走っている車両にそ

んなことは関係ない。他の子供がやっているように列車の進行方向しんこうほうに先回りする。ここで見ていたいなあというところに来たら、しゃがんで電車が走っている高さに目線を合わせる。こうやってみると模型でも本物の様に迫力を感じるのだ。その時萌もえは僕の背中側にある方に目線を向けていたらしい。先にあっちの列車が来たみたいで肩をつついた。

「「サンダーバード」だよ。」

目線をそっちに替えて、「サンダーバード」を見る。だが、その列車は「サンダーバード」と違って顔が赤い。

「「サンダーバード」じゃなくて「スノーラビット」だよ。「はくたか」、「はくたか」。」

「えっ「はくたか」ってこんなに顔真つ赤の車両やうもあるの。」

「ああ。北越急行ほくえつきゅうこうが持つてる車両やうは顔真つ赤だよ。」

「へえ。そうなんだ。」

理解しているのかどうかは知らないけど……。目線を戻して、さっきの列車が通過するのを待った。通過すると走り去った方向に顔の向きを変えて次のカーブを曲がって姿が見えなくなるまで見送る。見送り終わるとまたつつかれた。

「「雷鳥らいちょう」。「しらさぎ」。「どつち」。」

むこうから走ってくるのは485系という特急電車。この手の車両には先頭にこの車両は「特急」と掲げている。そこを見ればいい。けど、今走ってくる車両にはそんなどこにもない。おまけに流線型の顔をしている。

「お前、今分かってて聞いただろ。」

「えっ……。はあ。「雷鳥らいちょう」でしょ。パノラマだったから分かり

やすかったよ。」

「だったら聞くなよ。」

「いいじゃん別に。ナガシに比べたら鉄道知識ないんだから。」

「いや、そうだけどさあ……。」「すると今度は、」

「おい、ハクタカ。「雷鳥」編成違う。4号車と5号車と8号車ドアの向き逆。」

後ろから声を張り上げられる。

「今更いいじゃないですか。そこまで見てる人いませんよ。」

さっきの人にハクタカと呼ばれた人が答える。すると、さっきの人とは別の人が「雷鳥」に手を出した。走っていた車両を手で捕まえ、モーターがはいつていると思われる車両を抜き取った。それを抜き取るとそれまで走っていた「雷鳥」は動かなくなり、その人はさっき後ろの人が指摘していた車両の向きを正常な向きに直していった。そして一番最後にモーター車を線路上に戻して、分離した車両を連結しなおしていた。

「膳所さん。そこまでしなくても……。」

「ハクタカの場合はおそこまでしてやしないとダメ。名寄もこれからそうすればいいじゃん。」

さっき「雷鳥」を直した人は膳所、編成が違つと指摘した人は名寄というらしい。

「はあ……。」

「名寄。次「立山」行くから、内回りにこれ並べて。」

「うわ。来たよ「立山」。」

今まで313系が走っていた方は「立山」という列車に置き換えるらしい。この名前も初めて聞く列車だ。だが、並べているところをよく見ていると見たことのある車両だった。家の車両庫にある「急行ゆのくに」というのと同じ車両だ。

「ちゃんと並べるよな。」

「まあ、ハクタカとは違って編成間違つことないだろ。」

「いや、名寄の場合は間違ひ方がひどい。上野でもよく解るぜ。」

「あつ。外回りあつち向きなのをこつち向きで入れちゃった。」

「ほらな。」

「八八。そう言うことが。」

ちよつとの間中のやり取りを聞いているといろんなことが分かる。

名寄なよろという人は鉄道のことはよく解っているがケアレスミスが多い。「立山たてやま」を渡した上野うえのという人は鉄道にはそんなに詳しくないらしい。膳所せせという人はパーフェクト……。そんな具合だろう。

また今度は、

「ナヨロン、そつちに313系の「ムーンライトながら」ある。」
女子の声だ。この部活には女子もいるみたいだが、言ってることは全然違う。313系はいくら使われても特別快速とくべつかいそくまで。「ムーンライトながら」に充当されるわけがない。そして、今言いたかった車両は……。

「「ムーンライトながら」って373系で運転してるよねえ。」
当の本人も萌もえにツッコまれるとは思っていないだろう。

「そんなのではないぜ。」
「あれないっけ。」

すると後ろからまた別な人が出てきて、

「313系の「ムーンライト」……じゃなかった。えーと313系の……あーもう。373系の「ムーンライトながら」。」
「ようやっとその答えにたどり着いた。」

「違っつて分かってるのに2回も間違っかな。」

「さあな。あの二人は天然っつてところかなあ。まああれでマニアだつたらただのバカだけど。」

「……。ナガシィ。他のところも見に行かない。なんか面白いのやってると思うし……。」

「ヤダ。終わるまでここにいろ。」

(やっぱり……)

しばらくの間同じところにしゃがんでみていたため足が痛くなってきた。座ろうとしても電車のほうがさせてくれない。今名寄なよろと上野うえのという人たちのほうは489系の「特急あさま」と「特急白山たけはくしやま」がEF63という機関車にプッシュアップしてもらって走っている。

この情景はかの有名な碓氷峠つばきとうげで見れない光景だった。一方ハクタカという人がある方は883系の「特急ソニック」と787系の

「特急つばめ」が走っているが、その「ソニック」のほうだけ「クソニック」と呼ばれているのはなんでだろうか。

「さつきから「クソニック」ってよく言ってるけど、「ソニック」ってそんなにクソなのかなあ。」

言い終わると叫び声が聞こえる。

「ああ。この「クソニック」また架線柱喧嘩売りやがって。」

「本当にクソだな。つうか誰だよ。内回りに「クソニック」出したの。そいつ処刑だ。」

「あのお僕ですけど、何かいけないんですか。」

「犯人ハクタカだつてさ。ダメに決まってるだろ。内回りに置いたら「クソニック」が架線柱に喧嘩売りにいって自分から脱線するから。「あずにゃん」もそう。」

「じゃあ、なんで「スーパーおおぞら」は内回りに出しても何も問題ないんですか。」

「あれはKAT^{カト}Oの振り子機構が少ししか働かないからいいんだつて。だけど「あずにゃん」と「クソニック」と「しなっちの副作用」はマジで副作用^{ふくさよう}するからダメ。」

「「あずにゃん」と「クソニック」は何言いたいか分かりますけど、最後の「しなっちの副作用」ってなんですか。」

「えっ、「しなっちの副作用」は「しなっちの副作用」に決まってるんじゃないか。」

「全然答えになってません。つうか善知鳥先輩^{ぜんち}それ遠回しに解らないうって言ってますよね。」

こういうやり取りが聞こえてきた。

「あの人が言ってる「しなっちの副作用」って「しなの」のことだよねえ。」

「ああ、多分な。」

なんか分かってはいけない気がするのなんでだろう。

ずっとホールにいて2時間。もうほとんど終わってしまった。昼でも食べに行こうかと誘われて、他の展示に行ってみる。そこで見

たのはポケットモンスターに変装した人や、気ぐるみを着ている人。今の高校生というのはいさかい感じなのだろうか。そんなことを思いながら、あるクラスのクラス展に入って焼きそばを買ってまたホールに戻った。

戻ってみると名寄・上野周回のほうには貨物列車が走っていた。その先頭に立つのはEF210。桃太郎。後ろに続いているコンテナ貨車は17両。貨物列車としてはふつうであるが、家で走らせている26両の高速貨物列車と比べてしまえば少し短い。その隣に走っているにはEF66が牽引する寝台特急。ヘッドマークは「あさかぜ」となっていた。編成は7両。正規の14両の半分であるが、ツツコマないことにおこつ。一方のハクタカチームはEF510が牽引する「寝台特急カシオペア」と「寝台特急北斗星」が我が物顔で走っている。どちらかといえばこちらのほうが客の目を引いている。

「あーっ。ハクタカっ。」「カシオペア」止めてっ。」

叫び声が出た。その叫び声はさっきギャグを言っていた人だ。止めてと言った「カシオペア」を見てみると、機関車の動輪が線路から外れており、その車輪の下に何かを巻き込んでいた。

「止めました。」

「ちよつとサヤ。」「北斗星」も止めてっ。ぶつかると。」

と言った時にはもう遅かった。「北斗星」は「カシオペア」が待ちこんだ謎の物体Aに突っ込んで乗り上げる形で脱線した。そのおかげで「北斗星」を牽引していたEF510は少しばかり態勢を崩した。次の瞬間。EF510は観客側にグラッと倒れて落下していった。

すかさず手が出た。落ちていくEF510をダイレクトキャッチ。床に落ちる手前で受け止めた。その頃には部員の人々が脱線した「カシオペア」と「北斗星」の復旧に駆けつけており「カシオペア」を復旧させていた。それに混じってEF510を「北斗星」が走っていた外回りの線路に乗せて、

「あの。お手を触れないようにお願い……。」「
そう聞こえた時には六つある車輪を次々と乗せていった。

（なんだ。こいつのなれたような手つきは。家で模型やってるとしか思えない……。これは将来期待できるかも……。）

「触れちゃいけないのは分かってますけど、EF510（こいつ）を助けたついでです。」「

全ての車輪を乗せ終わってから口を聞いた。その現場には少しづつ
らくなつたため、萌を促して場所を移動した。

「毎日やってるからって。あれは将来来るって勘違いされたんじゃない。」「

あきれた。でも、その顔には決めつけているというのも垣間見た。

「いいじゃねえかよ。やつちやつたもんはやつちやつたんだから。

それよりもここで「北斗星」が来るの見てよう。」「

永島ながしまに続いてしゃがもうとすると、対角線のコーナーで同じように
している人を見た。明らかに中学生。そういう人だった。

（同じような人もいるんだなあ。ナガシイと同類……。）

「北斗星」を見て目を輝かせている永島ながしまを見てふと笑いがこぼれた。
「どうした。何か笑えることでもあったか。」「

「いや。なんでもない。」「

「何でもないわけないだろ。笑えることが何もないのに笑うって
うのは変人の証。」「

「変人とも限らないんじゃないか。思い出し笑いつていうのがある
んだから。」「

「……。」「

「ほら。そっち向いてなくていいのか。」「北斗星」が来たぞ。」「

萌もえに言われて振り向いてみると「北斗星」はすでに僕の前ではなく
カーブを曲がっていつてしまっていた。

「あっ、この野郎。」「

「ハハハ。引つかかった。」「

「……。」

「抑えろつて。家でいつぱい見れるだろ。」

「見れるけどさあ。EF510の北斗星色ほくとせいでの「北斗星」ほくとせいはここでしか見れない気がして。」

「なんで……。あれ、ナガシイ家の「北斗星」ほくとせいって私のあげたカシオペア色のほうだったっけ。」

「そうですね。萌もえからもらったカシオペア色ですよ。」

「あれ、そうだったっけ。「北斗星」ほくとせいのJR北海道仕様のやつはあげたの覚えてるんだけど、他の何かとごっちゃになってわかんない。」

「確か。お前からもらったやつは「北斗星1号・2号」のセットと

「北陸」の客車セットと「能登」の9両セットと「EF510のカシオペア色」だった。」

「あれ……。なんかナガシイにワムの34両セットあげた記憶があるのは……。」

「それ当てたのは駿兄ちゃん。駿兄ちゃんがそれもってきた時に見せてって最初に言ったのが萌もえだった。それだけ。」

「15時近くになると他の客をひいてきて、だんだんいづらくなってくる。ちよつと前にホールを出て、家への帰路についた。」

「文化祭が終わるとすぐに片づけに入る。今まで大きなモジュールとプラレールで埋め尽くしていたホールは何もない状態に早変わりしていく。」

「今年は優秀賞りゅうしゅうしょうかあ。去年グランプリだったけどおしかつてね。」

「まったくだ。生物部死ねばいいと思う。」

「おいおい。過ぎたこと悔やんでもしょうがないだろ。それより片付け手伝え。」

「ねえ膳所たねどころさん。生物部に聞こえるように死ねって叫んでいいですか。」

「やめろ。それやる前に片付けろよ。」

「じゃあ片付け終わったら叫んでいいんですね。」

「いや、そうじゃなくて。」

「おい、善知鳥じゆつ。話してばっかで手が止まってるぞ。」

「ごめんねアヤケン。気をつけるよ。」

ふつ々の学習机を「はっ」という声とともに持ち上げる。

「でも、今日絶対岸川きしかわくるっていう人見つけたよ。」

「誰だよ。」

「あの「北斗星ほくとせい」が脱線したときに、EF210（モモちゃん）を危機から救った人。」

「えっ。善知鳥じゆつの言っていたいと従弟いとこじゃないのかよ。」

「だって海斗かいとはもう大阪おおさかで行く高校も決めたって言ってたし。それに今日はちよつと見に来てただけだから。」

「にしては最初から最後までいたよな。あいつと同じで。」

「その人がここに来るっていうのか。でもそれは併願へいがんじゃないか、併願校へいがんこう落ちたらの話だろ。」

「そうだけどさあ……。なんか単願たんがんできそうな気がするんだよねえ。」

「こらッ。机持ったままそこで話してたら同じだろが。」

「あつ。すみません。」

その頃、

「ナガシィ。今日楽しかったね。」

「ああ。……。萌もえ。俺、行く高校あすこに決めた。」

「他の高校とか見てから決めた方がいいんじゃない。」

「いや、俺にはあすこしかない。それに……。あすこだったら楽しめそうだ。」

7月。

「文化祭を見に行った後はテストかあ。」

萌もえは小さくため息をついた。

「ナガシィはいいよねえ。勉強しなくていいんだからさあ。」

「さすがにそれは無理。1時間くらいは勉強しないと。」

「それでもいいじゃん。塾行き始めたら定期テストぶつづに200

点いくようになったし。何か覚える秘訣ひけつとかあるの。」

「秘訣ひけつなんてないよ。それに萌もえがこれやったら死ぬと思う。」

僕がやっている勉強法とはテスト1時間ぐらい前になってパニックッテいる状態でノートもしくは教科書に目を通すこと。ここではそれだけやって数学の問題集などはあらかじめやっておき、ここで目を通す。といった具合。もちろんこれができるのは1時間目のテストだけで2時間目、3時間目のテストは10分間の休み時間だけでこの作業をする。

「そりゃ死ぬと思うよ。ナガシイのやり方で覚えられる人のほうがすごいと思うから。」

「人をエスパイみたいに言うな。」

「永島ながしま。今度のテスト勝負しようぜ。」

そう話しているときに話しかけてきたのは友達の宿毛佑真すくもゆうまだった。

彼とは中学校からの中で、定期テストでは毎回勝負している。勝敗は五分五分。塾に行く前は負け続けていたが、塾に行き始めてからは勝ち続けている。

「宿毛すくもも懲りないよねえ。勝てっこないよ。」

「いいだろ。それに勝負する前から負けるって思うのは嫌だ。今回は俺も自信あるんだ。合計点勝負しようぜ。」

「ああ、いいよ。」

「ねえ、宿毛すくも。宿毛すくもってテストの時どうやって覚える。」

「えっ。俺の場合は、とにかく実践かなあ。問題集なんか買って、まずその問題集にやらずにノートにやる。やり終わったら採点して、次に問題集にやって、また採点。そんな感じかなあ。」

「その方法でナガシイに負けてるってどうよ。」

「まあ、少し腹立つけどな。でも、結果がそうだったんなら、もっと頑張ればいいだけの話。」

「もっと頑張っても勝ったことないじゃん。」

「あのなあ。もっと長い目で見るって。永島ながしまの場合はすぐに忘れる。短期記憶に頼ってテスト乗り切ってるんだから。」

「それに、学調とかじゃ、あれ完全に負けてるから。国語19点とか取ったことあるし。」

「それ1年の話だろ。2年生の時は26点取れてたじゃん。」

「上がったには上がったけど、国語が弱点ってことには変わらないじゃん。」

「お前もつと本とか読もうぜ。そうすれば読解力上がるから。」

「なんか今更って感じるんだよなあ。俺の場合本はアニメにして読んでるからなあ。」

「……ナガシイの場合本を読むと想像力が発達するから。別に悪いやり方じゃないんだけどね。」

「そうだったな。永島サスペンス系以外は速く読めないもんな。」

「ふつうおかしいよねえ。」

「おかしくて悪かったな。」

「まあまあ。じゃあ、永島。テストの時待ってるぜ。」

宿毛はそう言い残して、自分の席に行った。

「ナガシイ。今からもテスト期間も勉強せずに離れにコンツメですよ。私なんかそれ出来ないからいいよなあ。」

「懂れるんなら、ずっと「デュエモ」とか「バトルアーマー」のゲームやってればいいじゃん。」

「見つかったら没収されるんだけど。」

「……そ、そりゃドンマイ。」

数日後。

「永島。国語何点。」

「37点。」

「八八。国語では勝った。38点。」

「勝ったって。まだ国語だけだろ。この後どうなるかだって。勝負は合計点だろ。」

「そうだったな。わりい。」

「そう言い残すと自分の席に戻っていく。」

「ナガシイ37点か。私23点。」

「あと2点で半分じゃん。せめて半分取るうぜ。」

「まあ、この調子なら合計110点ぐらいだと思っし、またゲーム解禁かな。」

「よかつたな。」

「あつ、そうだ。ナガシイ。電車でGO！の新快速姫路行き。あれどうしても尼崎あまがひきで数秒遅れちゃって高得点でないんだよねえ。ナガシイだったらやりこんでると思うから、今度やってくんない。」

「マジかよ。それ俺も苦手なんだ。特に尼崎。あれって塚本つかもとで早く通過しそうになってわざと速度落とすと痛い目見るんだよねあ。停車位置550mまで130km/hキロでツッコんで一気に減速っていうことやらないと間に合わなくなるからな。」

「でもそれやるとどうしても±(プライム)30cmセンチに収められなくなるらない。」

「いや。そこはうまくやればどうにでもなる。後は時間との闘いでとところか。」

「ナガシイ。それで何点いった。私23万。」

「24万。」

「あつ。じゃあナガシイでも私の記録更新無理かあ。」

「無理だな。」

そのまた数日後。

「えー、これはオープンキャンパスに行った時の感想を書く用紙です。この夏の間公立を少なくとも2校。私立も1校見て……。」

その説明が終わるとあくびと声が出た。

「あーあ。決まってるのに公立も見に行かなきゃなんないのかよ。」

「面倒くさそうだね。」

「できればずっと家にいて模型いじってるほうがずっと楽しいんだけど。」

「アハハ。ナガシイらしいね。」

「そういえば、萌もえはどこに行くか決まった。」

「えっ……。公立はいける学校だったらなんでもいいんだけど、

私立なら宗谷にでもしようかなあって……。」

（何言ってるんだよ。私。）

「へえ。萌らしいな。夢に近づくためなら宗谷に行くのが一番か。」

（ダメだ。私も岸川行きたいなんて到底言える状態じゃない。）

「うん……。」

「自信持てて。実をいうと俺のほうが受かるかなあって思ってる。」

「

「それ絶対無駄。ナガシイ内申点高いに決まってるじゃん。」

「それでも心配になるときない。」

「そりゃ少しはあるけど、ナガシイは大丈夫だって。ナガシイの進

路はみんなが意外に思うほどレベル低い進路なんだから。」

「……。」

「そうでしょ。」

「それもそうか。変な心配かもな。」

笑っている永島の顔がなぜか遠くの人のように思えた。

この回からの登場人物

宿毛佑真

誕生日

4月7日

血液型

B型

身長

164cm

m

3列車 夏 冬

今は夏休みの真ただ中。公立のオープンキャンパスはいよいよ行つて、そこで聞いたことはすぐに頭の中から拭い去つた。8月の第3週。岸川きしかわのオープンキャンパスがある。そこに行つて体験授業を聞き流して、自由に見学できるときにまた鉄道研究部の展示に行つてみた。

展示を行つていたところは昇降口じやうこうぐちのある2階。昇降口から右にかじをきつてつきあたる部屋だった。ドアを開けて中に入つてみると、文化祭より小ぶりのモジュールが展示してある。中にいたのは文化祭の時に見た人たちと同じように岸川きしかわを見に来た中学生。部員の数は文化祭見たときよりも少ないと思つた。今走っている車両は内回りは何か分からないが、外回りは253系「特急成田エクスプレス」であることはすぐに解つた。

「「253系」だ。」

声を上げたくなくても上がつてしまふ。電車を見ると出る癖。しよ
うがない。声を上げたのが影響したのか、目線が自分のほうに向い
ているがお構いなし。「253系」ネククスに近づいて、間近で「253系」ネククス
が走り去るのを見た。

その子の姿と反応の仕方を見て、鉄研部員は声をひそめて、
「おい、善知鳥うつくし。あの子なのか。善知鳥うつくしが言つてた絶対に鉄研てつけんに入
るつていう中学生は。」

「よく覚えてないんだよ。顔つきとか。」

「おい、ふつう覚えてるだろ。物忘れひどすぎ。」

「あの子ですよ。見かけなかったのつて11時ぐらいから30分く
らいの間でしたから。」

「アヤノンはよく覚えてるね。」

「外回りだったし、気付きやすかつたつていうのもありますから。」

「へえ。」

の帽子ではない。運転手や車掌のかぶる制帽だ。

「似合うって。これかぶりたかったら鉄研こいよなあ。」

「それだけで来るかっていうの。ていうか最終的に決めるのは本人なんだから、本人に選ばせないと。」

「でもそそのことはできるのよね。」

「確かにそうだけど・・・。」

「もう決めてますから。」

と言ってかぶせられた帽子を取った。

「もうここしか来るところはありません。絶対にここに来ます。」帽子をかぶせた人に渡して、教室を出た。もうしばらくいればと止められたが、もう帰りたいと言って断った。だが、一つ次の心配がやってきた。もし僕一人の入部だけだったらどうしよう。でも、そんな心配は後か。

それから月日が流れて2月。岸川高校の受験日は2月9日。その日までにやれることをやっていった。

「永島。お前って岸川志望だったんだな。」

宿毛が話しかけてきた。

「何。その言い方。知らなかったの。」

「いや、多分そうじゃないかなあとは思ってたんだけど、本当に同じ進路とは思ってなかっただけ。」

「同じ進路。」

「ああ、俺も北星落ちたら行くところ岸川なんだ。あすこだったらものすごく適当にやらない限り留年はないからな。」

「北星併願かよ。落差ひどくない。」

「そんなのどうでもいいって。俺北星は受かるかどうか知らないけど、岸川だったらどんなバカでも受かるからな。」

その声は周りにも聞こえていた。隣にいたクラスメイトが意外そうに話しかけてきた。

「永島も宿毛も私立岸川狙ってるのか。」

「ああ。」

「ウソ。永島も宿毛も成績いいよねえ。」

「ああ。高校のほうに送られる1学期の成績永島が34で、俺が36。」

「そんなに成績よくて岸川行くの。」

「俺はまだ北星狙ってるけどな。永島は岸川単願で狙ってる。」

「えっ。もったな。それで親なんか言わないの。」

「言わないよ。進路は全部任されてるから。だからどこ行くのが自由。」

「自由でも岸川以外行く気ないだろ。鉄研やりに行くんだから」

「えっ。鉄研やるためだけに岸川に行くの。もつと上の学校とか狙わないわけ。」

「いや、さっき言ったじゃん。岸川以外行く気ないって。」

「二人とも俺より成績いいのにレベル低いなあ。」

「俺が思うに成績いい奴って全員レベル低い高校言って自分の好きなように高校生活送るもんだと思うけど。」

「いや。それは永島と宿毛だけだと思う。」

この話が終了すると、

「もう願書は出したんだしあとは受けに行くだけ。宿毛テスト1時間前になつたらよろしく。」

「おいおい。永島受験会場違うってこと考えとけよな。」

「あつ……。考えもしなかった。」

「おい。ふつうに考えろよ。俺は併願。お前は単願。受験会場が違うって考えてふつうじゃないか。」

「ナガシイはふつうじゃないからそういうこと考えないの。」

クラスメイトと入れ替わりに話に入ってきたのは萌だった。言われてるぞ。ふつうじゃないって。」

「結構前からふつうじゃないのは自覚してるけど。」

「。。。。」

「ハハ。ねえ、ナガシイ。勉強してる。」

「してると思う。」

「うっん。家で模型と遊んでると思う。」

「うん。その考え方正しい。なんか勉強すると体が拒絶反応を起すというか。」

「それはウソでしょ。ただ勉強したくない言い訳じゃん。」

「……。はい。そうですね。」

そんなこんなで2月9日。岸川きしかわ高校を単願で受験。その数日後には・

「あー、受かったかどうか心配だー。」

「ナガシイ心配しすぎ。内申34あって、岸川きしかわ単願。受かんないわけないじゃん。」

「それでも受かってるかどうかは気になるだろ。」

「それは……。」

（なんでだろう。ナガシイにここまで受かってほしくないって思ったことなんて……。いや、そう思ってちゃだめだ。ナガシイは岸川きしかわで鉄研やる。それを止めちゃいけないんだ。そうしなきゃいけない……。でも……。んっ……。）

（高校からは萌もえとは一緒じゃないのかぁ……。えっ。俺何考えてんだよ。宗谷そつやに行きたいって言ったのは萌もえの意思じゃないか。それを止めるなんておかしい。二人とも自由に生きて、もしまた……。その時。その時そうすればいい。）

そう思いを巡らせている間に自分たちの順番がやってきた。僕は岸川きしかわに萌もえは宗谷そつやに合格。

（これで本当に……。）

（……。今は……。でも、いつか言わなきゃ。私が目指してるのはこんなのじゃない。今からでも間に合う……。）

そして、合格通知をもらった日の放課後。

「ナガシイはやっぱり岸川きしかわ合格おめでとう。あすこなら毎日楽しそうだね。」

「ああ、だろうね。萌もえは宗谷そつや。お互い夢に前進だな。」

「そうね。これからお互い夢に向かって歩いてくんだよね。」

「うん。俺は電車の運転手。萌は幼稚園の先生。この二つをかなえるためにはそこに行くのが一番の近道になるのは間違いないんだからな。」

「……。そうだね。」

何かかわす言葉がなくなつたみたいに黙り込む。

「ナガシイ。鉄道研究部って何するんだろうね。」

「よくわからないけど、どっか行ったり文化祭とかで展示やつたりするんだって。」

「よくわかんないって……。それでも入る部活。」

「入る部活だよ。俺岸川行かなかつたら行く学校ないんだから。他の学校はただのトゲだよ。」

「内申34あつてそういう人も珍しいと思うけどね。」

「そうかあ。俺には全部トゲみたいに見えるけど。」

「違うでしょ。ナガシイには岸川はとげを覆うクッションがあるけど、ほかの学校にはそのクッションがないからおりたくないだけじゃない。」

その描写を想像してみる。ヘリコプターに乗っている僕はいま下を見下ろしている。下にはたくさんのトゲ。それもとても鋭い。ちょうど中心ぐらいにはとげが突き出ていないところがある。そこに飛び降りようとしている。

「うーん。当たってるかも。」

「かもじゃなくて当たってると思うよ。」

それから1か月と数日。今執り行われているのは伊奈いな中学校卒業式。中学3年生全員の名前が順番に点呼されて、卒業証書を授与されていく。僕も卒業証書を受け取って、自分の席に戻った。

（ここで、萌もえと話すのも今日が最後か。）

心の中で分かりきっていることを思った。

（ナガシイと毎日話せるのも今日が最後かあ。）

萌もえも分かりきっていることを思った。

卒業式が終わると3年生は保護者と2・1年生に見送られて、体育館を後にする。体育館の次は学校の外へ。あるところまで歩いて全員水入らずになる。

「ナガシイ。帰ろ。」

「お前友達とは話してかなくていいのか。」

「綾たちとか学校同じだし、また会えるし。」

「そう。じゃあ、行くか。」

自分には友達はそんなにいない。別に悲しくもないし、何の未練もない。ただ一つだけ僕を悲しませるのは萌とは違う学校になるという事だけだった。

「これから違う高校だな。」

「嫌なの。」

「いや、そういうわけじゃないけど……。今までずっと話してたのに、これからは話せなくなるんだなあって思っただけ。」

「……。それはそうだけとさあ。でも、県外の高校とか行くわけじゃないし、会おうと思えばいつでも会えるわけだし。」

「それもそうだな。ごめん。なんか暗くなるようなこと言って。」

「気にしないで。ナガシイのことよく分かってる人だから。」

「そうだったね……。」

しばらく黙って数歩。今日はいつもの帰り道がどうしても長く感じてしまう。

「なあ、萌。文化祭とか見に来いよ。待ってるから……。」

「暇だったら行くね。」

「いつも暇なくせに。」

ちよっとの間お互い黙っていた。

「ナガシイ……。創るなよ。あと頑張れよ。」

何をつくるなということなのだろう。でもだいたい想像はつく。

「分かったよ。そっちこそな。」

「……。うん。じゃあね。私こっちだから。」

「おう。じゃあな。」

手を振って僕は萌もえと別れた。その後ろ姿を見送っているとため息が出た。

(結局言えなかったなあ。でも、いつか言わなきゃいけないことか……。これ、本当にナガシイ許してくれるのかなあ。やっぱりウソついてきたから許しちゃくれないのかなあ。)

永島ながしまの歩いて行った方向を見て、考えを巡らせていた。

その時僕は……、

(結局えいなかったなあ。好きって……。大丈夫。萌もえはほかの男子には……)

家のところまで来てそれを思う。ちょっと萌もえの家のある方向を向いてしばらくそのままにいる。

(言えるチャンスはいくらでもある。また、その時が来たときに……)

二度と訪れることがないだろうと思う二度目を心の中で思う。だが、この先に待っていた展開は少なくとも僕には想像できなかった。

3列車 夏 冬（後書き）

気まぐれ投稿みたいになってすみません。
これからもこのような不定期投稿ですが、読んでくれる人には感謝。

4列車 スタート 高校生活

中学を完全に卒業して7日後。4月7日。僕は真新しいワイシャツに腕を通し、ネクタイを締め、黒いズボン履き、ブレザーに身を包んだ。

岸川高校入学式。^{きしかわこうこうがくしき}1年生は9クラス。そのうち1クラスは中高一貫コース。^{ちゅうこういつかん}2クラスは特進か^{とくしん}コース。残りの6クラスがふつうにやっ
ていくコースとなっている。僕は1年5組で、同じ中学校から来た人は僕を含め3人。そのうち一人は僕と同じクラスである。彼とは親友で名前は宿毛祐真^{すくもゆうま}である。もう一人は名前も顔も知らない。

「あーあ。俺は北星^{ほくせい}落ちてここになっちゃったけど、またお前と一緒だな。」

「そうだな。」

「これからもよろしくな。またテストとかになったら勝負しようぜ。」

「ああ。でも・・・、始まってそうそうテストの話っていうのもなあ。」

「テストの話を引き合いにしたのは悪かった。いきなり勉強の話だと遊べなくなるってか。」

「うん。」

「お前は十分遊んでるって。受験勉強だつてろくにしていって我慢してただろ。」

「それでもやったって。受験前の1日前に1時間くらい。」

「それをろくにやってないっていうんだよ。まあ、私立なんて受からないほうがおかしいってところあるからそれでも合格したならいいか。」

「そつ。そういうこと。」

「八八。永島^{ながしま}らしいな。永島^{ながしま}の場合は結果しか気にしないからな。その頭ある意味うらやましいよ。」

「何。宿毛俺すくもの頭みたいなほうがいいって思ってる。」

「自分の好きなことしか頭に入ってこないんだもん。そこまではつきりしてる頭だったら何かと苦労することがないのかなあってこと。」

「そうかなあ。」

「じゃあ、考えても見ろよ。お前高校決めるときここに鉄研てつけんがあるから来たんだろ。他のところまともに考えてたか。」

「ああ、確かに。」

(分からせるにも一苦労かよ……)

体育館に移動しながらこんな話をする。今日は部活紹介があるそう
だ。まあ入る部活も決まっているのだが……。

「永島ながしまはどこをどう考えたって鉄研てつけんだろ。俺どの部活にしようかなあ。」

「宿毛部活入ろうって思ってるの。」

「いや。出来れば入らないほうがいいなあ。まあ、強制だったら適当なところ入っとして活動に行かないっていうのも一つの手だな。」

「入るんだったら活動しろよ。」

「もう部活動にはうんざり。永島ながしまは運動部に入ってたからそう感じないんだって。」

「確かに運動部じゃなかったけど、情報処理部でも後々面倒くさくなっただぞ。」

「お前その時代から遊んでたんじゃないのか。」

「うん。インターネットいじってKATOとかTOMIXトミックスのインターネットで好きな車両の再生産とかいつかなあってみてた。」

「やっぱりやるのはそれかあ。ちゃんとタイピングとかやってたんだろうな。」

「やってはいたよ。2年生までに表計算2級取ってスピードは3級まで取った。」

「……なあ、永島ながしま。気づいてはいたけど、お前活動と遊びがごっちゃになってないか。」

「えつ。」

永島ながしまのこの反応には正直困った。

中高一貫ちゅうこういっかんコースをのぞくクラスの生徒全員が集まったのが13時10分ごろ。始まったのは13時20分きっかりだと思いたい。まず始まるのは運動部の紹介。運動部なんて入る気はないし。運動部の部活紹介はとにかく耳から入れて耳から出した。頭をただ通り過ぎていくだけ。なんといつているのかも忘れた。

何分かつた後に5分間の休憩をはさむ。これが終われば文化部の紹介。まず一番に生物部の紹介。その次に鉄道研究部の紹介となっていた。

(これ以外聞かなくていい。)

そして、いよいよ鉄道研究部の紹介。出てきた人は2人。1人が演説台に行ってもう1人は胸の前で何かを広げた。あの広げた物は間違いなく鉄道模型である。その車両が何なのかは分からなかったが、何かと白が強調される車体である。583系「急行きたくに」だろうか。その傍らで語っている人はこう言っている。

「僕たち鉄道研究部てつどうけんきゅうぶは3年生4人。2年生2人の計6人で活動しています。部費は年間14,000円と多少高いですが、年に一度臨地研修りんちけんじゅうと言う旅行りょこうに行つて東北とうほくなどいろんな所へ訪問しています。また地域からの要請ようせいで学校以外でも展示を行つております。…」

(部費は14,000円。それを差し引いても入る価値はある。いや。入らなきゃ岸川に來た意味がない。僕は勉強をここに來たんじゃないんだ。それは二の次。)

また別の人は、

(鉄道研究部かあ。私がここに來た半分の目的はあれ……。でも、女子が入つていいの。逆にそういう面でいじられたくないし……。)

それが終わるころ。僕の頭の仲は鉄道研究部のことだけでいっぱいになった。部活紹介が終わつて教室に戻ろうとするころ。宿毛すくもが話しかけてきた。

「頑張れよ。部費も高いみたいだし。」

「あんなの関係ないよ。関係すんのは、入るか入らないかだ。」

「それもそうだな。」

「宿毛は部活何にするんだよ。さっきはどうでもいいやつに入っとけばいいって言ってたけど。」

「なんていうかなあ。こういうときに限ってそういう部活って見つからないんだよなあ。」

「あつ、なんかわかる。自分に合ってるの探してる時って自分が気に入ったのは何か都合が悪くて、気に入ってないけど都合がいいっていうことだろ。」

「そんなところ。でもさっきの説明聞いて、俺情報部にでもしようかなあって思ってる。やっぱりこれからの時代パソコンいじれなきやついてけねえだろ。さすがに基本操作ぐらいはできたほうがいいかなあつて。」

「ふうん。」

「宿毛にそう返事を返すと自分の肩が少し重くなった。」

「どうした。」

「落ち込み気味の僕が少し気になったらしい。」

「なんかここまで来ると鉄研入るの俺だけなんじゃないかなあつて思えてきた。」

「なるほど。もし一人だったらお前が自動的に次期部長になるんだもんなあ。」

「俺部長なんて柄じゃないし。出来れば俺よりもしつかりしたやつが入ってくればいいなあつて。」

「ストライクゾーンの狭い要求だな。残念だけど俺は鉄研にはいかないぜ。部費14,000円なんて到底払えないからな。」

「そこをなんとか。お代官様。」

「他当たれつて他。」

このやり取りを見ている人がいた。すらりと伸びた僕よりも身長のある人が。

教室に戻ると担任から部活登録届の紙をもらった。顧問はうちのク
ラスの副担任安曇川正司先生らしい。部活登録届をもらうと時間は
すでに15時を回っている。全員10分間ぐらい自由にしていた。
その10分間が過ぎると遊びを危ぶむ宣言があった。

「ええ、これからは毎日ノート3ページやって出してもらいます。」

(マジかよ。)

(これじゃあ北星と同じじゃん。)

「土曜と日曜合わせて6ページを次の週の月曜日に出して、ゴール
デンウィークなどの連休中は1日5ページやって出してもらいます。
この勉強は絶対みんなのためになるからな。この高校生活でどこま
で頑張れるかが……。」

(知るか。)

その悪夢のホームルームが終わって……、

「永島。四ツ谷先生のあれ。どう思う。」

「俺たちを殺す気かよ。四ツ谷先生。」

「殺す気はないんだろうけど……。永島は当然やらないんだよな

あ。」

「やるわけねえじゃん。あのなのやったらいつか死ぬ。だから反抗
してノートは出さない。……。そう聞く宿毛は出す気あるのか。」

「ふと、これやったら永島を抜き返せるかなあって思った。」

「やってみれば。ノート出したほうがいいか出さないほうがいいか
はそれで決着がつく。」

「出したほうがいいだろ。……でもそれをすると対等じゃないか。
永島が出さないなら、俺も出さないでお前に勝負しかけたほうがいい
か。でないとハンデ大きいからな。」

「なんだ。結局宿毛も出す気ないじゃん。」

「だってやりたくねえもん。北星受かってたら俺も考えたかもしれ
ないけど。」

アルミ可撤出てきている下駄箱の下から2番目の手をかけて、ロッ
クを解除。手前に引っ張ると靴の入った口がぼっかりと開く。上履

きを靴に履き替え、両開きになっている昇降口を出る。その先には階段があつて10段くらいの階段の2本立てになっている。最初の10段を下ると進行方向右側にまた別の階段が通じてきている。

「あれ、永島そつちから帰るのか。」

「違つつて。鉄研のあるとこ体育館のステージ裏つて言つてただろ。だつたらこつちから言つたほうがいいのかなあつて。」

「ああ、そういうことが。」

その階段を下ると1回の昇降口に通じる。そこを左に曲がつて2・3年生の駐輪場のあるところへ向かう。ちよつと開けたところに出ると右手側に2・3年生の立体駐輪場。左手側に体育館の入り口がある。その入り口からステージ側を除くとステージの上にか何か置いてあるのがわかる。

「ステージ裏じゃなくてステージ上じゃないのか。何か置いてあるし。俺が思うにあれの後ろに部室みたいなものがあるとは到底思えない。」

「どこにあるかなんて今はどうでもいい。それより、分からなかったら安曇川先生に聞けばいいよ。」

「そつちな。鉄研の顧問らしいし。」

宿毛は歩き始めて、僕にさよならを言つて帰つた。

案内があつた体育館ステージ裏に向かおうと思つたが、ここで路頭に迷つた。すると誰かが声をかけてきた。振り向いて見るとクラス
の・・・誰だつて。

「佐久間だよ。永島何してんだよ。」

「鉄研見に行こうかなつて思つてて・・・でも、ステージ裏つて言つてただけでどこにあるのか分かんないからここに突つ立つてるつていう感じだけだ。」

「鉄研つ。永島も鉄研はいんの。実は俺も鉄研に入ろつて思つてんだ。つつかそのためにここ来たくらいだし。どうせ見に行くんなら一緒に行こうぜ。」

「ああ。」

「でも……、場所が分かんないってというのは俺も同じなんだよなあ。」

「安曇川先生に聞けばいいじゃん。あの人顧問だし。」

「なんでお前聞かなかったんだよ。」

「んつ。多分頭がそこまでまわんなかったんだよ。俺バカだし。」

職員室に戻って安曇川先生を呼ぶ。すると、居合わせた先輩らしき人を呼びとめた。

「鷹倉君。この2人鉄研見学に行くって言うてるから、部室まで連れてって。」

「はあ。アド先生。僕はただのパシリですか。あつ後、部活登録。」

「はいはい。分かりました。じゃあ連れてって。」

安曇川先生は鉄研部内ではアド先生と呼ばれているようだ。誰が命名したかは知らないけど、まあいいか。そして呼びとめられた鷹倉先輩という人はいかにも迷惑そうな顔をしている。しかし、その顔も誰かを見てからは変わった。

「絢乃。こいつら部室まで連れてって行ってやって。」

「ハクタカさあ。そういうことするのやめなよ。」

と言ってから僕達のほうに顔を向ける。するとため息をついて、

「分かったよ。場所教えるだけでも教えとくわ。だから案内終わるまでは待つてるよ。」

「ハイハイ。」

「で、ハクタカ。あたしの部活登録届も出しといてね。」

「お前なあ。」

「じゃあ、行こうか。」

絢乃と言った人は紙をハクタカという人に渡して、すぐに僕達を連れていってくれた。

「鉄研に入部かあ。君達ってなんか詳しいことってある。」

「俺は新幹線のことほだいたい分かりません。」

まず佐久間が口を聞いた。

「俺は電車のことならだいたい……。」

「そう。電車のことと話をするなら先輩にいい人がいるんだけどなあ。」

話しながら、体育館のグリーンベルトを歩く。端まで来るとドアを開けて中に入る。そこで体育館用のスリッパに変えるように促されて、体育館内に入る。中ではバスケット部が準備を始めている。どこまで行くのかと思っているとステージの手前で左にかじをきつた。すると目の前にドアが現れる。そのドアを開けるとステージに上がるための階段。それを上ってステージに上がる。ステージを無視して、奥側の狭い通路に入る。そこをすするとすり抜けて、さっきいたところの反対側に来る。その前にはまた階段。それを7段上ると小さな踊り場を介してまた階段。この位置まで来ると上に二つのドアがあることを確認した。絢乃という人はそこまで来ると二つあるうちの左側のドアを指差して、

「あつちがあたし達の部室。普段は鍵がかかっているから、来たいときは安曇川先生か吹奏楽の山科先生に鍵をもらって開けてね。これで部室の場所分かった。」

「あ……、はい。」

「それじゃあ。今日は活動ないから。不定期っていうのも不便だねえ。ああ、そうそう。名前言ってなかったね。あたしの名前は楠絢乃。とりあえず部員だからよろしくね。」

そう言って来た道に戻っていった。僕と佐久間はしばらくその場にいたが、早く帰りたいという気持ちに押されて帰った。

今回からの登場人物

佐久間悠介 誕生日 1月15日 血液型 B型 身長 174cm

鷹倉俊也 誕生日 3月22日 血液型 B型 身長 173

cm

楠絢乃 誕生日 12月22日 血液型 B型 身長 16

7cm

安曇川正司（アド先生） 誕生日 10月21日 血液型 B型

身長 163cm
1年5組担任 四ツ谷よつや

5 列車 岸川高等学校鉄道研究部（KRC）

その頃もえ萌が通い始めた宗谷学園では……。

「萌の彼氏は当然鉄研入ったんだよねえ。」

「入らなきゃ岸川に言った意味ないしね。」

「ていうか萌もえなんで岸川行かなかったのよ。そうすれば彼氏とも同じ学校だったのに。」

「ナガシイが宗谷に行くのが一番だって言ったからね。それがあるとなんか行きづらいだろ。」

「ああ、そういうことか。それだと行きづらいわなあ……。でも寂しくない。」

「そこまで子供じゃありません。ナガシイがいくら大きい子供だからって一緒にしないでよ。」

「永島君ながしまにあつたら言ってやるのかなあ。萌もえが永島君ながしまのこと大きな子供って言ってたって。」

「言うてもいいよ。本人がそう言ってたんだから。」

「……。」

（手回しが速かった……。）

翌日。部活の中身はまだ見ていないが、部活登録届ぶかつていじろくとていけを出した。数日後。今日はアド先生から活動日だと聞かされて勇んで楠先輩くすのきに教えてもらった部室に向かった。

だが、ドアの前に立ってドアを押してみると開かない。鍵がかかっている。

（あれ。ドアって押せば勝手に開くっていうやつじゃなかったっけ。）

しばらくすると佐久間さくまも合流して、またしばらくの間ドアの前で突っ立っていた。

「あれ、新入部員。」

下から声がする。踊り場のほうを見てみると女子の顔がこちらをの

ぞきこむ状態にある。

「サヤ早く来てみ。新入部員いるよ。」

その人はサヤという人を呼んだ。ちよつとするとそのサヤという人が顔を出した。

「あれ、なんで前に突っ立ってんの。入ればいいじゃん。」

第一声はこれかよ。この人はバカなのか。それとも、ウケを狙っているのか。

「サヤバカだろ。鍵かかっているから入れないに決まってるだろ。」

「あれ、鍵は善知鳥（ぜんちどり）が持つてるんじゃないの。」

「あたしが持つてるわけないでしょ。だからサヤが取って来てよ。」

「サヤ先輩も善知鳥（ぜんちどり）先輩も自分で鍵取り行くとかして下さいよ。」

聞き覚えのある声は楠先輩（くすのせな）の声だ。その声がしたあとサヤという人が階段を上って来て部室のドアを開放した。

「あれ来てたんだ。前に鍵は安曇川先生（あどがわ）か山科先生（やましな）に貰ってつて言ったのに。」

僕達の顔を見つけるとそう言って、

「ちよつと狭いけど入れば。電車好きにはたまらない部室だと思うし。」

促されて中に入った。入ってみると確かに狭い。ドアのすぐ横にはレールの入った箱が置かれている棚。レールの他に転車台の模型も置かれている。ドアの左側にはカラーボックスみたいなのが2つ置いてある。ぱつと見モジュールの材料になりそうなものが置かれていた。その向こうには木の棚があり、そこには製作中のモジュールが置かれている。そして、右側奥の方には白いケースに詰まった引き出し。中はカラーボックスの中身と同じモジュールの材料だろう。真ん中あたりにはこの狭い部屋に長机。それも2つはベコベコになり、そのうちの1つには製作中と思われるモジュールが3枚置かれている。またそのうちの1つには木の棚が置かれており、そこにはE231系の写真とモアイ像が置かれている。意味はあるのだろうか。そして、その長机に対応するように長椅子が一つ。後は折り

たたみ椅子が3脚。学習椅子が5脚ほど置かれている部室だった。

先輩達は思い思いの席に腰をかけて、休んでいる。さつきサヤと呼ばれた人はPFPをやり始めて、善知鳥という人と楠先輩は携帯電話をいじり始めた。全員マイペースすぎて逆に困るというか・・・しばらくそんな状態が続いていると、また人が来た。だが、その人はドアを開けるとすぐにドアを閉めてどっかに行ってしまった。

「ナヨロン。」

いきなり善知鳥という人が叫んだ。ドアに突進して、今帰ったと思う人を捕まえて、部室の中に引きづり込んだ。

「おい。善知鳥。首掴むことないだろ。いつもギャグでやってるの分かってるじゃないか。」

「半分冗談じゃないって気があるから。つい癖で。」

「それはウソだろ。ていうかお前からこのこととかいろいろ言っつてやれよな。1年生は分かんないんだから。」

今いる3人を叱ってからその人はこう説明してくれた。

「とりあえず名前だけは言っとくわ。俺は名寄真佐哉。よろしく。」

「あだ名ナヨロンな。」

「余計な事言っつな、善知鳥。まあいいか。多分お前らも強制的に善知鳥にあだ名つけられると思うから・・・。とりあえず中のこと説明しとくけど、お前らの後ろにある棚と木の棚でちよつと隠れてるところ以外は開拓していい。今言っつた部分開拓すると死ぬからやめとけつてことをまず最初に言っつとく。で他は、その後ろの白いケースと、こつちのボックスの中にはモジュール作りのための道具。まあ作らなきゃ関係ないけどな。それで木の棚の下にあるのが、ボンド水と工具。と、無いとは思っつけど間違っつてボンド水飲むなよ。飲んだら食道と胃が固まるから。まあ今言っつとくのはこれだけかな。」

「お前ら自己紹介だかなんかやっつたか。」

「やっつてないよ。」

「じゃあやれよ。1年生来てるのにゲームとか携帯は失礼だろ。」

「分かったよ。じゃあ名前くらいは言っとくわ。」

それまでPFPをいじっていたサヤという人がゲームを一時中断して、

「俺の名前は北齋院大智きたさやだいち。漢字難し（むず）いからサヤとかって呼んでくれていいよ。」

「あたしは善知鳥茉衣じゅんちまゐ。電車のこととか全然分かんないけど、分かんないことあつたら聞いて。でこっちの彼女がハクタカの追っかけの……。」

「ちよつ、善知鳥先輩。余計なこと言わないでください。」

「えつ、だつてそうじゃん。」

「そうじゃありません。」

「顔真つ赤で説得力無いよ、アヤノン。」

「だから、善知鳥じゅんちまゐはそういう余計な説明しなくていいんだつて。」

「ええ。いいじゃん。」

「いやそれがよくない。」

3年生が言い合っている間にまた一人やってきた。その人を見て、

「アヤケン。オヒサア。」

僕達を見ると、

「新入部員。」

「ああ、そうだよ。」

「じゃあ、名前は言っとくな。綾瀬健斗あやせけんと。部活じゃアヤケンで通つ

てるからそう呼んでもいいよ。」

ざつと自己紹介を済ませる。

「そついやあ、お前らの名前聞いてなかったな。1年何組でどこに住んでるかとか名前言ってもらうか。まずそっちののっぽのほう。」

「1年5組の佐久間悠介さくまゆうすけです。涼ノ宮すずのみやに住んでいます。」

「涼ノ宮かあ。案外近いね。」

今度は指を僕のほうに向けて言えと促す。

「1年5組の永島智暉ながしまともしです。小楠おくすの中瀬なかせっていう所に住んでいます。」

（小楠おくすの中瀬なかせ……永島ながしま……）

「佐久間悠介に永島智暉かあ。分かった。」

「部員は全員で6人って言ってましたけど、今ここに居るのは5人ですよええ。」

「前職員室の前であたしと話した人がいるでしょ。あの人が6人目だよ。名前は鷹倉俊也っていうんだけどね。ハクタカってみんなに呼ばれてるからそう呼んでもいいよ。」

噂をしているとその鷹倉先輩が来た。

「彼がさっき言った鷹倉俊也君。前あってるから分かるよね。」

「ああ、はい。」

その後佐久間は足早に帰り、僕はしばらく部室においてあった車両で遊んだ。

「永島ってどんなあだ名がいい。ないならあたしの独壇場で決まるけど。」

「ああ、じゃあ。ナガシイでお願いします。」

「分かった。永島イコールナガシイだって。皆覚えるよ。」

「……。」

「そのあだ名って何か関係あるんですか。」

「別に関係ないよ。ただ鉄研の文化みたいなやつ。この部活の部員は全員友達だからさあ。先輩と後輩の関係っていうのも少しは大事なんだろうけどあたしはそんな固いこと言わなくていいと思ってるだけ。」

「……。」

「は……反応無っていうのも少しらいんだけど。」

「善知鳥先輩インパクトありすぎなんですよ。1年生からヒカレル対象だと思いますけど。」

「そうか。ねえ、ナガシイあたしってそんなに個性的か。」

「えっ……。」

「ほら、永島が困ってるじゃないか。」

「いやあ、ごめん。いきなり難しい質問しちゃって。まあそんなに固くならなくていいってだけ。いいよ、あたしに限ってはタメ口で

も。」

「タメ口聞くんならナヨロンのほうがいいんじゃないか。こいつ電車詳しいし。」

「それだけでそうするなつうの。」

「ウソ。それは冗談。」

「どこまでが冗談で、どこからが本当なんだよ。」

「よし、質問変えよう。担任誰。」

（こいつは人の言うこと聞いているのか……。）

「えっ。四ツ谷先生ですけど。」

「うわっ。四ツ谷かよ。」

「四ツ谷かあ。お前まだよかったな。」

先輩たちがこつこつというのは十中八九あのことだろう。そのことを先輩に聞いてみると夏休みや冬休みに1日5ページ出されるといふことは本当。そして、出さないといつか付けが返ってくるということを知った。

「へえ。そうなんですか。」

「まあ、ナガシイならどうにかなりそうだね。バカそうだし。」

（いや。こいつバカじゃないだろ。）

ふと時計を見るともう18（6）時だ。

「あつ、すみません。今日はこれで。」

「ええ。もう帰っちゃうの。もうちょっと長くいればいいのに。」

「帰るって言うてるのに引き留めちゃいけないだろ。」

「次の活動日いつですか。」

「明日だけど。」

「じゃあ、明日も来ます。失礼します。」

ドアを閉めて帰路についた。

その後の部室では……、

「すごいのが来たな。」

名寄なよろがつぶやいた。

「すごいって。ナガシイなんかすごいところでもあるのか。」

「いや、あいつ自体がすごいって意味じゃない。永島ながしまの家がすごいって言った方がよかったかな。」

「どついう意味だよ。」

「あいつ、小楠おぐすの中瀬なかせってところに住んでるって言ってただろ。たぶん間違いないと思う。あいつ遠江急行こっけいの社長の孫だ。」

今回からの登場人物

北齋院大智きたさいだいち 誕生日 11月19日 血液型 B型 身長

169cm

綾瀬健人あやせけんと 誕生日 3月30日 血液型 AB型 身長 167

cm

名寄真佐哉なよろまさや 誕生日 9月3日 血液型 O型 身長 17

1cm

善知鳥茉衣ぜんちまゐ 誕生日 6月4日 血液型 A型

身長 165cm

5列車 岸川高等学校鉄道研究部（KRC）（後書き）

珍しく連続投稿です。今後連続投稿は恐らくないと思いますが、読んでくれる人には感謝。

6列車 彷徨い娘

部室の窓を割るほどの絶叫が5秒間続いた。

「マジ。ていうかふつうそういう人って北星とかに行かされるんじゃないの。」

「行かなかったんだろ。あすこは完全な進学校だし。」

「そりゃあ置いといて、なんでそう・・・ってさっき言ったか。」

「でも、ナガシイってそういう風に見えないよね。」

「いや、あの性格でそう見える方がすごいと思う。」

「もうその話やめればいいじゃないですか。同じ部員なんですから。そういう目で見ない方がいいですよ。」

楠がこの話を辞めさせてからはいつもと同じバカ騒ぎに戻った。なお、この部活のクオリティはバカ騒ぎにある。

その頃運動場のほうでは・・・。

「友紀はソフト部でしょ。私もソフト部に入ろうかな。」

「そう。留萌は入ろうって思ってるんだ。木ノ本は。」

「えっ。まだ迷ってるけど・・・毎日練習はきついなあ。」

「おい。中学のときだってそうだろ。だいたい運動部なら毎日練習しないとダメでしょ。」

「榛名が言いたいのは中学の途中から部活来なくなってたし、続けられるかどうか不安なことですよ。」

「それもあるけど・・・。」

（入るか入らないかは別として一度鉄研部も見に行ってみるかなあ。）

ソフト部が練習する風景はもはや白黒でしか映っていない。色づいて見えていたのはオーブンキャンパスで鉄研がやっていたあの展示だった。ただ、女の子が鉄研に入っているのだろうか・・・。その口論が続いていた。

翌日。

「永島^{ながしま}。ノートやってきたか。」

「昨日言ったじゃん。やる気ないって。」

「いや、いちばん最初ぐらいはやっといたほうがいいって。1か月くらいやってゴールデンウィークのあたりから面倒になりましたって言えば通るって。多分お前だけだぜ。1日目からやってないって
いうのは。」

「……。」

ちよつと心配になったが、そうでもなかった。逆にやってある人のほうが珍しかったぐらいだった。

「出して損じゃないのか。宿毛^{すくも}。」

「いや。損とは思ってない。でもあれやるのは骨がいるってことは分かった。書くスピード速い俺でも2時間はかかったぜ。さすがに90行はきついなあ。」

「そんなこと言わないで。よけい痛みがひどくなる。」

その放課後。

(鉄研^{てつけん}かあ。)

壁に貼り付けてあるポスターを見てふと思う。そう言えば岸川に来てから鉄研^{てつけん}のこと以外正直考えたことがない気がする。

(女の子でも見に行つていいんだ……。よし。)

決心をきめてポスターが指示する部室のあるところまで行つてみることにした。だが、体育館のところまで来て足が止まる。ここに来るとバスケット部の目がある。鉄研^{てつけん}を見に来たと思われたくないというのも少しある。

すると、今来た方向から一人走ってくる人が見えた。矢のごとく自分の前を通り過ぎて、ドアノブに手をかけた。

(鉄研^{てつけん}部員……。)

その人からは何かと自分と同類のような気配がする。思い切つて声をかけてみた。

「ねえ。君、鉄研^{てつけん}部員。」

顔をこちらに向ける。

「そつだよ。・・・見学に来たの。」

とりあえずここははいと返事をする。そつでなければここに来た意味がない

「そつ。じゃあ、昇降口で靴替えてくれば。そうすれば、ダイレクタで帰れるから。」

「・・・分かった。替えてくるけど、私部室の場所分かんないんだけど。」

「分かった。戻ってくるまで待つてるよ。」

待たせては悪いと思いつぐに皮靴に替えて戻った。戻るとさつきの方が約束どおり待っている。その後はその人に促され、靴をスリッパに替えて、バスケット部の隣を通ってステージ裏の通路を通って階段を上がる。左側のドアに手をかけて開けようとする鍵がかかっている。

「開けんの面倒くせえなあ。」

独り言を言つて、その場に座った。しばらく立ったままだったが、「ねえ。カギ取りに行かなくていいの。」

「そのうち先輩が来るつて。それまでこのままでいいよ。」するとその先輩が来た。先輩もまた面倒くさいと言つてその場に座る。次の人もそつだ。誰か取りに行く人はいないのだろうか。すると下から怒った声がする。その声を聞くと先輩の一人が腰を上げてドアを開けた。

部室内に入ると携帯電話使い放題。同じ一年生と思われる人は木の棚のほうから車両を取りだして、机の上に置かれているモジュールで遊び始め、他の人は携帯電話をいじるかPFPでゲームをし始める。

「よーす。皆。」

後ろからすごく大きな声だ。ただ、今後ろから入つて来た人は男子ではない。女子の声だ。

「おお、新入部員。これでナガシとユウタンと合わせて3人目かあ。」

「えっ、マジ。」

「サヤ先輩今気付いたんですか。」

「しょうがねえだろ。こいつはスゲー鈍感なんだから。」

「まだ部員になるとか限らないです。今日は部活見学に来ただけみたいですから。」

「へえ。でもうれしいよ。名前なんて言うの。」

「木ノ本榛名です。」

「榛名ちゃんかあ。で、ちなみに榛名ちゃん電車好き。」

「・・・まあ、少しは。」

「へえ。あたしは電車全く分からないけどよろしく。善知鳥茉衣よ。」

それで、そこでゲームやってるのがこの部活の部長の北齋院大智で、

奥で携帯いじってるのが綾瀬健斗あやせけんとで、もう一人携帯いじってるのが・

・・・ねえ、サヤ。ハクタカって名前なんだっけ。」

「3年生分かって2年生分かってないってなんですか。鷹倉俊也たかくらしゆんやです。」

少々あきれ気味になっているのは分かる。

「それで、そこで遊んでるのが、同じ1年生の永島・・・。」

「智暉ともしきです。」

「そう。智暉君だ。」

（なんてハイテンションな部活だよ・・・。）

「まあ、部員は後2人いるんだけどねえ。今日ナヨロンとアヤノンとユウタンはどうした。」

「ナヨロンは補修。」

まずアヤケン先輩が答える。それに続けてハクタカ先輩が、

「絢乃あやのは日直ひちひら。」

と答えた。

「じゃあ、来るっていうことだね。」

「佐久間さくまは帰ったと思います。」

「帰ったって。面白いのに帰るなんて本当にやなやつだな。」

「まったくだ。この部活に来なくて何が面白い。」

「そこまでいう人はごく稀だと思います。」
「そうか。」

「ぼ……僕の場合は家でも十分楽しいですけど。」
「それはそうだろうな。」

振り向いてみるとそこにいたのはナヨロン先輩だ。

「あれ、ナヨロン補修じゃないの。」

「補修だけど、その道具ここに忘れてったみたいで探しに来ただけ。」

「多分、これだろ。はい。早くしないと補修に遅れるぜ。」

サヤ先輩がその補修道具をナヨロン先輩に手渡す。

「大丈夫。もう間に合うとか思っていないから。後、これサンキューな。」

その後楠先輩も合流。僕は昨日と同じ6時くらいまで遊ぶ。6時になると時間だと言って帰ろうとした。見学に来た木ノ本もほぼ同時に帰ると言った。

部室を出て、足早に階段を下りる。

「永島君。ちよつといい。」

まだ部室のドアの前に立っている木ノ本に止められる。

「いいけど、何。」

「私って……鉄研に入ってもいいと思う。」

（なんじゃそりゃ。）

今回からの登場人物

木ノ本 榛名	誕生日	8月13日	血液型	O型	身長	160cm
むらたんの 室蘭 友紀	誕生日	7月1日	血液型	A型	身長	162cm
るもせいの 留萌 さくら	誕生日	7月20日	血液型	A型	身長	157cm

m

6列車 彷徨い娘（後書き）

こういう感覚って書きづらい・・・。
思い切って女子鉄も出してみました。

7列車 またまた新入

いきなりそう聞かれても……。僕には入れればいいじゃんと答えるしかない。

「入ろうと思ってるなら、入れればいいじゃん。」

「でも、私女の子だよ。女の子が鉄研てつけんに入るってなんか変じゃない。」

「変じゃないだろ。先輩の中でも女子いたじゃん。」

「あの2人は違う。マニアじゃない。……あの人たちは旅行ができるからこの部活に入ったって言うてたじゃん。でも私は入るならそんな理由で鉄研てつけんに入らない。私は言っちゃえばマニアなの。」

「ならなおさら……。」

「でも、女の子が鉄研てつけんとかそういう部活に入ってるの良かった。一度降りた階段をまた上る。」

「そんなの関係ないよ。なにに興味持とうが、どんな部活に入ろうがそれはその人の自由だろ。木ノ本きののもとが好きなようにすればいい。」

「……。」

「もし入りたくないなって思ったら、中学で入ってた部活にでも行けばいいじゃん。もちろん、その部活が自分にとって楽しければの話だけだ。」

今度は上った階段を下りる。

「永島君ながしま。ありがとう。ようやっとどうすればいいか分かったよ。」

「そう。んじゃあサイナラ。」

階段を下りてさっきの勢いで帰っていった。ステージの向こう側にチラッとその姿を捉えて、

(なにに興味持とうがその人の自由かあ。)

翌日。

「蘭らん。ちょっといい。」

「何。木ノ本きののもと。入りたい部活でも決まった。」

「うん。私鉄研てつけんはいる。」

「……やっぱり。そうだよ。ソフト部来たって木ノ本きのもとにはきつただけだもんね。」

「まあね。そういえば、さくらはどうするって。」

「留萌るもいはソフト部入るだって。まあるもいを辞めて鉄研てつけんに行きそうなどころはあるけどね。」

「……。」

しばらく友達の室蘭友紀むつらんゆきを見つめた。

「どうした。あたしの顔になんかついてる。」

「ううん。なんか蘭はこうなること分かってたのかなあって。」

「分かったかあ。分かってたらあたしは神だね。……でも、そうなるのかなあ。木ノ本きのもと中学に入ってからだんだん元気がなくなってきたじゃん。だから木ノ本きのもとが好きな鉄道でどうにかなるかなあってね。」

「やっぱり分かってたじゃん。」

「いや、でも女子の入る部活じゃないって敬遠けいえんするとは思ってたけど。最初はマジで敬遠してたし……。」

「途中経過はダメダメでも結果オーライだろ。」

「だな。……鉄研てつけん入るからには楽しんでこいよ。そこでいい彼氏とかもできるだろうし。」

「さあそれはどうか。」

「まさか、もういるとか。」

「えっ……。い……今はいないよ。」

「まあ今はそんな話どうでもいいか。」
話は授業によりここで中断にされた。でも伝えたいことはちゃんと伝わっているだろう。

その後木ノ本きのもとはもう一人の親友留萌るもいさくらにも鉄研てつけんに入るといふことを伝え、同日。部活登録届を提出した。

その頃5組では……。

「永島ながしま。今日は出しといたほうがよかつたんじゃないのか。」

「確かにそうかもな。でもどんな奴でも続いて1か月だろ。早い奴は三日坊主で終わるにきまつてる。」

「お前の場合はやらすじまいだもんな。」

「だってやりたくないもん。あんなのやるくらいなら家でずっと模型いじってるほうが楽しい。俺がここに来た理由は……。」

「鉄研やるためであって、勉強は二の次だろ。それは分かっているけど、出さなかったやつお前だけみたいだったから絶対ホームルームの時にたたかれるぜ。」

「たたかれようがどうってことねえよ。ていうかそれで定期テスト俺の上に行ってくれるやつがいれば俺にとっては大歓迎だけだな。」

「それは、俺か。それとも、また未知の人間か。」

「できれば、お前。」

「ないな。お前の上あきらめたわけじゃないけど、絶望的だと思う。」

「宿毛すくもの言ったことは当たった。」

「永島ながしま。お前だけだぞ。ノート3ページ出してないのは。お前はできるんだからこれやってもっと上狙うべきだ。」

（狙い気ないのに。）

「はい。じゃあ、さらっとやって持ってきます。」

とか、適当に返事をしておいた。

「あれ言ったら余計ヤバいんじゃないか。」

「ヤバいな。でも出す気はない。死ぬから。」

「その死ぬっていうのは当たってるな。俺も9ページやって出してるんだけど、あの9ページだけでもしんどいって思った。あれは永島ながしまの言うとおり続く人でも1か月だと思う。」

「だろ。やらないでもそれが伝わってくるんだから異常だって。それならノート代を払わずに自分の小遣いにしたほうがよっぽど賢い。」

（永島ながしまにとつてはそれが賢い選択なんだな。）

「つつか宿毛すくもはあれやり続けるの。」

「あれ1冊終わるまではな。それ以降はやれない。つうかやらないと思う。」

「そう。んじゃあ。俺今日も鉄研てつけんやってくから。」
「おう。じゃあな。」

その後ろ姿を見送っている間

（永島ながしまのやつ。鉄研てつけんあるっていう日だけ元気だな。坂口さかぐちと一緒にやなくなったからか。いや。そんなことあまり首ツッコまないほうがいいか。あいつの選んだ道だし。）

その頃宗谷学園そうやがくえんでは・・・、

「萌ちゃん。今日何か部活見てく。」

「それだつたら綾あやだけで行けば。私情報部に入る気もないし。」

荷物をまとめて、カバンを背負う。すると、すたすた昇降口のほうへ歩いて行った。その後ろ姿を磯部いそべと端岡はしおかが見送る。

「萌ちゃんどうしちやっただらう。情報部にも愛想つかしっちゃったのかなあ。」

「そうじゃないの。」

「ナガシイ君と一緒にじゃないから。」

「それかなあ。あたしはもっと別な理由だと思うけど。」

「例えば。」

「・・・。すぐには思いつかないって。萌もえの考えるパターンって永島しま君でないと分かんないくらいだと思うし。」

「そこまでかなあ。」

「そこまじゃない。つか話ズレてる。あたしが思うにもう部活には入りたくないんじゃないの。なんかに専念したいっていうのかなあ。そんなこと読み取れるんだよねえ。」

「なんかに専念したいって。何に専念する気よ。ナガシイ君との恋愛。」

「それじゃないと思う。永島ながしま君のことはそっちのけじゃないのは分かるんだけど・・・。」

（私ってこれからどうすればいいの。ナガシイと同じ進路に行くた

めには観光系の専門学校かなんかよねえ。でも、どの学校に行けばいいの。それが全然分かんない。少なくとも浜松にあるっていう国際観光と大原はなしね。あんなところ言ったらつてろくなものにはなれない。なんかナガシイには知られたくないし……。どうすれば……。)

またその日の放課後。鉄研の部室にさらに3人が押し掛けた。その3人は全員中学生で名前は背が高い順に諫早轟輝、空河大樹、朝風琢哉だそうだ。

「じゃあ、あだ名はイサタン、ソラタン、アサタンでいいね。」

「えっ。それはどう……。」

「新入部員に拒否権はない。」

ナヨロン先輩が言っていた強制的というのはこういうことか。

「で、みんな何に詳しい。」

「僕は模型鉄ですから、それなりに電車のことは分かってますけど。」

「まず諫早が口を開いた。それに続いて、空河がディーゼルに詳しいと言い、朝風は寝台特急に詳しいと言った。」

「みんなそれぞれ詳しいものがあるんだな。」

木ノ本が傍らでつぶやいた。

「なんだ。自分には詳しいものはありませんみたいな言い方してるけど。」

「今はね。昔は寝台特急とか新幹線とかはだいたい分かってたんだけどね。小学校の3年生くらいになつた時から女の子がこれに興味持っていていいのになつて考え始めてからはどんどん忘れてって、今分かるのは新幹線の形式か特急の名前だけ。」

「まあ鉄研に入ってから新幹線が分かんないんじゃない絶望的だからな。」

「何。ナガシイ。新幹線分かってなきゃ絶望的か。」

会話を聞いていた善知鳥先輩が自分の頭に手を置いた。そして、強く握る。

「いや、そういう意味じゃなくて、0系とか「こだま」とか。それ

ぐらいは分かってた方がいいってことです。」

「ごめんね、ナガシイ。あたしには0系も「こだま」も分かんないから。」

「いやそれでも「こだま」、「ひかり」、「のぞみ」くらいは分かってた方がいいですよ。日本人として。」

「何。ハルナンもそう思ってるのか。じゃあ、「こだま」とか分かってなきゃ日本人失格ってこと。」

「まあ、簡単に言えば……。」

「言っちゃうの。」

僕はこう答えたが、先輩たち。特に3年生は当然というような顔をしていた。

「……まあ言われてもしようがないとは思ってるけどね。膳所さんや青木さんにもそう言われたからなあ。でもね、覚えられれば苦勞しないわけよ。どうやったらナヨロンみたいにオタク化できるか分かんない。」

「おい。オタクって言うなオタクって。少なくともマニアの領域で止めといてくれない。」

「だってナヨロン完全にオタクじゃん。SLのボイラーの形とかが違うからこれはなんとかっていうことぶつづの人間が解るか。」

「それはお前の出してる例がマニアックすぎるだけ。いくら電車知らない人間でも1964年10月1日に東海道新幹線東京～新大阪間515.4キロが開業したことくらいは分かるだろ。」

今度はアヤケン先輩が口をはさむ。

「あのう。そののなんていうか分かんない先輩。いくらなんでも総延長は分かんないって。」

諫早も話に入ってくる。

「少なくとも、1964年10月1日に東海道新幹線が開業して、東京～新大阪間が「ひかり」で3時間。「こだま」で4時間になったっていうのは知っとくべきでしょ。」

「所要時間なんてド素人が解るかよ。だったらまだ総延長のほうが

ハードル低いつて。」

「アヤケン先輩も諫早もやめるよ。1964年10月1日までは一般常識としてその先は2人ともマニアックだ。」

木ノ本が止めに入る。

「だから、開業当時は最高速度210km/hから始めたって言った方が分かりやすいだろ。」

「やめんか。アヤケンと諫早が話に入ったから話がこじれてるだろ。だから……。」

「サヤ先輩まで辞めてください。余計話がややこしくなります。」
僕が止めに入っつてようやつと話が収まった。その後はまたまた電車の話で持ちきりにはならず、面白話で持ちきり。6時になるまで部屋でバカ騒ぎ。木ノ本の話では先輩達は7時までバカ騒ぎらしい。でも、その時間までこの状態が続いても暇じゃないのはすぐに想像できる。

今回からの登場人物

端岡夏紀 はしおかなつき	誕生日	2月21日	血液型	O型	身長	16
磯部綾 いそべあや	誕生日	11月3日	血液型	A型	身長	147
諫早轟輝 いははやこうき	誕生日	11月17日	血液型	O型	身長	15
空河大樹 そらかわだいしき	誕生日	2月10日	血液型	O型	身長	151
朝風琢哉 あさかせたくや	誕生日	5月8日	血液型	AB型	身長	1

7列車 またまた新人（後書き）

このやり取りって知ってる人でないとウケないかなあ・・・。

8列車 気持ち 決定

そのまた翌日。

「結局今日も出さなかつたんだな。」

「やる気ない奴のやる気を底上げしてやったって無駄。ともかく俺にはやる気はない。何と言われようと絶対やらない。」

「はいはい……。」

「何。」

「このところずっと思っていたことを永島ながしまに打ち明けてみた。

「永島ながしま。お前寂しくないのか。」

「えっ。」

「なんか知ってるから余計こう感じるのかなあ。お前を見ると今のお前より中学の時のお前がもっとイキイキしてた気がする。」

「……。」
「今からいつものお前になってってというのは無理ってというのは分かってる。そうしてくれてたのはあいつだっていうの分かってるけど、元気がないお前はお前らしくない。」

「……。」

「俺思ってたけど、お前はあいつのことが好きなんだろ。今からでも遅くない。あつて気持ちを確認しあうだけでも自分の気持ちももっと落ち着けるんじゃないかって。」

「……。」

「こんなこと言いたくないけど、何か言ってくれよ。ずっと黙ってるってお前らしくないから。」

「気持ちだけなら確認し合ったかもな。卒業式の時に。」

「……。なんだ。それなら。」

「寂しいっていうのは当たってるかもな。いつも話してたやつが今はいないんだから。」

「……。」

しばらく机を挟んだ状態にいる。

「永島^{ながしま}。俺でもいいか。」

その言葉で顔を上げた。

「俺にお前の電車の知識ぶつけてくれ。俺電車のこととはわかんないけど、覚えることだったらお前にも負けない。お前が持つてる鉄道知識を俺にぶつけて……。もつと言っちゃえば俺をあいつと思っ
てくれて構わない。それぐらいの気持ちで俺と話してくれ。そのほ
うが断然お前らしい。」

(宿毛^{すくも})

「なあ。頼む。暗いお前は正直見たくないんだ。」

「……。悪いけど、それはできない。半分^{もえ}萌だからできっただって
ところもある。それをお前が再現しようとしたって無理だ。宿毛^{すくも}に
電車のことは覚えられない。」

「なんでだよ。」

「じゃあ、聞くけどお前東海道新幹線がどっからどこまで走ってる
かわかるのか。」

「そ……。それは。」

「最低限今の段階でその話ができないと……。」「
「決まったわけじゃない。今からでも間に合う。俺がそのこと全力
で覚えれば1日で十分だ。掘り込んだところまで……。」

「だから無理だと言ってるだろ。その知識は萌^{もえ}だから習得できた
んだ。いくら頭がいいからって。お前の頭はそういう風にできてな
い。宿毛^{すくも}は……。お前はいつもみたいにしてくれればいい。それ
だけでいい。」

「永島^{ながしま}……。」

「自分で言うのもなんだけど、なんかこれだけで俺たちは終わらな
い気がする。今元気が少ないのは我慢の時だと思う。」

「……。」

「分かった。そんなに簡単に終わらない来いっていうのは俺もうす
うす感じてる……。でも……。どうしても我慢しきれなくな

「つたら俺に言えよ。なんでも受け止めてあげるからな。」

「宿毛……。ありがとな。分かった。どうしてもそうならお前に鉄道知識いっぱいぶつけるからな。」

「はっ。ぶつけるものは悩みじゃなくてそれかよ。」

「さつきそうしてくれって言ったじゃん。」

「……。そうだったな。」

その日の放課後。

「今日また新入部員が来たぞ。」

今日は一段とテンションの高い善知鳥先輩である。

「また新入部員かよ。今年は善知鳥が言った通りブレイクしたな。」

「さあ、新人入って来い。」

そう言われてはいってきた人は……。木ノ本はその顔を見ると、

「あつ、箕島君。」

「えっ。木ノ本さん。」

「新入部員って箕島君だったんだ。」

その会話を聞いている善知鳥先輩の目は明らかに光っている。

「何ハルナン。まさかハルナンの彼氏だった。」

「そんなんじゃないやありません。同じ中学同じクラスだった人です。」

「なんだ。つまんないの。」

「はい。そういうこと言わない。」

「まあいいわ。それより今日はもう一人部員が……。何勝手に入ってるんだよ。」

善知鳥先輩がそう言ったとき全員その人の存在に気付いた。

「何か入ってきたし。」

「もの扱いしないでください。」

「いや。したくなる。」

「はい。サヤもそういうこと言わない。」

「とりあえずまずは名前だけ言ってくれるか。」

「1年4組の箕島健太です。よろしくお願ひします。」

「1年7組。醒ヶ井瑛介です。よろしくお願ひします。」

「あだ名はミツシイ、サメちゃんていいよね。考えるの面倒だし。」
「そんな安易でいいのかよ。」

「その前に先輩。サメちゃんっていつのはやめてください。」

「何。文句でもあるの。」

「……いえ、ありません。」

善知鳥先輩は醒ヶ井の文句を人にらみで退けると今度は僕たちの紹介に入った。

「こつちが鉄研部員。」

と言つてから人数を数えて、

「いないのはユウタンだけか。まあいつか。この部活の天然部長のサヤとモジュールデザイナーのアヤケンとマニアのナヨロン。北陸大好きのハクタカとその人大……。」

「それ以上何も言わないでください。」

そう言わせまいと楠先輩がその口をふさぐ。

「ぶはあ。分かった。じゃあ、言い方変える。鉄研のホームヘルパーアヤノン。後は鉄研一お調子者の1年生ナガシイと1年生の紅一点ハルナンとあんまり部活に來ない背の高いユウタン。これで全員よ。」

「……。」

「だから、善知鳥先輩のそのハイテンション差で1年生がヒイテますって。」

「じゃあどうすればいいのよ。あたしからこのテンション取ったら何も残らないんだからね。」

「それはよく分かってますけど……。」

「分かっているならそれでいいじゃん。」

そのやり取りを見ていた箕島が、

「なあ、木ノ本さん。この部活っていつもこんな感じなのか。」

「こんな感じだよ。まあ、1年生の中にもそういう人いるけど。」

その人に目を向けて、誰かということ言う。

「納得。」

そういつと同時に心の中で思うことが一つあった。

(部活内でのあだ名がナガシイって言ってたな。俺と同じ感覚でつけてあるとすれば、こいつの名前は永島か。まさかとは思うけど、永島ってあれじゃないよな。)

「普段からこういう感じなんだろうけどな。」

「普段からねえ……。」

(これでもしあれだったら驚きだぞ。)

しばらく先輩たちと話していると部室のドアがまた開いた。

「おお、イサタン。」

「手を上げる。」

諫早は手で拳銃の形を作ってあからさまにこう言った。それに乗せられて手を挙げる人は……。

「うわあ。お前ら手あげないと撃たれるぞ。」

「そこまでじゃないだろ。諫早が作ってるのは指拳銃。弾丸が出てくるわけじゃないじゃん。」

「サヤ先輩。死んでください。」

どこから取り出したのだろうか。諫早が手にしていたものがいつの間にか本物の拳銃になっている。

「あーっ、バカやめろ。」

「そこまで驚かないでください。エアガンなんだから。」

「そんなの学校に持ち込むんじゃない。あぶねえから鞆中しまつとけ。」

「諫早……。お前休日とかになったら山に分け入ってサバゲーでもやってるのか。」

「そんなのやってませんよ。休日は家で自分の模型いじってますから。」

諫早はエアガンをかばんにしまいながら言う。

「……。」

続いて空河と朝風が来て、中学生全員がそろつ。

「諫早。お前本当にエアガン抜いたのか。」

「ああ。抜いた。サヤさんの反応が面白かったけど。」
「イサタン。後で覚えとけよ。」
「はい。ちゃんと忘れまーす。」
「こういう部活でいいのだろうか。でも、こういう部活だからいいの
だろう。」

それから数日が過ぎていき、4月20日。部活登録のあった新入
部員は僕を含め8人。鉄研部てっけんは全員で14人となった。

これから岸川学園鉄道研究部きしかわがくえんてつどうけんきゅうぶ（略KRC）ケイアールシーの今期の活動が本格化
していくのだ。

今回からの登場人物

箕島健太 <small>みしまけんた</small>	誕生日	4月5日	血液型	A型	身長	159cm
醒ヶ井瑛介 <small>さめがいえいすけ</small>	誕生日	2月21日	血液型	O型	身長	165cm

8列車 気持ち 決定（後書き）

このところ連続投稿。あー死ぬー。

とまあようやくとここまで来ました。そういえば舞台設定していませんでしたが、この物語2008年スタートです。

ということとは・・・なんですよねえ。

これからこの先の展開を考えるためにまた不定期になるかもしれませんが、読んでくれる人には感謝。

9 列車 基本事項

4月24日。部活決定の日から4日。クラスの人ともなじんで、次はという段階。これからは部活の先輩やその仲間、高校生活になじむ番である。その一環と言っているのかはわからないが、鉄研部員1年生は5組に集合して昼食をとっている。

日も浅いことだし、全員自分たちの話になるのは当然のことだろうか。みんなのことは少しでもわかっておく必要がある。

「永島は何で電車が好きになったわけ。」

僕の右隣に座っている木ノ本が話しかけてきた。

「うーん……。なんで、好きになったか。」

「そうそう。だってここにいるみんなは電車のが好きだから入部したようなもんでしょ。だったら知りたいじゃん。その理由。」

「それだったら、木ノ本が電車好きな理由のほうが聞きたいなあ。」

これには全員興味を示した。木ノ本はちょっと話しぶらいという顔をしながら、

「お母さんに憧れたから。」

「へえ。木ノ本の母さんって運転手みたいなことやってるの。」

「うん。JRの在来線の運転手やってる。よくそれ見にお父さんが連れてつてくれたんだ。その時から電車のこと好きになった。」

「へえ。」

「で、永島。質問には答えたんだし、私の質問にも答えてよ。」

「ああ。・・・自分でもよくわかんないんだよなあ。それ。」

「えっ、何かきっかけあるでしょ。それとも物心ついた時から好きなのわけ。」

「いや、そうじゃないんだけど……。いつ、どのタイミングで好きになったかわからないんだよなあ。「パノラマスーパ―」見たときからか、100系を見たときからか。」

「パノラマスパー」はいつ見たんだよ。」

「多分、幼稚園の時。よく兄ちゃんに連れられて100系見た行った時も幼稚園の時だったから。」

「なるほどねえ。子供の記憶だし、あいまいになるよなあ。佐久間さくまは何で好きなの。」

「んなことしらねえよ。いつの間にか好きだったんだから。」

「箕島みしまは。」

「俺は、こういう部活もいいなあって思って入っただけだから。」

「醒ヶ井さめがいは。」

「モジュールとか作れるって言ってたじゃん。だから楽しそうだなって。」

全員に目的はあるそうだ。

「おい、ナガシィ。」

ドアのほうから大きな声が聞こえた。一様にその方向を見てみると善知鳥先輩じゆんちうが立っていた。

「なんですか。」

「今日、アド先生が集合って言ってたから、それ伝えに来た。」

「あの、それもう全員知ってますけど。」

「・・・。ならいいや。全員こいよ。」

とだけ言っつて、自分の教室のほうへ走っていった。

1年生も交えた今季最初の部活動。今までと同じように部室に集う。今日は何をするのだろうか。

「よーす。諸君。さあみんな運べ。」

善知鳥先輩じゆんちうがみんなに指令を出す。その指令を聞くとすぐに先輩達は嘆いた。それも裏声である。嘆く必要はあるのか。そして、裏声である必要もあるのか。おそらくないだろう。

「じゃあ、1年生は全員外に出て、階段のところと並んで。」

名寄先輩なよろが外に並ぶように促す。今日はどうやら荷物運びらしい。

部室前の階段に醒ヶ井さめがい、箕島みしま、木ノ本きののほん、僕の順に並ぶ。すると、上からまず白いケースが大量に運び出されてきた。次はどこに置い

てあるかも分からない謎の物体の山。最後はいたるところに指の跡が付いている荷物。ぶつちやけていうと金属の山。電車のおもちややそのレールなど。鉄道研究部に関連するものも含まれている。だが、中には……。

「なあ、なんで卓球ラケットがあるんだ。」

木ノ本きのもとが回ってきた荷物の中にある卓球ラケットを発見する。

「ホントだ。なんに使ったよ。」

荷物を渡されて、中を見てみる。すぐに見つかったラケットは1つ。だが、よく見てみると1つだけではない。3つある。他に卓球ボールも入っている。本当に何に使ったのか分からない。すると上から、

「おい。そっちにラケット使ってない。」

北斎院きたさいいん先輩の声である。

「あつ、来てますけど。」

「ちよつとそれ、必要だから上にまわして。」

「サヤ先輩がラケットの入った箱上にまわしてだって。」

「なんに使ったの、これ。」

「さあ。」

用途不明のままラケットの入った箱を上に戻した。

しばらくの間部室から下ろされる荷物を床に置き続ける。安曇川あづがわ先生（アド先生）がその荷物をステージ裏にある狭い通路に置いて行く。狭い通路がさらに狭くなる。上からは「ゴミ」とか「あーっ」とかいう声に混じって、掃除機の音や、何か物を動かす音が響いてくる。一方階段のところからは上から運ばれてくる荷物にあだ名をつけて伝言ゲーム状態。もちろん前者の声も後者の声も何の意味もないと思う。

なんだかんだもう18時。その頃にもこの作業は終わりが見えないう。醒ヶ井さめがいが用事で帰ってからもしばらくはこの状態のままだった。体育館で練習しているバスケット部がランニングするところになると、上から先輩達が大量のゴミ袋を抱えて降りてきた。僕達1年生はそれと入れ替わりに自分の荷物を持って下に下りる。

「そんじゃあ。今日はこれで終わりだから、みんなオツ。」
「サヤ先輩が簡単に締めくくる。」

「で、誰がゴミ袋を捨てに行くか決めたいんだけど……。」
と言った瞬間に6つあるうちのゴミ袋を2つもって駆けだす人が一人。

「あつ、ハクタカフライング。」

鷹倉先輩を追って善知鳥先輩が。続いて、サヤ先輩がまた2つゴミ袋を持って走りだそうとすると、

「ちよつと待てよ。それは俺の獲物だ。」

「離せアヤケン。獲物だったらまだそつちにあるだろ。」

「あつちのはゴミだから。」

「お前ゴミ袋にゴミって言うてどうすんだよ。ゴミ袋の立場がないだろ。」

「知るか。」

その頃僕の傍らにいる名寄、楠先輩は……。

「ナヨ先輩。プレゼントです。」

「んじゃあいつてくるか。」

「あつ先越された。いい加減離せ。」

「獲物くれるまではなさねえよ。」

「おい、ホモケン離せ。」

「サヤが渡してくれれば離すよ。」

「誰がこれやるか。」

「あのう。楠先輩サヤ先輩達は何やってるんですか。」

「毎回恒例のゴミ袋争奪レース。詳しいことは後で説明するからちよつと待っててね。」

すると楠先輩はサヤ先輩が左手で掴んでいるゴミ袋の一つを取ってさつさと走っていった。それを追うようにしてサヤ先輩がアヤケン先輩を振り切り、アヤケン先輩はそれを追っていった。僕達はいつとただ唾然とした顔で見ただけである。しばらくすると、毎回恒例ゴミ袋争奪レースに参加してきた先輩達が全員戻ってくる。

「んじゃあ、お約束が終わったところで全員解散。」

サヤ先輩が息を切らしながら解散命令を出す。解散命令が出された後楠先輩くすのきがこう教えてくれた。

「モジュールとか作ってるよ、そのゴミが出るから毎回ゴミ袋に固めて、サヤ先輩の前に置いてくじやん。それでサヤ先輩がゴミ袋に話しに入ったところでスタートよ。体育館を出て、あっちの2・3年生のチャリ置き場のあるところにダストシュートがあるから、そこまでダッシュするの。取られないようにね。それで、取られずにダストシュートにいれたら、その人の勝ち。取られたら取った人の勝ち。」

「うーん。よく解らないけど、ゴミ袋持ってダストシュートまで逃げろってことですよ。」

「そういうこと。面白いから次からやってみれば。じゃあね。」

「なあ、永島ながしま。鉄研って本当に個性的だな。」

「ハハ、個性的すぎて少しついていけないかもな。」

4月25日。今日もまた部活。9時30分から開始ではあるが、

先輩たちは全員パワフルである。北齋院先輩きたさや せんぱい以外は全員集合済みだ。

「善知鳥先輩ぜんちう せんぱいたち早いですねえ。」

「そうかあ。そんなことより、授業担当誰だか知りたい。」

なんでパワフルという話からこんな話になるのだろう。善知鳥先輩ぜんちう せんぱい

の話方は全く読めない。とはいっても聞かれたことだ。話すのが鉄則だろう。

「えーと、生物の担当が橋本先生はしせとで、・・・」

「サッカーボールじゃん。サッカーボールって最悪じゃない。授業の教え方とかくそ下手だよ。要点言うだけだし。それだったら教師いらないうっていうくらいだから。」

「えっ、サッカーボールって。」

「だって、あのメタボ体系。完全にサッカーボールじゃん。人にけられながらダイエットすることをお勧めするよ。」

「善知鳥違つって。サッカーボールは袋井。」

「袋井。あれは、ラグビーボール体系。腹が出てて、縦に長い。で、ごめん他は。」

「英語は小林先生で、数学は青梅先生、情報が東中野先生。」

「数学青梅とか最強じゃん。」

「おめえらしいな。青梅先生は指導力あるから。後の小林と東中野はどちらでもない区分。最悪でもないし、最高でもないってところかなあ。」

「あとは、国語アド先。社会は四ツ谷だろ。」

「何かとすごいな。でも、四ツ谷って嫌だろ。毎日ノート3ページ出されるんだから。」

「あつ、確かにそれはちよつと。僕なんか出してませんから。」

「早いなあ。でも、テストとかでいい成績とると特進行けとかってうるさくなるぞ。」

「えつ、ナヨロン先輩も言われたんじゃないんですか。」

「ああ、言われた。でも、そんなことしたら遊べなくなるからなあ。」

「どうせ遊び相手いないじゃないか。」

「うっさい。これからできるんだよ。これから。」

するとドアが開いた。見ると木ノ本だった。善知鳥先輩はいまぼくにしたのと同じ質問をして、ナヨロン先輩とアヤケン先輩はそれを聞いて楽しんでいる。そうしている間に9時30分になった。

「はい、みなさんお集まりですね。」

ドアを開けてアド先生が部室の中を覗き込んだ。

「あれ、北斎院君はどうした。」

「サヤだったら、まだ来てませんけど。」

「部長不在じゃあなあ、困ったもんだな。」

と言っているとサヤ先輩が息を切らして、部室に飛び込んできた。

「北齋院君。おはよう。」

「というアド先生はサヤ先輩の首を後ろからつかむような体制をとった。」

「アド先生。それダメ。やっちゃダメ。」

「はいはい。これからは部長が遅れるということはないようにしてください。」

すると僕のほうを見て、

「永島君。木ノ本君。ちよっとその木の板とつてくれないかなあ。」

「

と頼んだ。いち早く木ノ本が反応し、白いケースの隣に無理やり押し込んで歩きの板を1枚取った。木の板は薄いベニヤ版。長方形の形になっている。木ノ本がそのベニヤ板をアド先生に渡す。

「あと綾瀬君。直線レールの入った箱持ってきてくれないかなあ。」

「へーい。じゃあ、このゴミに植林終わったら行くから少し待っててちょ。」

その返事を聞くとアド先生は下にきて、と手招きをした。僕たちはそれに促されて、部室から出る。部室から出るとすれ違いに中学生の諫早と空河にあった。アド先生はその二人にも声をかけて、ステージに降りた。ステージに降りると、僕たちがいつも利用している奥の通路から折りたたみ椅子を取り出してきて、一人勝手に座る。

僕たちはその前に思い思いに腰を下ろす。諫早と空河が合流して、数秒経つとアヤケン先輩が緑色の横30cmくらいある箱を持って下りてきた。アヤケン先輩はその箱を渡してすぐに部室へと戻っていく。それを確認してから、

「これがKATOというところから出ているレールです。」

と説明を開始した。アド先生が取り出したものには、当然だが、レールが2本規則正しく並んでいる。そのレールの下にある黒くレールの枕木が主流だということがあったが、その中で「木じゃないじゃないですか。」とツツコミを飛ばしていたことをふと思い出した。

木でなければ、名称は「枕コンクリート」にでもなるのだろうか。
「これはKATOから出ている最も標準的なレールです。この長さが124mです。KATOのほうはこれを基本にレールの長さが決まっています。例えば、この2分の1のレールは62m。これの2倍のレールは248m。その248mのレールに62m足すと310mという風になってます。さらに長さを調整するために64mとかっていう端数レールも出てますし、このような伸びるレールなどもあります。」

アド先生はまだ箱から出されていない伸びるレールを僕たちに掲示した。このレールには他と違って真中は枕木ではなくコンクリートをモチーフにした板が取り付けられている。そのレールの上には「78-108」と書いてあった。元の長さは78m。最大は108mになるということだろう。

「ただ、このレールはほかのレールより壊れやすいので、慎重に扱ってください。」
直線レールの説明は大体終わった。今度はカーブレールについての説明。

「この裏側を見てください。」
アド先生はカーブレールをひっくり返すとその真ん中あたりを指差した。そこには「R282-15。」と文字が浮き上がっている。「この「R」というのはこのカーブのきつさを表しています。そしてこちらの「15。」というのはこのレールで曲がれる角度を表しています。そして、カーブとカーブの間は33ミリが基本になっています。だから、282mの次は315m、その次は348mという風になっています。それで、この中に216mのやつがありますが、それは製作には使わないでください。」

説明が終わると今度は箱に入っているレールと2本ずつ僕たちに渡した。

「つなげてください。」
そう指示があった。2本のレールを床に置いて、連結する。中には

空中のまま連結したりする人もいる。連結が完了すると、しばらくそのままでした。

「それじゃあ、今度はこれを外してください。」

そう指示が出る。両方のレールに手をかけて引っこ抜こうとする。だが抜けない。

「このレールは両方に引つ張つても抜けないようになってます。だから、この継ぎ目をどちらかに折り曲げるようにして引き抜いてください。Nゲージのレールは両方に引つ張つて抜けるやつやこれみたいにとちらかに折り曲げて抜けるタイプもあります。」

説明を受けた後はその通りにぬいていくだけ。これが完了すると後ろに置いてあつたベニヤ板を取り出した。ベニヤ板を床に置いて、レールを3本つなげる。そして、板の上に置き、左右を合わせた。

「この板は248mのレールを3本つなげた長さになってます。248mを3本つなげると何ミリだ。計算せい。」

「248×3で、744mです。」

後ろからナヨロン先輩が覗き込んでいた。

「はい。今名寄君なよるが言ってくれた744mミリというのがこの部活のモジュールの基本です。この中にレールが収まるようにしてください。」

その後レールのさらに詳しい説明を受けた後、自分たちで何を作りたいかということを聞かれた。僕としては家にいっぱいある分、何を作りたいかなんて言う欲望はない。だが、ほかの人は駅を作りたいとか山のある風景作りたいたとか、川がある風景を作りたいなど意見は様々。その中でも採用されるのはごく一部。今回は山と川の融合と山と駅の融合。後は留置線のある風景を作ることとなった。

9 列車 基本事項（後書き）

だんだん鉄道研究部らしくなってきました。

10列車 製作

そういう風になったとはいっても僕は作り方を知らない。当然一緒に作ることになった木ノ本きのもとも知らない。これでは到底前に進むことはないだろう。

「ナガシィ。何作るの。」

「えっ、留置線のある風景でも作るのかなあっと思って。」

「そういうことで分らないことがあつたらアヤケンに聞くのが一番だよ。あいつ器用だし。」

「ああ、はい。そうします。」

「おい、善知鳥うつくし。そういうところで俺の仕事を増やすな。まだ、あれ出来てないんだから。ナヨロンにでも頼め。あいつは車両だけだけど何も作れないってわけじゃないから。」

「ナヨロンに頼むとろくなことがないじゃん。古墳作るって言い出すかも……。」

「そう言ったのはサヤだぞ。それで俺が作ったんじゃないか。結局ごみの一員になったけどな。」

先輩と話していたら余計進まなくなる。とりあえず、家に広がっているレイアウトのことを思い出す。だが、家のレイアウトにはこういう風なものはない。自分たちに与えられているのは板3枚だけ。これが家にあるレイアウトみたいになるのだろうか。そう思った。

「まあ、まず配線決めるかあ。」

「そうだな。でも、どうやって配線すればいいわけ。」

「さっきアド先生がやってたみたいにやればどうにでもなるだろ。とりあえずポイントと直線レールがあればどうにかなるかあ……。あつそれだけじゃどうにもならねえ。ゆるくてもいいけどカーブも必要かあ。」

独り言のようにしゃべっていると、

「ほれ。」

アヤケン先輩がレールを持ってきてくれた。手に持っているのは248m^{ミリ}レール12本。

「線形が単純ならこれだけで足りる。留置線配置するっていうならもうちょっとこの直線レールと道床が片方ないレールと124m^{ミリ}のポイントレール4番とかっていうふざけたやつが加わるから。」

そのレールはふざけているのだろうか。僕たちが探そうという前にアヤケン先輩はそれも探して持ってきてくれた。さっき言っていたレール。ポイントレールは皆さんお分かりだと思うが、片方道床が欠けているレールというのは見たことがないだろう。見てみるとそのレールは標準の半分くらいの長さで僕たちから見て左側の道床が斜めにカットされている。文字通り片方道床が欠けたレールだ。

「4番ポイントの直線側にこのふざけたレールをつなげて、その片方にR481のカーブを分岐側に組ませる。こうすると両方の線路がつくんだ。もしこの4番ポイントで、道床が欠けてないやつとやると片方ははまってもう片方ははまらなくなる。だからこんなふざけたレールがあるんだよ。」

さっきから聞いていればアヤケン先輩はそのレールのことをずいぶん迷惑がっている。だけど、その理由は問いてはいけないことにも思えた。とてもくだらない理由が返ってきてさうだからである。

「お前らに必要なレールはこのくらいかなあ。後、その直線レール道床の色何かに揃えとけよ。その中でも茶色のやつは結構古いのだからあんまりあてにしないほうがいいぜ。」

アヤケン先輩から渡されたレールを使って配線をする。さっきアド先生が言ったとおりにして、直線レールをつなげていく。248m^{ミリ}の直線レールを3本つなげたところで、1枚目の板の上に置く。すると、ちょうどびつたりとおさまるのだ。もちろんこのことには種も仕掛けもある。

「とりあえずはなったな。」

木ノ本の隣^{きのもと}を見てみるとまだレールが余っている。それもカーブレ

ールとポイントレール。

「お前バカだろ。この中に留置線を配置しなきゃ意味ないだろ。これじゃあ、ただレール並べてはい終わりじゃん。」

「知らないよ。大体留置線はそっちに並べるんじゃないの。こっちは余裕が。」

「あるだろバカ。何のためにこの板があるんだよ。こっちには隙間がないんだよ。どこをどうやったらレールが並べられるんだよ。」
「ちなみに今どういう状態でレールが並んでいるかというと、僕のほうはしっかりと板の端を一直線に、木ノ本のほうはそれに並行して仲良く並んでいる。」

しばらくどうすればいいかを考える。もちろん方法はいくらかでもある。真ん中に留置線を持つてくる、真ん中に留置線を持つてくる。このうち僕たちがとった策は真ん中だ。そのため、木ノ本が敷設した線路にカーブレールを組み込み、1本レールが入るスペースを作る。次に僕の敷設したほうの1枚目の終わりにポイントレールを組み込み、留置線につながる線路を作る。2枚目は3本のレールが並んでいる状態のまま右側まで進んで、2枚目終了直前に留置線が終了。3枚目は1枚目の逆バージョン。ポイントレールが組み込まれていないところだけは1枚目を違うか。その状態で配線が完了した。配線が完了したところで、僕たちのものをアド先生に見てもらおう。アド先生のほうは別にいうこともなかったらしく、配線はこのままでOKということだった。

「よし。じゃあ、ここまで進んだら、罫書きをしてください。」

「けがき。」

「このレールの配置をペンかなんかで板に写し取ってくださいってことです。さあ、やって。」
「いわれるがままそうやる。レールと板の接着しているところにペンを当てて、レールに沿って線を引く。そして、全部の線を引き終わったら次は継ぎ目の部分に今書いた線とは直角に線を引く。これでどこに継ぎ目が来るのかがわかる。継ぎ目を書くまでが終了したと

ここで、仮置きした線路を板から外す。線路配置が決まったところで次の作業に入る。次の作業とは当然、家などの配置を決めることだ。

「家の位置決めろって言ったって、わかんないよなあ。どこにどうやっておいていいかわかんないし。」

「こういう時ってどうすればいいんだろう。」

「永島ながしまって電車に詳しいよなあ。こういう方面も詳しくないのか。」

「電車詳しいからってこれも詳しいなんてこたないよ。」

しばらく考え込む。するとさっきの言葉が思い浮かんだ。

「というわけで、聞きに来たんですけど。」

「はいはい。」

僕たちのモジュールのところまで来てもらい、アドバイスをもらう。

「なるほど、線路配置は決まったのね。」

そうつぶやくと、近くにあった家の模型から一つ取り出して、説明を開始した。

「これは、道路の形を想像しながら、建物を配置して組んだ。こういうところはこういう風になってるかなあとかってことを想像しながら、家の配置を決めていく。それが難しいなら、先に道路の形を決めちゃったほうがやりやすいよ。」

アヤケン先輩はそう教えてくれた。

アドバイスをもらったところで、家の配置に取り掛かる。まず道路を決めてからとも言ったが、お互い想像力に乏しいわけではない。頭を使って物を作る。

「この道路の感じは線路に沿ってずっと続いてるってどう。」

「いいんじゃない。それなら、ずっとこっちに続けていくでいいじゃない。」

「それでもいいけどさあ、ずっと平坦ってなんかやじゃない。2枚目だけ丘にしちゃうとか。」

「でも、そんな道路あるのか。それだったらなおさらトンネルかなんだろ。」

「それ言っちゃったら、道路がトンネルで並走してる鉄道がトンネルじゃないっていうところあるのかよ。私の知ってる限りじゃないぞ。」

「わかったよ。じゃあ、2枚目は丘にしちゃうでいいか。」

「丘にするのはいいけど、それだれが作るんだよ。私汚れるの嫌だからね。」

「汚れるのは俺も嫌だけど、それ言ったらものなんて作れないだろ。だったらジャンケンで決めようぜ。」

ジャンケンをやって結果は、

「永島ながしま。お前いかさまとかしてないよなあ。」

「ジャンケンでどうやっていかさまするんだよ。」

「えっ、簡単じゃん。後だしとか、マインドスキャンとか、ジンクスとか。」

「ジンクスはないけど、マインドスキャンって無理だろ。千年眼ミレニアムアイじゃないんだから。」

プラノコの歯を発泡スチロールに入れる。前後に動かすとキュ、キュッと音を立てる。

「ああ、この音ヤダ。」

「木ノ本きののもと、もうちょっと静かにやれないか。」

「あんたはいいよなあ、耳ふさげて、私はふさげないのよ。ちょっと変わりなさいよ。」

「ヤダよ。」

「変われ。」

「ヤダ。」

すると楠先輩くすのせながやってきた。

「あっ、楠先輩。これ変わってください。」

「遠慮しとくね。あたしの専門は物作りじゃないから。」

あっさりと断られた。

次に来た醒ヶ井さめがいは、

「あっ、醒ヶ井、これ変わって。」

「おう、いいよ。」

快く引き受けてくれた。

「醒ヶ井君。こんにちは。」

醒ヶ井が来たことに気づいてアド先生が醒ヶ井の後ろからつかみかかる。

「こんにちは。ていうか安曇川先生やめてください。今切ってるところだから。」

そう言っている間にカット終了。

「これだけなら、俺じゃなくて、自分たちできれいな。おれもこの音嫌いだから。・・・ん。木ノ本。もしかしてそのためだけに俺に切らせたのか。」

「うん。思いつきはまってくれてありがとう。」

何がともあれ、作業が完了したのだ。次は道路の配置だ。

「この発泡をこうやってくと道がふさがるんだよなあ。また切らなきゃダメじゃん。」

「おい勘弁してくれよ。また俺に切らせるのか。」

「うん、分かってる人は分かっているねえ。」

「分かりたくないんだけど。」

「大丈夫。おれたちも手伝から。だから、醒ヶ井はこっちのここから下を切り出して。俺と木ノ本で、こつちを坂みたいにするから。」

「おい、そつちそんなに人数いらないだろ。」

「気にしない、気にしない。」

「気にするよ。」

と話していると、

「みなさん。12時ですので。お昼にしてください。」

とアド先生から指示があった。

10列車 製作（後書き）

最初は不定期更新。この頃は毎日更新・・・。
いつかまた不定期更新に戻るかも・・・。
そんなので読んでくれる人には感謝。

11列車 バスケと走行テスト（前書き）

ストーリー中にある批判はあくまでもストーリーの中だけです。
現実にそうということは一切ありません。

11列車 バスケと走行テスト

作業は一時中断。部室に戻って、弁当を食べる。

「ナガシイ、ハルナン、サメちゃん、ミツシイ、イサタン、ソラタン、アサタン。バスケットやらない。」

「おお、面白そうじゃん、やるやる。」

サヤ先輩がそれに乗る。サヤ先輩に次いで、アヤケン先輩も乗った。「おい、バカタカとアヤノンはやらないのか。」

「バカタカって呼び方やめてください。つつか、いつから僕のあだ名は変わったんですか。」

「あたしは運動は苦手だからやめときます。一人プレイだったらしますけど。」

「えー、シユートだけ。つまんないじゃん。試合やるうよ。試合。」
「でも、それ下のバスケット部がいなければの話でしょ。」

箕島が当然の質問をした。

「大丈夫。バスケットは午前中だけ。午後はあたしたちの貸切になる。」

弁当を食べ終わって下に行くと、さつき言ったとおりバスケット部はいなかった。

「ほれ、やるぞ。」

体育館のステージから飛び降りて、北の器具庫のほうへ走っていく。中からボールをつく音がして、善知鳥先輩がドリブルしながら、出てきた。

「善知鳥先輩。体操服とか持ってきてませんよ。」

「大丈夫。見られたら見られたでござ愛嬌。」

「じゃあ、僕参加します。」

「おお、サメちゃんはさすが変態を自嘲したぞ。ナガシイたちは参加しないのか。うまくいけば、女の子のパンツが見れるぞ。」

「そういう釣り方やめろつうの。」

「……。」
「榛名、参加するなら、あたしの体操服貸すけど。」
「えっ、でも。」
「いいって。どうせあたしは参加しないんだし。それに、モジュールも作ってないし。」
「……じゃあ、私も。」
「じゃあ、ちよっと上来て。ハクタカ。もしのぞきにきたら、頭から飛び降りてよ。」
「のぞかねえよ。」
「ふうん。あたしの時はのぞきに来るのに。」
「それは。お前の着替えてるタイミングが悪いだけだろ。」
「ねえ、ナガシィ。本当に参加しない。」
「楽しそうだから、参加します。」
「よし、4対4でやるか。」
やる人は全員体育館のフロアリングに行つてスタンバイする。その姿を見ている人は、
「善知鳥のやつ。ああいつても中にハーフパンツはいてるよなあ。」
「あれにつられる醒ヶ井さめがいつて。ただの変態なんじゃないのか。」
「ああ、ただの変態かもなあ。」
「もう集まつてるし。」
「ハルナン。早く、早く。」
「楽しそうなのはいいんだけどなあ。」
「ハクタカ。今日は珍しくのぞきに来なかつたね。」
「だから、のぞいてるんじゃないくて、お前の着替えるタイミングが悪いって言うてるだろ。」
「それ言つたら、ハクタカの来るタイミングが悪いってことになるじゃん。」
「そうかもしれないけど、着替えるタイミングも悪い。」
「ハクタカ言つてることおかしい。だからバカタカつて言われるんだよ。」

「いったな。クソアヤ。」

「ナガシイ。パス。」

「いただき。」

「あつ、サヤとるな。」

「申し訳ない。昔バスケットやってて。」

「少しは手を緩めるよ。」

「残念。はいスリーポイント。」

10分後。

「つ……疲れた。この頃動いてなかったからな。」

「最後なんか体育苦手な善知鳥（じょうち）にもボールとられてたもんな。」

「うるさい。ああ、暑い。服ぬぎてえ。」

「脱げばいいじゃん。」

「女子がそんなにさらつと脱げばって言うなよ。」

「サヤ先輩、上から扇風機持つてきますか。」

「ああ、お願い。」

「はあ、久しぶりにバスケットやったなあ。1年生以来だっけ。」

「そうだな。猪谷（いのたに）さんがいた時以来だな。昔はバスケットがない

ときは製作そつちのけでよくやったな。」

「サヤ先輩たちそんなことしてたんですか。」

「ああ、あのときは俺たちも若かった。」

「若かったって。もう年寄りみたいな言い方ですね。」

「人間18になればおじいちゃん（おじいちゃん）の仲間入りすんの。18になると

体が言うこと聞かなくなる。」

「サヤ先輩。そんなこと言わないでくださいね。」

扇風機を持ちに行った楠先輩（くすのき）が言った。

「だってそうなるんだからしょうがないだろ。」

扇風機の前に行って誰もがよくやることを始める。

「だから、サヤとるなつて。」

「マジックカード。部長権限を発動。」

「トラップカード。無効を発動。」

「あー、バカたれ。トラップカード。カウンターカウンターを発動。」

「サイクロン。」

何を始めると思えば……。

「おいおい、何こんなところでデュエルしてるだよ。」

サヤ先輩と善知鳥先輩（じょうと）がそんなことをしている間に扇風機はナヨロ先輩が占領していた。だが、僕には別のことを思い出していた。萌とよくやったのだ。カードはほぼそのままでモンスターカードだけ電車にしてやったことがある。あれについては自分でもよく考えたものだと感じするところがある。

それはさておき。13時45分から作業再開。

「これ、塗料で塗ったほうがいいよ。」

アド先生に言われて上から筆と塗料の缶を持つてくる。この塗料缶の固まったふたを開けると、中で塗料が固まっていた。カツピカピになつており、乾ききった土のようにひびが入っている。仕方がないので、体育館を突っ切つて近くの水道まで歩いていく。水を入れて、筆で押したりすりつぶすようにしながら、水に浸らせていくと塗料が復活。ここまで来てようやくと塗る作業に入った。

発泡スチロールと板の道路と家の部分に塗る作業を施行すると、この先の作業が進まなくなると思ったが大きな間違いだった。塗料は一度塗っただけでは下地が透けてしまいうらしい。そのため何べんも塗つて色を濃くする。それが完了すると外に持つて行って、干す。その間塗料の缶にふたをして、筆を洗う。この部活では筆を洗わなかつたら制裁があるという。何ともおかしな風習がある。

筆を洗い終わつてもとの位置に返す。これが終わると次は配置すると決めた家の組み立て。Nゲージの家屋は組み立てられ終わっているものからプラモデルのように自分で組み立てるものまで様々。僕たちが使うと決めたものはジオコレという中の数種類。近郊住宅地の全シリーズを網羅してモジュールに配置することにした。これを箱から出すと、地面と壁など数枚のパーツに分かれている。それ

を組み合わせて、地面となるところにさしていく。これをさし終わるとききれいな近郊住宅ができる。このころには塗装した板のインクも乾いており、中に持ってきて、どのように置くか仮置きする。

「その住宅はそこかよ。面倒だから順番に並べちゃおうよ。」

「おいおい、そんな住宅地あるのかよ。」

「醒ヶ井さめがいツツコつづこんだら負けだと思っていいよ。」

「どつという意味だよ。」

「まあ、それでいいだろ。」

「これはこれでいいんだけど、ここどうする。変に余っちゃったけど。」

「工場にでもすればいいだろ。」

「えっ、ちよっと古臭い感じのこれにするのか。」

「いいだろ古臭くても。半分模型だからできることじゃん。」

「そうだな。」

「おい、そつちはもういいよ。こつちはどうするんだよ。そつちばつか決まったって意味ないぜ。」

「そつちどうしようか。」

「コンビニとか。トラックステーションでもいいんじゃないか。」

「えー、トラックステーション。」

「えっ、ヤダ。」

「いいよ、何も思いつかないし。」

「ああ、そう……。」

「永島君ながしま。他を決める前に線路つけちゃっていいよ。まず電気が通るかどうか確認して。」

アド先生がレールを取り付けていいという。午前中に決めたレールを元通りに直して、幅のある両面テープで張り付けた。レールをつけ終わると、バラストをまく。バラストとはレールの下にひかれてある砂利のこと。あれは車輪からかかる重みを少しでも分散させる効果がある。一種のキヤタピラなのだ。僕たちの取り扱っているレールは道床という部分があってその道床の部分がバラストの部分で

ある。まかなくてもいいのではあるが、まかないままだと木の板があらわになる。そのために薄くまく必要がある。さっきの両面テープと同じように上からバラスト（カラーパウダー）の入った容器を持ってきて、指でつまみながらまく。地道な作業がツボにもなる。

1枚にバラストをまき終わると板を立てていないバラストを落とす。滑り台のように駆け下りていったバラストをさらにかき集めて、2枚目に転用。2枚目も同じ作業を行って余った分は3枚目に転用。3枚目で余ったバラストはごみを含まないように容器に戻す。

バラストをまき終わると車両の走行試験。順番が逆なのは「愛嬌」とりあえず、走れば今はOKだ。部屋にある名鉄めいてつ「パノラマデラックス」とフィーダー、コントローラー、フィーダー線接続用の線路を持ってきて、試した。

コントローラーのコンセントを差し込み、コントローラーのパイロットスイッチが点灯したことを確認する。そして持ってきた「パノラマデラックス」を線路上に置いて、ディレクションスイッチを前進に入れた。そして、コントローラーのつまみをゆっくりと回す。電気に反応した「パノラマデラックス」の顔が次第に明るくなる。ライトがついているのだ。そして、ピクツと前に動いた。するとぎこちないがゆっくりと動き出し、僕から見て手前側。板の端の線路を完全に走破した。

今度はディレクションを後進にして、同じように走らせる。こちらも良好。「パノラマデラックス」は順調に走った。

走るということが確認されたら今度はフィーダーをさしている線路を変えてテストする。「パノラマデラックス」もそっちへお引越して、同じ動作を繰り返した。今度もよく走ったいたのだが、2枚目と3枚目を越えるところで、急に止まった。

「あれ、どうかしたの。今までよく走ってたのに。」
見ている全員が異変に気付く。「パノラマデラックス」を覗き込むと、顔がさつきと違って暗いことに気付いた。電気が行っていないのだ。「パノラマデラックス」を走っていた位置まで後退させると

「ギューーン」とモーターが動いた。電気はある位置まではいっている。だが、進むとすぐに止まった。

「これの位置変えてみればいいんじゃないか。」

「いや、それじゃあない。」

今度は「パノラマデラックス」をどかして、走らなくなるところを検証した。すると、2枚目と3枚目の継ぎ目はジョイナーと呼ばれる部位が一つしかないことに気付いた。

「分かった。こいつだ。」

2枚目と3枚目を切り離した。切り離し終わると上に行つて、アヤケン先輩に言った。

「アヤケン先輩。このジョイナーってどこにありますか。」

「ジョイナー。ああ、レールの入ってる箱から、ジョイナーのついでるレール出して、あーって取り外せばいいよ。」

なぜ「あー」のところだけ裏声だったのか。それはさておき、レールの入った箱を探す。レールの入っている箱を見つけたが、なかなかジョイナーのはまったものに出くわさない。出くわしてもなかなか外れない。だんだん外れないジョイナーにキレたくなってくる。

「あーっ、もう。なんで外れないんだよ、バカたれ。二つはまったの出てこいや。あつたら返事しろーっ。」

全部独り言です。

「すげえ。永島ながしまがどんてっけんしよくどん鉄研色てっけんしよくに染まってく。」

善知鳥ぜんちょう先輩は何か別なところに感心している。

なんとか2つジョイナーのはまった線路を見つけて、持っているレールとつなげる。そしてすぐに外す。すると本来ジョイナーのはまっているほうにジョイナーがはまる。これで問題は解消だ。

そのレールを下に持って行って再びはめる。また走行テストを行うとこの区間もとおるようになった。内側の線路も電気が通ることが確認された。

そして時間は16時。今日の作業はここで終了した。

翌日。4月26日。今日もモジュール製作である。今日はほとんど走ることを楽しむだけ。午前中はほぼそれだけで終わり、昼はまたバスケットボール。午後になって初めて、製作を進めた。今日は2枚目の住宅地づくりである。

「ここも近郊住宅だけだとなんか張り合いないよね。」

「それはないだろ。1枚目で近郊住宅を使っているいじょうそれはできない。どれもこれも同じようになるからなあ。」

「醒ヶ井さめがいって本当にこれだけだよなあ。」

「うるさいなあ。」

「あと、変態っていうのもあるよねえ。」

「だまれつつの。」

「まあ、それは置いといて、ここどうする。」

「近郊住宅から田舎に通じるところだろ。ここは結構古臭い建物にしとくのがいいんじゃないか。」

「確かにそれもあるけど、今は田舎から町につながるところって大体新しい家が建ってるだろ。反対に近郊住宅よりも近代的なもの建てたほうが効果的かも。」

「何。2階建てとか、3階建てのやつ。」

「そう。それくらいのほうが自然じゃないかってこと。」

「うーん。」

しばらくどうするか考え込んだ。しかし、何分考えても答えが出そうにないため、

「アヤケン先輩だったらどうするのが一番自然ですか。」

「えっ、自分が思ったとおりじゃなくてくのが一番いいよ。道路配置が決まったら何も考えなくてやってても何とかなるよ。」

という回答だった。道路配置が決まるまでは想像力。道路配置が決まったら自分の勘。このづくり方って効果的なのだろうか。それともアヤケン先輩だけに通じることなのだろうか。

結局アヤケン先輩が言ったとおりになっていくことになって、古臭い建物を配置。実際あるかどうかは別として、その家の隣。2枚

目始まってすぐ(1・2)のところに畑を配置。そのあとは一列に家を並べて、反対側の切り出されたところに詰所を配置した。実際のところ、この詰所は郵便局もどきという設定となった。

概略ができたところで、家をベニヤ板に張る作業になった。模型ストロクチャーの家を張る作業はいくらでもあるのだろうが、この部活でとっている方法はストロクチャーの地面のふちに両面テープを張って張り付ける方式。こうすれば、確実に接着できる。

上から細い両面テープを持ち出して、裏側に張る。縁から反対側の縁まで行くとテープを適当な長さに切る。それを4回繰り返し、仮置きしたところに置いていく。1枚目の建物はすべて決まっているため、1枚目はすぐに完了。3枚目は設置が決まった建物は貼り付けていった。2枚目使う発泡スチロールと設置する建物を張り付けた。なんかとんとん拍子に進み気味である。

ここまで作業が完了すると醒さめヶ井い以外は墮落した。僕は中学生のほうの進行状況を見に行った。

「諫早いさはや。どうだ進み具合は。」

「えっ、この山をハゲからモッサモッサにするために植林してるんですよ。」

諫早はアド先生をちらつと見てそう言った。

「なんですか。永島ながしまさんもやるんですか。水分たっぷりの山にするために。」

「いや、ただ見に来てただけだよ。ていうか。これ走行テストやった。」

「あー。やり忘れてた。・・・でも、7000番台(223系 網あ干区ほしく)のくそつたれだったらぶつうに通りますよ。ゴミじゃないから。」

「7000番台。どれかわかんないけど、まあ大丈夫なんだな。」

「おいおい。それやめてくれよ。」

顔を上げるとナヨロン先輩の顔があった。

「俺が一番最初に作ったのもそうだけど、サヤが作った「安曇川あどがわ」。

マイクロ Aceの車両が通らないっていうやつもあるし、テスト

トはしとけ。でないとごみを量産することになるから。」

「あの。その二つ今どうなったんですか。」

「んっ。俺のはちょっと前にジェットピストルで破壊して、サヤのやつは・・・まだ残ってたかなあ。まあ、寮に行けばあるかないかわかるよ。」

「・・・。」

「じゃあ、明日7000番台持つてきます。」

「いよ。今調べる。部室に確か。サヤの乗物があったはず。サヤに貸してもらえ。」

諫早はナヨロン先輩に促されて上に行った。上ではスピーカー全開で曲を聴いている。今はやりのEDOとかいうやつだと思う。

「サヤ先輩。」

「んっ。何。」

「モジュールの走行テストやりたいんですけど。」

「ああ、分かった。俺の貸してやるからちょっと待って。」

サヤ先輩はそう言って開拓してはいけないといわれたところのものをどかして、中から車両ケースを取り出した。

「はい、諫早。「ふみさん特急」。」

(間違いがひどいなあ。)

「ありがとうございます。」

サヤ先輩がくれたのは富士急行の特急「フジサン特急」の模型であった。それをモジュールに持って行って走行テストを行う。車両はスムーズに走り出し、つなぎ目にある鉄橋も難なくクリア。植林しすぎのように思える崖の部分も何の支障もなく通過した。次に線路を変えて、同じようにテスト。車両はまず僕たちが覗き込んでいる側の線路と別れて、奥に進路をとり、つなぎ目で鉄橋を渡る。そしてトンネルに入り手前側の線路と合流する。トンネルの中もさほど支障はないようだ。

「よし。行け。「フジサン特急」。」

「諫早。いつまでそんな際物走らせてるんだよ。」

「なあ、諫早。やめようぜ。横の富士山が気持ち悪い。」

「フジサン特急」の拒絶反応はナヨロン先輩だけではなかった。空河も嫌いのようである。

「気持ち悪すぎて吐き気がする。」

「電車見ただけで吐き気でもすんのかよ。」

「いや、電車は大丈夫。でもこれはダメ。」

イコール好みの問題である。

「確かにそうだな。名寄さんが「際物」っていった意味もわかる。

サヤさんってこういうもの好きなんだな。」

「そう。サヤこういうの好きだから。」

「……。」

「際物好きで悪かったな。」

目線を後ろに向けるとサヤ先輩が立っていた。いつの間に来たのだろう。

「ナヨロンか。俺の際物伝説広げたの。」

「ああ。それがどうかしたか。」

「お……お前。」

「ああ、サヤ先輩もナヨロン先輩もなぐり合うんだったら外か向こうでやってくださいね。」

「大丈夫。なぐり合う気はないから。……よし、ナヨロン。上で平和的に話し合おうじゃないか。チャカとか、チャカとか、チャカとか。」

「それ絶対に平和的な話じゃないですよねえ。」

さて、話を進めよう。と言っても今日は終わりまでこんな調子のままであった。そして一番最後に掃除。楠先輩曰く毎回恒例のごみ袋争奪戦も行われて今日の部活は終わった。

11列車 バスケと走行テスト（後書き）

作者が後ろ向きなのに後ろ向きじゃないってどうですかねえ…。

話は変わりますがこれから先さらに濃くなっていきますが、読んでくれる人には感謝。

自分自身のって書いているいじょう面白いもの（多分）できてると思っのでこれからもよろしくお願いします。

12列車 原則

翌日。4月27日。

「……永島^{ながしま}。今日めちやくちや疲れてるな。」

「いや、そうでもないよ。確かに休日なかったけどさあ、意外と楽しいから。」

「へえ。先輩とはもうなじんだの。」

「うーん。なじむというか。部活の先輩「もう鉄研色に染まってきた。」とかつて言ってたからなあ。」

「本当にその順応性には感心するよ。」

あきれたのと関心とが入り混じった顔だ。そういう顔をしているのは宿毛^{すくも}である。

「ところで、静岡まで何円かかるか知りたいんだけど。」

僕はこの手のものには詳しくない。というか知らない。

「1280円。」

佐久間^{さくま}が口をはさんだ。いいところに助け舟がいたものである。

「1280円かあ。ありがとう。」

「ていうか、そんなこと聞いてどうすんの。遊びにでも行くの。」

「まあね。」

「それよりも、もっと安く静岡に行く方法があるぜ。」

佐久間^{さくま}がそのあとなんといったかというと、

「それ、法律的にダメだろ。立派な犯罪だぞ。」

これがその言葉に対する宿毛^{すくも}の答えだった。何を言ったかというところは想像に任せるとしよう。もちろん、いま言ったことは実行してほしくない。

その日の放課後。同じように部室に赴いた。部室の前には醒ヶ井^{さめがい}がいた。もう一つカバンがあったが誰のものはわからなかった。しばらくすると、サヤ先輩と箕島^{みしま}が来て部室を解放した。

中に入って、製作途中のモジュールを眺めてみる。この2日だ

いぶ進んだものだ。今日はこれの製作をちょっと進めて終了した。

一方。宗谷学園に入学した萌のほうはというと、今日は友達と街に出ていた。今は帰り列車の中である。ロングシートに肩を並べてちよつと前のほうを見てみた。そこは行き止まりになっていて、一人男の子が前を見てはしゃいでいる。

「萌、さつきから笑ってるけど、なんかあつたのか。」

「ずっとニヤニヤしてたのが気になったらしい。」

「えっ、なんでもない。ただ、昔のこと思い出してただけ。」

黒崎も萌の見ていた方向を見してみる。何を見ていたかはすぐに分かった。

「にしても、電車の前ではしゃいでる子供を見て思い出し笑いするとはなあ。」

「だって、なんか笑えない。ああいうところ見てると。」

「よくわからんなあ。少なくともあたしはあれを見ても笑えない。」

「じゃあ、私だけかなあ。昔の友達みたいだなあって思うの。」

「へえ。萌の友達って電車好きなのか。」

(それだから萌は電車に詳しいのか。)

「うん。幼稚園の時からずっと電車のが好きでさあ。浜松はままつによく新幹線見に行ったり、家で模型で遊んだり、インターネットで動画をあさったりとかね。中でも新幹線の100系が一番好きでさあ、連れてかれたときはダダこねて「帰りたくない。」って言ったり、小学校の修学旅行じゃ自分の座る席に座らずに16号車のドアまで行って東京駅に着く直前までそこにいたりとかしてたからね。」

「それ、先生に叱られたよなあ。」

「うん。でも、怒られた後も100系見たらすぐに復活したりするから。」

「あたし電車のことは全くわかんないけど、その人にとっては特効薬なんだな。だから、ああいう風にしてる人を見ると過去のその人みたいに見えてくるのか。」

「過去のっていう意味じゃないんだけどねえ。今もそういうところ

があるから。」

「その人って成長してるのか。」

「ぜんぜん。大きな子供だよ。でも、そういうところがかわいいんだけどね。」

会話は一呼吸置いたらまた始まった。

「そういえば、宗谷に入学したとき私驚いたわ。世界には同じ顔つきした人が3人いるとかっていうけどさあ、マジでその人に会うとは思わなかった。」

「誰かと、その人似てるのか。」

「うん、鳥峨家大希君だったかなあ。顔つきもそうだけど、声までそっくりだったんだもん。」

「・・・萌。まさかそれで鳥峨家とりがやのこと好きになったとかって言わないよなあ。」

「いわないよ。・・・なに、梓あすな、鳥峨家君とりがやのこと好きなの。」
顔が赤くなった。

「いや、そういう意味じゃないけど・・・。」

「へえ。」

「な・・・何か疑わしいことでもあるのかよ。」

「ううん。別に。」

といったとき外を対向列車が通り過ぎた。すると頭を抱えて、

「はあ。ここからだとパンタ見えなからダメだよなあ。」

「何。パンタとかっていうやつ見ただけで車両の判別つくの。」

「うん。遠江急行えんぎゅうなら菱形ひしがただったら1000系。シングルアームだったら2000系っていう風に決まってるから。ちよつと複雑ひしがたっていえば遠州鉄道えんてつのほう。あれは基本1000形は菱形で2000形はシングルだけど、1000形のうちの1001がシングルアームになってるから。モーターしか変わらないから紛らわしいんだよねえ。」

自分の手で菱形ひしがたとくの字を作ってパンタグラフを再現する。

「遠州鉄道えんてつって全部同じ車両だろ。あん中にも違いあるのかよ。」

「梓。マニアの前でそう言ったら殺されるよ。全然違うんだから。」
2000形はVVVFインバーターっていう高い音の出るやつだけ
ど1000形はそんなのじゃないもん。それに乗り心地で言ったら
1000形より2000形のほうが上。同じことは遠江急行の20
00系と1000系にも言えることだから。」
「あたしには、そんなこと言われても何もわからん。」
「とりあえず、聞けば分かるって。どんなバカでも。」
「それってさあ。もしわからなかったら、萌があたしを馬鹿にする
材料になるよなあ。」
「そのつもりはないから安心して、梓。」
この後列車はすぐに駅に停車した。その時になる音に少し耳を傾
けていたが、やはり梓には違いは分からなかった。
「何がどう違うの。あたしには全部同じように聞こえるんだけど。」
「逆にあたしにはなんでみんな同じに聞こえるかわかんない。どう
いう聴覚してるか・・・ああ、あとこれもあるか。そう思うこと。」
梓が少し首を傾けた。
「遠州鉄道って結構古い車両も持ってるじゃん。」
「持ってるじゃんって言われてもあたしにはわかんないって言っ
てるじゃん。」
「あれ。一番モーター音うるさいんだよ。あの中でよく寝れるなあ
って思う。」
「へえ、うるさいんだ。」
「本当にうるさいよ。時折その電車に乗ってくるんだけどさあ、満
員になった状態でも西鹿島側のところまでモーター音が聞こえてく
るくらいだに。」
「いや、だからあたしに・・・。」
「あの中で寝れる神経がおかしいよねえ。一度精神科医とか耳でも
直してくればって思うくらいよ。」
「何。電車の中で寝ちゃダメなの。」
「梓。電車の中で寝て何が面白いの。電車に乗ったら根気でも起き

「てることですよ。」

「その考え方あたしには理解できない。」

「えっ、何で。これってふつうのことだと……。」

「いや、ふつうじゃない。ふつうじゃない。」

「そうかなあ。」

「おい、自分。その考え方ふつうじゃないって思ったことないの
よ。」

「ないよ。だって、電車乗ったら携帯いじらない。音楽聞かない。

あんまり人と話さない。寝ない。前ずつと見てるは鉄則じゃないの。」

「（どんな五原則だよ。）」

ふと前にまた目を向けてみるとさっきの男子の姿はなかった。

今止まっている小楠おぐすで降りたのだろう。ずっと普通ふつうに乗っている萌
たちにとっては関係のないことだが、ここでは急行きゆうこうと普通ふつうの接続が
行われている。ここで終点まで用がない人は急行きゆうこうに、途中駅に用が
ある人は普通ふつうに流れてくる。しかし、寝過ねごととして急行きゆうこうに終点鹿島ま
で連れてかれるといった客はよく見る。自分も4日前にやってしま
ったことだ。

「そういえば、あたしたち浜松はまから急行きゆうこうに乗ってこなかったけど、
何で急行きゆうこうじゃダメなんだ。急行きゆうこうなら結構早く家につけるじゃん。」

「急行きゆうこうはダメ。寝過ねごとと痛い目に合う。」

「痛い目って。もしかして、自分もやっちゃったのか。」

「うん。やっちゃったよ。目を開けたらなんか知らないところ走っ
てるなあって思ってたらさあ、間もなく終点鹿島ですって言ってた
んだよ。でも2000系に2連ちゃんに乗れたから結果オーライな
んだけどねえ。」

（転んでもただじゃおきないやつ。）

4月28日。昼休み。

「ねえ、永島ながしま。N700系の喫煙ルームでバーベキュウとかやつち
エヌナナ

やダメかねえ。」

佐久間さくまがネタを振った。思わずふいてしまう内容だ。

「やつちやダメだろ。」

「でもやつちやいけないとも書いて無いよねえ。」

「確かに書いてないけど、そういうことするやつがないからじゃねえ。」

「なあ、永島ながしま何。喫煙ルームって。」

木ノ本きののもとから質問が出た。ちよつと予想外だ。

「喫煙ルームって、N700系エヌナナについてるやつだよ。そこ専用で喫煙ができるんだ。」

すると頭を抱えて、

「ダメだ。この頃離れすぎてたから私の中の情報が古い。なんかいろいろなのとごつちやになってる。」

「そのうち思い出すって。今はいわば我慢の時かなあ。」

その頃先輩たちはというと、

「行先エーティーエムってATMでいいんじゃない。」

「うーん。なんか思いつかないもんなあ。じゃあそこにするか。」

「ATMエーティーエムに行つて戻つてくるだけかよ。それだけじゃ能がないな。」
アヤケン先輩が口をはさんだ。

「だから、それだけじゃだめだからKODケーオーディーまで行つて放物線に乗つてグルつて帰つてくれればいいんだよ。NMDエヌエムディーまで。そうすれば時間がそんなないだろ。」

「それだとまだ時間が余るだろ。大体何時の「ホームライナー」に乗つてくんだよ。って言つても1本しかないけど。」

ナヨロン先輩は時刻表を取り出して、ざっと目を通した。

「ふつうに無理だな。どつかで暇つぶさないと。」

「じゃあ、SMZエスエムゼットのエスパルスドリームプラザとかどう。あそこ正直言つてみたいって思つてたし。」

「果たして、それに1年生が乗るかだな。」

「1年生が乗るか。そるかかあ。鉄道好きには少々きついところも

あるかもな。移動意外。」

「そんなこと言ったら旅行なんかできないじゃん。」

「確かにそうだけど。」

「まあ、いまそんな話するのよそうぜ。乗るかどうかは別として、乗らないことはないだろ。初めての旅行なんだし。」

「そうだな。後は俺たちがどう味付けするかだもんな。」

「時間は俺に任せろ。善知鳥（じょうと）じゃだめだし、アヤケンじゃこいつの読み方知らないだろ。」

「なんで俺じゃダメなんだよ。」

「サヤは間違えずにこれ読めるのか。」

「うっ。そ・・・それは。」

「だろ。だから俺に任せろ。えーと、全員唇抜きでいいよなあ。」

「いいわけないだろ。」

さてさて、いったいどういう旅行になるのだろうか。

今からの登場人物

黒崎梓（くろさき ずい）

誕生日

12月12日

血液型

B型

身長

15

7cm

12列車 原則（後書き）

こんな5原則ふつう守れない。

13列車 初旅行の工程

4月29日。今日は岸川学園きしかわがくえんの寮で部活動である。岸川学園の寮きしかわりょう（岸川寮）は正門を出て、南に歩いて行く。すると職員駐車場が見えて来る道を左に曲がって、近くにある神社の前を通ってすぐのところにある。ここの2階はほぼ鉄道研究部の貸し切り状態になっており、中の階段の右側にモジュールなどが保管されており、学習室のほうはほぼ自由に使っていいそうだ。

「えー、今日は5月2日の歓迎旅行にどこに行きたいかってことだけど、どこに行きたい。」

「って、1年生に聞く必要ないじゃないですか。もう行き先決まってるんだから。」

「ナヨロン。ちよつと書いて。」

「サヤ、ATMエーティーエムって浜松はままつから東だよなあ。」

「ナヨロン。それやばくない。編成に詳しいんだから分かるだろ。ぶつづ。」

「うっさい。知ってて言ったただけだよ。」

黒板にうねうねした線を一本。それにつながった線を一本。その端に至り豊橋とよはしと至り東京とうきょうと書いた。

「えーと。まずこれで浜松はままつがどこ分かるか。」

「だいたいここじゃない。サヤ合ってるよねえ。」

「合ってるけど、善知鳥じゆいが書くなよ。」

「呼吸おいて、」

「まず工程を話す。5月2日に浜松駅改札口・・・言うの面倒くせえなあ。ハカグチに6時45分集合。集合したら「休日乗り放題」とかっていう2600円の切符渡して、7時05分に出る「ホームライナー」に乗って静岡しずおかまで行く。そこで、静岡しずおかまで行ったら普通でATMエーティーエムまであっていって、それから国府津こくふづとかいう・・・。」

「国府津な。」

ナヨロン先輩が訂正する。

「それはどつちでもいいから。で、その国府津とかいうところまで着たら御殿場線に乗ってあーって戻ってくる。それで清水の 에스パルスドリームプラザとかいうところであーって休んで、普通であーって帰ってくる。ざっと工程はこんなもん。説明終了。」

「にしていけないだろ。」

ナヨロン先輩とアヤケン先輩がさかさツッコんだ。

「えーと、サヤだとまた端折りそうだから、俺から工程言っとく。」
説明はサヤ先輩からナヨロン先輩に変わった。

「まず、集合はさつき言った通り6時45分。この時間に集合できなかったやつはたとえサヤでも置いてく。それで今回の旅行で使う切符は「休日乗り放題きっぷ」とかっていうやつで、旅する。これが2600円。だから当日は2600円忘れるなよ。で改札おつて一番最初に乗る列車が7時05分発の「ホームライナー静岡」。

それで終点の静岡まで行く。次が8時51分に発車する普通熱海行き……。」

「あーっ。」
サヤ先輩と善知鳥先輩が叫んだ。すると、ナヨロン先輩をどっかに連れて行った。

「しょうがない。今度はぼくが説明するか。」

説明のバドンはナヨロン先輩からアヤケン先輩に変わる。

「さつき言ってた8時54分発の熱海行きに乗って、終点熱海の到着が10時04分。次に乗る列車は11時30分発の普通だから、この間に食うもん食っとくように。まあ、食いたくない人は別だけどな。で11時30分のふつうで途中の国府津で降りる。国府津で降りたら御殿場線の12時32分発の列車に乗って終点沼津が13時50分着。それで、沼津から14時15分発の普通で、途中の清水まで乗る。その清水到着が14時59分。そのあとエスパルスドリームプラザとかっていうところに行つて、清水に戻って17時15分発の普通で終点浜松が18時41分。とまあ、こんな感じだ。」

ああ、あと言い忘れてたけど「ホームライナー」に乗るためには3
10円必要だからそれも忘れるな。忘れたやつはたとえサヤでも置
いてく。」

「はい、分かりました。」
すると、ナヨロン先輩を抱えて、サヤ先輩と善知鳥先輩じゅんじゅうが戻ってき
た。

「何二人でネタばらししちゃってんだよ。」

サヤ先輩に抱えられている状態だったナヨロン先輩がそこから抜け
出して、

「ネタばらしじゃないだろ。いくらなんでも通じないって。」

「そうそう。ナヨロンの言つとおりだぜ。とりあえず工程はざっと
話しておいたけど。」

「そうか。」

サヤ先輩はため息をつくど、

「よし、本当に分かったか今からおさらいする。まず「ホームライ
ナー」って何て呼ぶか分かるか。」

ほとんどの人が手を上げて、自分の考えを述べる。まず醒ヶ井さめがが、

「「ホームライナー」。」

「違う。永島ながしま。」

「HR。」

「そうだ。HR。」

「サヤ。HRじゃなくて、HLエイチエルな。Home Linerホームライナーだから。」

またナヨロン先輩が訂正する。

「んじゃあ次。ATMエーティーエムってなんだ。」

「現金自動預け払い機。」

「醒ヶ井さめがバカだろ。違う。空河そらかわ。」

「熱海あたみ。」

「そう。次、御殿場線ごてんばせんってなんだ。」

「御殿場線。」

「木ノ本きののもと。いい加減気づけて。」

「あつ。分かった。突起、突起。」
「違う。」

「突起違うんじゃないよ。」

「放物線。」

「うわ、スゲエ。永島^{ながしま}当てやがった。」

「感心するところ違うだろ。」

ナヨロン先輩がツツコム。

「とまあそんな感じだ。全員覚えろー。」

「サヤ。まだ注意事項いってないだろ。」

「ああじゃあ頼む。諸君聞けー。」

「えーと、注意事項今からいいいます。注意事項はまず車内へのマッ

クスの持ち込み禁止。」

「善知鳥^{うつくし}先輩。もしマックス持ち込んだらどうなりますか。」

「もし車内にマックス持ち込んだら、窓開けて外に投げ捨てる。」

(今の車両つてだいたい窓あきませんよねえ。)

「その2。車内でもし携帯^{ケータイ}とかが鳴ったら、その人の携帯^{ケータイ}壊します。

どうやって壊すかって言うと、折り畳み式携帯^{ケータイ}はスライドして、ス

ライド式携帯^{ケータイ}は折りたたんで壊します。」

「もし両方だったらどうするんですか。」

「もし両方だったら窓開けて、外に投げ捨てるか。開かなかつたら

着いた駅でゴミ箱に捨てるか、車内のトイレに流す。」

(とにかく。まともな壊し方しないってことね。)

「その3。来た列車が吊りかけじゃなかったら、界磁^{カイジ}チョッパヤダ

吊りかけがいいって言うこと。」

「言わなかつたらどうなりますか。」

「一番最後。やらなくていいだろ。だいたい、今の車両^{車両}なんてVV

VFが多いんだから。」

「んじゃあ、VVVFヤダ吊りかけがいいで。」

「関係ねえよ。とにかく言わなくていいってこと。」

「ちなみにナヨロンはその犠牲者です。」

「言わなくていいつうの。」

最後はナヨロン先輩が善知鳥先輩を押し潰して、この話は終了。

「旅行とかはだいたい決まった。」

横で聞いていたアド先生が口を開いた。

「あつ、だいたい。」

「それで、北齋院君。自己紹介とかはしたの。」

「あつ、とりあえず名前だけぐらいは言いましたけど。」

「1年生に顔とか覚えてもらうために、もう一度やって。クラスと名前と一言でいいから。」

「あつ、分かりました。えーと全員席ついて。今から顔覚えてもらうために3年生から順番で自己紹介することになったから。とりあえず俺から始めるけど。3年5組。北齋院大智です。よろしくお願
いします。」

「カツコすごく天然です。」

「一言余計。次、善知鳥。」

「3年5組善知鳥茉衣です。何か分かんないことあったら聞いてください。」

「3年8組綾瀬健斗です。よろしくお願います。」

「こいつの作ったゴミモジュールいっぱいあるよ。」

「ゴミじゃないだろ。・・・3年6組名寄真佐哉です。鉄道には詳しいんで何でも聞いてください。」

「地図を読むのは苦手です。それと彼女募集中です。」

「一言余計だ。次、ハクタカ。」

「2年8組。鷹倉俊也です。よろしくお願います。」

「「チャンダーバード」と「パクチャカ」にしか詳しくないぞ。」

「「サンダーバード」と「はくたか」だけで悪かったですね。次絢乃。」

「2年8組の楠絢乃です。よろしくお願います。」

「自称。鉄研のホームヘルパーです。」

「違います。次、1年生。」

「1年5組の佐久間悠介さくまゆうすけです。電車は新幹線が興味あります。よろしくお願ひします。」

「1年4組箕島健太みしま けんたです。よろしくお願ひします。」

「1年7組醒ヶ井瑛介さめがえいすけです。電車には全く詳しくありませんがよろしくお願ひします。」

「1年4組木ノ本榛名きのもと はるなです。よろしくお願ひします。」

「1年5組永島智暉ながしま ともきです。電車にはそこそ詳しいのでよろしくお願ひします。」

「次中学生。」

「1年A組の諫早轟輝いさはや ほうけいです。よろしくお願ひします。」

「1年A組空河大樹そらかわ だいきです。よろしくお願ひします。」

「1年A組朝風琢哉あさかせ たくやです。よろしくお願ひします。」

これで部員全員の紹介が終わる。読者の皆様も少しは覚えてくれただろうか。

4月30日。今日で部活決定が仮決定から本決まりになる。

13列車 初旅行の工程（後書き）

ようやくとここまで来ました。

これから2話程度の旅行シリーズになります。どうぞ自分がそこに
いると思って読んでみてください。

本当に読んでくれる人には感謝。それと感激です。

14列車 揺られて（前書き）

現実と大きくかけ離れているところがございますがこの中だけですので。

自己満足なところがあって本当にすみません。

14列車 揺られて

5月2日。4月29日にサヤ先輩から言われたプランで旅行。

6時45分はままつ浜松駅在来線改札口を守るため、余裕を持ってはままつ浜松駅に到着した。だが、余裕を持ちすぎたかもしれない。そこには僕以外誰もいなかった。しばらくそこからそんなに離れないところをふるふると行ったり来たりを繰り返していると、

「ナガシイ。」

聞き覚えのある声だ。でもこの声は萌の声ではない。善知鳥先輩の声だ。

「ナガシイ早いなあ。本当に鉄道好きっていう表われかもなあ。」

「・・・。」

いうことは何もなかった。

またしばらく待っているとアヤケン先輩が、また数分後にはハクタ力先輩と楠先輩が、その数十秒後には醒ヶ井なめがいと箕島みしまが、そのまた数分後にはナヨロン先輩が集合した。6時40分現在、まだ集合していないのは木ノ本きのもとと佐久間さくまと中学生3人。そしてサヤ先輩だ。

改札口が少し大きな荷物を抱えた人で込み始める。でも人数は少ない。荷物が大きいために入れていられるように見えるだけだろう。この2分前には西鹿児島にししかこしまからの「寝台特急はやぶさ」がお目見えする。その7分前には南宮崎みなみやまからの「寝台特急富士」が参上する。両者とフルトレインも東京と九州を結んでいる寝台特急の仲間である。

「よーす。永島ながしま。」

後ろから肩をたたかれた。振り向いてみると木ノ本きのもとだった。さらにいさはや諫早、そらかわ空河、あさかせ朝風の姿もある。

「お・・・お前らいつたどこから来たんだよ。」

「えっ。どこって、こん中からだけど。」

木ノ本は親指で改札口の向こうをさした。イコール。今の今までホームにいた。イコール。「富士」、「はやぶさ」を撮影していた。

「まさか。「富士」と「はやぶさ」の写真撮りに行ってたのか。」
「うん。それにしても大変だったよ。お祭りから逃げるために口実
作って、昨日の20時からここにこもって、「富士」と「あさかせ」
と「はやぶさ」と「出雲」と「瀬戸」と「さくら」と「みずほ」と
「銀河」と「スーパーレールカーゴ」撮影してたんだから。」
「よくやるなあ。」

「ああ、それにしても久しぶりにやったなあ。だから今すつごく眠
いんだよねえ。ちよつと電車の中で寝ながら行くわ。」

「おい、まさか中学生も一緒だったとかって言わないよなあ。」

「それは言わないよ。空河が来たのが6時00分ごろで、朝風が来
たのが6時12分ごろで、諫早が来たのは6時21分だもん。」
（全員俺が来る前にホームが上がってたのか。だんだん木ノ本の撮
り鉄根性がむき出しになってきたかも。）

「あつ、そつ。」

6時45分。まだ現場に現れていないのはサヤ先輩と佐久間だけ。
「サヤとユウタン。置いてけぼり決定。」

善知鳥先輩はそのことを喜んでいらしく万歳をしている。

「相変わらずだな。あいつ毎回時間通りに来ないからなあ。俺たち
が1年生の時の歓迎旅行もボイコットするみたいな勢いがあったか
らな。」

「サヤ先輩ってそんなに時間守れないんですか。」

「守れるには守れるんだけど、こういうときはルールになるってい
うのかなあ。ホント。遊びに行く時だけはこういう風になる。遊ば
ないときは真剣に時間守るんだけどね。あいつって変だよなあ。」

「まったく。後輩を待たせるなつうの。鉄研部の部長が。」

先輩たちが口々に文句を言って遅れてくる部長を待っている。す
ると、3分遅れでサヤ先輩が到着。さらに5分遅れて佐久間が到着
した。佐久間が到着するとみんなから「休日乗り放題きつぷ」の2
600円と「ホームライナー」の整理券料金310円を徴収。しば
らくその位置で待っているとサヤ先輩とナヨロン先輩が「トイカ」

の宣伝が書かれている包みを持って戻ってきた。それを順番に渡していく。渡された包みを開けてみると、切符が2枚入っていた。横に長い水色が買った切符が「休日乗り放題きっぷ」。小さくオレンジ色っぽくなっているのが「ホームライナー」の整理券だ。その整理券が示していたのは6番B席。後でだれがとなりか確認してみると僕の隣は諫早^{いさはや}だった。

6時55分。コンコースでやる作業はすべて完了。それぞれ改札口に上がる。「休日乗り放題」は普段皆さんが使っているきっぷとは違う。改札機を通らず、直接窓口のほうを通って改札を抜けるのだ。そのとき5月2日と書かれたハンコを押される。この後改札を通ることについては改札で駅員に提示するだけでいい。無人駅だった場合は車掌か運転手に提示すればOK^{オーケー}だ。

ハンコを押された切符はこの後熱海まで用はない。包みの中にしまつて階段を上る。階段を上ると今度は右にかじを切つて1・2番線ホームに上がる。

僕たちの乗る「ホームライナー」は1番線に控えていた。窓周りが黒。その下に入るオレンジ色の帯^{ジェイアル}。JR東海の特急車両373系だ。これの3号車に乗り込み、発車の時を待つ。7時05分。「ホームライナー」は時間通り浜松^{はままつ}駅を発車した。

浜松^{はままつ}を発車した373系は快調に東海道本線を飛ばす。浜松^{はままつ}を発車するとすぐに新幹線とはずれ、しばらくすると天竜川^{てんりゅうがわ}を通過する。天竜川^{てんりゅうがわ}を通過すると坂を上って鉄橋を通過する。

「永島^{ながしま} 静岡^{しずおか}まだ。」

後ろの席に座っている佐久間^{さくま}が話しかけてきた。

「まだだよ。まだこれ天竜川^{てんりゅうがわ}だろ。」

「えっ、これ天竜川^{てんりゅうがわ}。もう安倍川^{あへかわ}だと思つたよ。」

とぼけていることは知っている。弁当を食べているときによく話していることだが、本物を聞くとあきれる。

「んなことあるかよ。どこをどう曲げたらこれが安倍川^{あへかわ}になるんだ

よ。」

「ハハハ。そうだな。」

話が終わると、窓のほうを眺めた。下流には東海道新幹線の天竜川鉄橋が見える。

「ちよつと行ってくるよ。」

後ろに流れていく浜松の風景にさようならを言って、外を流れる風景に見入った。

時折下り列車がこちら側の視界を遮る。その時には何系かということがふつうに気になる。

「前が313系で、・・・後ろが211系。」

諫早が側面の色で判断をつけた。読者の皆様にも簡単に見分けたポイントを説明しておこう。まず、313系のラインカラーはオレンジ色。211系のラインカラーは湘南色と呼ばれる緑とオレンジのライン。そして、顔。鉄道は皆同じ顔という概念がある人はぬぐい捨ててほしい。鉄道にはそれぞれ個性があり、皆が皆同じではない。313系はオレンジ色のラインが入った顔、211系は湘南色のラインが入った顔をしている。もちろん。違いはこれだけではないが、今ここで説明してしまうと処理ができなくなると思うのでやめることにしよう。

「313系と211系か。ここら辺ってそついう編成ふつうにやってるんだな。」

「確かに。名古屋圏はこんなくそつたれ編成やってませんもんね。」

「くそつたれかよ。」

「ああ、くそつたれはありませんでしたね。名古屋圏はこんなゴミ編成ないですね。」

「あんまり変わってない気が・・・。」

そんな話で1時間。「ホームライナー」は8時03分静岡に到着。次に乗車するのは8時51分発。普通熱海行き。これまでは少々時間がある。

373系「ホームライナー」から下車して、まず集合がかかる。

8時51分発の列車に乗るためにここに集合しろということだった。その確認が終わると自由行動になる。

「なあ、永島^{ながしま}。おなかすかない。」

木ノ本^{きののもと}が話しかけた。

「えっ、どうして。」

「だって、ご飯食べてないんだもん。昨日の晩御飯から何も食べてない。飲み物は飲んだんだけどね。」

「あっ・・・そう。よくやるなあ。」

「よくやるなあって、このくらい当然だろ。」

「俺は撮りに行ったりとかしたことないから、当然とか言われてもわかんねえよ。」

「えっ。ないの。」

「そんなことより、なんか食べてこいよ。そこら辺にキヨスクだの蕎麦屋^{そばや}だのなんかあるから。」

「それくらい知ってるよ。で、話が脱線したけど、永島^{ながしま}もなんか食べる。」

「食べねえよ。つづか、ご飯家で食ってきた。」

「そうかあ。」

と言ったら階段の向こうにある蕎麦屋^{そばや}に一人駆けていった。

ふと373系に目をやってみるとヘッドマークがさっきの「ホームライナー」から「ふじかわ」に変わっていた。案内には8時17分発。「特急ワイドビューふじかわ」甲府行きとある。

携帯電話^{けいたいでんわ}を取り出して、その写真機能を使う。373系を収めるとそのあとに収めるものはなくなる。

「「ふじかわ」かあ。」

横を見るとさっき蕎麦屋^{そばや}のほうに行っていた木ノ本^{きののもと}が戻ってきていた。た。

「いつの間に戻ってきた。さっきまで蕎麦屋^{そばや}のほうに行つて・・・。」

「ああ、さっき食べて戻ってきた。こういふとき便利だよねえ。あ

の手の蕎麦屋とかうどん屋。ホームにあるから外に出る必要ないし。

「……。そこまで食べるのが早ければ、おにぎりとかのほうが効果的なんじゃない。」

「それもそうかもしれないけどさあ、気分によるんだよねえ。今はおにぎり食べたいうと気じゃなかったから、そばにしたらただけだ。それにそばとか麺類ってするする入って、早く食べ終わりそうな感じしない。」

「ああ、確かに。」

「だろ。こういうときはああいう店に駆け込み入店するのが一番いいと思う。」

(駆け込み乗車じゃなくて、駆け込み入店かあ。)

それは一理あると思った。自分も麺類は好きだし、麺類だと早く食べ終わるといふ先入観もある。

という話は置いて、8時45分。自由行動は終了。さつき確認された位置に全員が集合する。しばらくすると313系を先頭に6両編成の普通列車が入線してきた。この列車で終点熱海まで揺られる。

「ナヨロン先輩。さつきから何見てるんですか。」

僕は純粹にナヨロン先輩が向けている目線が気になった。彼はさつきから313系ではなくて上を見ている。それもずっと向こうの上だ。

「いや、パンタの向きがどっちかなあって思ってた。」

ピンポン、ピンポン。ドアが開いたので、ホームに人があふれる。ドアから吐き出される人の波が終わると今度は乗る人の波。さつきと同じで降りる人も乗る人も同じくらいなのでさほど混みようも変わらない。ナヨロン先輩は先頭のドアのところに荷物を置いて、さつきの説明を続けた。

「313系と211系サイイチサンってシングルパンタニイチイチのつき方が逆なんだ。つまりどっち向きでついているかわかれば、後ろの車両やっを見ないで判

別できる。」

ナヨロン先輩は手でくの字を作つてさらに続けた。

「これがシングルパンタとして、これが東に開いてる車両。つまり今乗つた位置からすれば右に開いてたら313系。左に開いてたら211系ニイチイチつていう風になる。それで先頭車だけ判別したかつたらヘッドライトの色を見ればいい。だいたい黄色っぽいヘッドライトしてる車両が211系。まあ、運用のあれで、311系サンイチイチだつたり313系サンイチサンの名古屋圏の車両だつたりすることはあるけどな。それで、白のヘッドライトが313系2500番台。こころ辺で白は2500番台しかないから、見分けやすいよ。」

「へえ。」

「ナガシイ。そんなところ固まつてないでこつちにくれば。座れるよ。」

楠先輩くすのきに呼ばれて、そつちのほうへ赴いた、

「ほら、ナガシイ座つて。」

「えっ、でも。」

「いいの、いいの。あたしはこれくらい大丈夫だし。」

「やせ我慢するなつうの。お前こそ座つとけ。」

ハクタカ先輩が口をはさんだ。

「別に……。」

「いいから座れ。どうなつてもしらねえぞ。」

楠先輩くすのきはハクタカ先輩に無理やりという形で座らされた。

「チツ。アヤノンのやつうまく逃げたな。せつかくのいじる材料がなくなつちやつたじゃない。」

隣は善知鳥先輩じゆん。今のことはどうやらいじられるという立場から逃げたかつたからだそうだ。気づくと列車はすでに発車しており、次の停車駅東静岡ひがししずおかの案内を行つていた。

東静岡ひがししずおかに止まつて、すぐに発車。次は草薙くさなぎと言っているころ、善知鳥先輩じゆんが話しかけてきた。

「ナガシイ。こつちやつてるのをひまだし、なんか話そうか。全員の

面白い話とか、いろいろ。」

こう持ちかけてきた。今の僕にはそんなに暇ではないのだが、さっきまで「ホームライナー」に乗っていたという反動が大きかった。

「別にいいですよ。」

了承すると後は一方的に善知鳥先輩にペースになった。

「そうだなあ。まず、アド先生の異名とかがって聞きたいって思わない。」

「うーん。はい。」

「アド先生のもう一つの異名はねえ……ハゲ友の会会長よ。」

「えっ。」

「だからその名の通りだって。アド先生今髪の毛ないでしょ。だからそういう異名も5年前の先輩がつけたんだって。そういう話。」

「アド先生のほかの話ってないんですか。」

「アド先生は何かと少ないんだよねえ。でもほかの人だったらこういうの多いよ。例えばナヨロンとか。」

「ナヨロン先輩にもなんか異名みたいなのあるんですか。」

「ナヨロンの場合は伝説だよ。伝説。あいつ電車に異常に詳しいじやん。」

「じゃんって言われても。僕はまだ付き合っってそんなに経ってませんから。」

「それでもわかるだろ。あいつ電車に乗ったら見るところが違うんだよ。パンダグラフとかがっていう……。」

「パンダグラフです。」

「いいよそんなこと。あいつそれ見て、あつこれは何系だとかいうからね。他にあいつが入部したときに青木さんっていう人たちと電車のこと話してたのよ。その時ナヨロン、エスエルの話して、知識で先輩たちを撃ち落としたからね。」

「えっ、ナヨロン先輩ってそんなに詳しいんですか。」

「詳しくすぎだよ。ここがこうなってるからこれは何々だねとかがって、もうどっかの先生みたいに言うから。」

確かに。どこか先生じみているというところはある。

「じゃあ、鉄道知識でナヨロン先輩に勝つって無理じゃないですか。」

「あつ、でも勝つことができる分野もあるよ。例えば、料金とか、距離とか、駅名とか。ここ覚えてるとナヨロンに勝てるよ。」

料金。駅間。駅名。すべて僕が詳しくないところだ。

「ダメだ。僕はナヨロン先輩には勝てませんね。」

「何。ナガシイも電車のことだけなのか。」

「はい。僕、新幹線を除外するなら223系が好きなんですけど・・。」

「ごめん。あたしその時点でついていけない。そもそも223系って何。211系とかじゃなくて。」

「善知鳥先輩。あまりそういうこと言わないほうがいいですよ。」

「それは分かっているよ。でもあたしには違いが分からないんだって。なんせ0系もわからない人よ。」

自慢げに言われても何の自慢にもならない。

「223系ってJR西日本の新快速シニカイソクなんですよ。その1000番台と2000番台の違いはテールライトがヘッドライトのすぐ下にあるかないかなんです。」

「えっ、それだけ。もっと顔が大々的に違いますとかじゃないんだ。」

「だって同じ車両ですよ。違いが少なくなるのは当然です。でも、視認性だけで違いが判断できるわけですから、まだまだ優しい間違えを探しだと思えますが。」

「うーん。そうなのか。」
電車のことを話して首を傾げられることは今までなかった。そもそも萌はこの違いは理解していたし、223系すべての違いも分かっていた。それとも、僕が今までそういう人として話していなかったからこういう結果になったのだろうか。

「ダメだ。やっぱりあたしには電車のこととはわかんない。それより

まだまだ面白い話あるんだけど、聞きたくない。」

何かと停滞した空気を進めたいらしい。うなずいて話を進めさせて、

「ナガシイ。この部活の中で好きな人っている。」

「いませんけど。」

「うそつ。ハルナンのこと好きじゃないの。」

「好きとか嫌いとかいうわけじゃないですけど、そういう目では見てません。」

「なるほど。他の人啊。ならいいや。ちょっと掘り込んだ話しちやつてごめん。でも、この部活には部活内恋愛しちゃってる人いるんだよねえ。」

興味はないのだが何か答えを返さなければと思って誰ですかと聞いた。

「アヤノンとハクタカ。二人とも幼馴染同士なんだけど、冷やかされると否定するから。」

「それって自分がただただ冷やかしたいだけじゃないですか。」

「その冷やかすのが面白いんだって。」

これはどう反応したらいいものか……。

14列車 揺られて(後書き)

新入部員歓迎旅行。ようやくと鉄道研究部らしくなりました。でもこういう旅行にいくとマニアの人の恐ろしい能力が発揮されるんですよねえ。それがあらわになっている人が多いですが、これだけだとまらない人も世の中には・・・。
あーあ。マニアのパワーって本当に恐ろしい。

15列車 熱海 国府津 清水

しばらく313系に揺られて熱海まで行く。途中にはパルプの盛んな富士。旧東海道本線。御殿場線との分岐駅沼津。新幹線の車両基地がある三島と主要駅が続く。三島を発車すると次は函南。函南を出ると次は終点熱海だ。ここ函南と熱海の間には丹那トンネルというトンネルが存在している。このトンネルを通りぬけると隣に東海道新幹線の線路が見える。そしてまたトンネルに入る。そのトンネルを出ると熱海のホームに滑り込む。

「やっところまで来た。」

善知鳥先輩は体を伸ばした。

「よく耐えたな。」

サヤ先輩はそれに感心している。

「よく耐えたなって。よっほど耐えきるのが珍しいみたいな言い方だな。」

「だってそうだろ。お前の場合寝てるかなんかしないとどうかなるだろ。」

この話を聞いていると善知鳥先輩がこの部活に入った理由がなんなのかわからなくなってくる。

「みなさん。集まってください。」

アド先生が集合をかけて、全員を集める。全員集まったら改札に向かい、朝渡された「休日乗り放題きっぷ」を駅員に掲示して出た。改札を出ると人盛り。歩くところが狭いからか東京よりも人がいると錯覚する。僕たちが出た出口付近には足湯と蒸気機関車が展示されていた。多分、日本に鉄道が走り始めたところに走っていた蒸気機関車だと思う。その蒸気機関車の前まで来るとアド先生から指示があった。

「みなさん。これから自由行動にします。11時10分にここに集合してください。」

「はい。」

全員の声がそろつ。それが済んだところで、みな思い思いに解散していった。

「さて、俺たちは昼飯にでもするか。」

佐久間が僕を誘った。

「昼か。早くない。」

「早くないだろ。乗る電車が11時30分なんだから。」

それもそうかと思ひそれに同意することにした。熱海駅側には長屋みたいに建物が建っている。そこに2階はどうやら飲食店が並んでいるらしい。そこに入って、全員で昼を食べることになった。入ったところは2階に上がってすぐのラーメン屋。そこで昼をとったあとは何もすることがない。1回のお土産屋のあたりをふるふると歩いて、家用に買っていくお土産を選んだ。それが終わったらさっきの蒸気機関車のところに戻った。

そこにはすでにナヨロン先輩がいた。ただ、厳密に言えば違う。のんきに足湯に浸かっているのだ。

「ナヨロン先輩。」

声をかけた。すると振り向いて僕のほうを見た。少し驚いたようだ。

「永島か。善知鳥かと思つたよ。」

「善知鳥先輩だったら都合が悪かったですか。」

「悪すぎたよ。もしかしたら、この足湯に突き落とされるかもしれないからな。」

「そうなんですか。」

「いや、それくらいしてきかねないっていうのかなあ。まあ、そんなとこ。・・・ところで、永島今まで何してきた。」

正直に昼ご飯を食べてきたと答えると、

「そうかあ。真面目だな。」

「えつ。お昼ご飯食べるこつて真面目なんですか。」

「そつ真面目。いや、真面目すぎる。こつという業界にいくと昼なんてただ邪魔なイベントになるだけだぞ。永島もそつというタイプだか

らすぐに分かる。」

（そういえば、アヤケン先輩「昼食べたい奴は食べとけ」って言うてたなあ。もしかして、アヤケン先輩も食べてないのかなあ。）

「アヤケン先輩はいま何してるんですか。」

「んっ。確か綾瀬あやせなら、海のほうへ歩いてったと思ったけどなあ。何か写真にでもとってるんじゃないか。ギャルとか、ギャルとか、ギャルとか。」

「それしそうなのは断然ナヨロンのほうだけだなあ。」

後ろを見てみるとさっき噂していた善知鳥ぜんちう先輩だった。その姿を見るとナヨロン先輩はさっさと足湯から出た。

「どうしたナヨロン。」

「いや、何となく。」

一息おいて、

「ところでなんだよ。俺がギャルの写真撮りに行くって。」

「だってしそうじゃん。ナヨロン彼女いないんだし。それに初恋もないらしいし。」

「初恋はあった。フラれただけ。」

「どっちも同じじゃん。そんなことよりナヨロンで遅れてるぞ。このナガシイでさえ彼女いるくらいだぞ。」

「へえ、そうなのか。」

「ナヨロンいつまで、電車が彼女だって言ってるんだよ。」

「勝手に話進めるなよ。俺はそこまでじゃないぞ。・・・ところで、そういう善知鳥ぜんちうには春が来たのかよ。」

ナヨロン先輩がそう聞いた瞬間善知鳥先輩の顔が少し赤くなった。

「い・・・いえるかよ。恥ずかしい。」

少しは恥じらいというものあるらしい。

11時10分。サヤ先輩が1分遅れて集合場所に到着。これで全員そろった。揃ったところで改札口を通り抜けて、またホームに戻る。ホームで待っていると函南側かんなみから白いヘッドライトをつけた車

両が接近してきた。JR東日本の一大勢力。E231系のお出ましである。乗車位置は8号車。15両編成の車両のちょうど中間である。

11時30分。僕たちを乗せた15両編成の車両が熱海を発車する。その隣には185系の「特急踊り子」など。東海道本線の特急列車が並んでいる。熱海を出るとしばし、外の風景に目を向けていた。

しばらくすると眼下に相模湾が広がるようになった。世界に比べれば相模湾などほんの点でしかないのだが、ここから見る限りはそんなことは思わない。あなたには地球の輪郭がわかるように少し丸みを帯びて見える。

「海だ。」
普段海に縁のない人のテンションが上がる。しかし、すぐにトンネルに入ってその視界が遮られる。

「このトンネル死ねばいいのに。何やってるんだよ。」
トンネルに文句を言ってもどうにもならないと思うが……。そのトンネルを抜けるとまた海が見える。しかし、今度は木に邪魔されてよく見えなくなる。これを何度か繰り返して、根府川に停車。その後早川まで相模湾を望み、早川から沿岸部を外れて小田原に。次の鴨宮は東海道新幹線が開業する前モデル線があったところである。ここから30km程離れている綾瀬までモデル線は伸びていた。ここで新幹線のための各種試験が行われたのだ。鴨宮の次は国府津。ここで東海道本線からは分かれる。

12時00分。国府津に到着。8号車から下車して、E231系を見送る態勢をとった。しばらくするとE231系のドアは3回電子音がしてしまった。すると高い歌声を奏でて国府津のホームを後にいしていった。国府津を発車すると線路が左にカーブしている。そこに差し掛かるころにはスピードは70km/hを優に越しているだろう。こんなに早いものかという速さで走り去っていった。

それを見送ったら、御殿場線のホームに赴いた。ここに列車が来

るのはまだ先である。そのころ。さつきE231系が走り去っていったホームにはまた別のE231系が入線してきた。これもさつきと同じスピードでホームから走り去っていく。

「早いなあ。」

ふと言葉が漏れる。

「あんなに早いものかなあ。いつつ寝台特急フルトレとか見てるからあんなに加速率いいとはつきり驚くわ。」

木ノ本きのもとも意外な感じで話している。

「まあ、そこは人それぞれだろうな。普段電車しか見てない人はあの速さがふつうと思って、寝台特急フルトレとかが発車するときはこんなに遅いのかって思う。だけど、そのほうが見慣れてる人はあれくらい速さが速く見えて、寝台特急フルトレのほうがふつうに見える。木ノ本きのもとはそういう方面では正常だよ。」

ナヨロン先輩がさらに続けた。

「乗ってるぶんにはそういうこと考えないんですけどねえ。」

「乗ってるときはそういうこと考えないだろうなあ。他のに気をとられてるから。」

(他のに気をとられてるかあ。そうかもな。)

「。。。。。」

この会話が終わってしまうと3人も黙ってしまった。全員見る風景に気をとられて、そういうことを考えないようにだ。

数分後。御殿場線ごてんばせんの列車を待つているホームに電車が入線する。

今度はさつきの313系と違い211系という車両である。違いは前述したとおりである。

「211系ニイチイチかあ。乗り心地悪い奴だな。」

佐久間さくまが211系を見るなり文句を言った。

「えっ。乗り心地悪いのか。」

「悪すぎだよ。こいつ発車したときにガクンガクンなるからな。」

この表現は相当悪いということらしい。

「佐久間。乗るんだつたら前がお勧めだぜ。」
隣で会話を聞いていたナヨロン先輩が答えた。前の車両のパンタグラフを遠目ながら見てみると2つあった。僕にはそれが何系なのかわからなかった。

御殿場線に乗車して、発車を待つ。12時32分国府津を発車。しばらく外に目を向けていると隣に大量の線路が現れた。車両基地のようだ。そこには211系など御殿場線で活躍する車両が止まっていた。この光景を後にすると山に分け入り、風景的にはそんなに面白くない光景が続く。また数十分揺られていると目の前に富士山が現れた。今日の富士山は晴天に恵まれ頂上まで見える。その写真を僕は写真ではなく目に焼き付けた。しかし、そのころになると風景にも飽きてしまった。もちろん、こうなったらやることは一つだ。席を立って数人誘った。

乗った車両は3号車。隣の2号車に方へその数人を引き連れて歩いて行った。2号車に入るとシートの形が変わった。さっきまでのロングシートがクロスシートに変わった。

（なるほど。ナヨロン先輩が「前がいいよ」って言ったのはこういうことか。）

ここでようやくと白黒はつきりした。
そのころ、誘った諫早、空河、朝風はすでに一番前にかじりついていて。僕もその一員に加わって前を見る。さらに木ノ本、佐久間が加わって6人で前を見つめた。

この状態を終点沼津の手前までや手、沼津に到着する直前に元の場所に戻った。

「お前ら何してんだよ。」
戻るなりハクタカ先輩にそう聞かれた。

「大目に見てやれって。ハクタカだってわからないわけじゃないだろ。」

「確かにそうだけど。ガチでそれをやられると・・・。」
「何か不都合なのか。まあ、普段裏声上げてるハクタカが言うのに

も説得力っていうものがないけどなあ。」

「このう。」

沼津ぬまつに到着。ここからは東海道本線を逆戻りだ。14時15分発の普通列車で、途中清水しみずまで揺られ清水しみずで下車。下車してからは清水しみずの繁華街みずつぽいところを抜けて、東海道線をまたいで、清水しみずの東側にある公園を通り抜ける。途中に踏み切りがあつて、そこを211系が通過していくのが見えた。さらに歩いて静岡鉄道しずてつの鉄橋が見えるところまできた。そこをゆっくりと通り過ぎていく静岡鉄道しずてつの車両を眺めて、また歩き出す。そのあとはいろんなところを通つて行つたため、どこをどう歩いたかなんて覚えていない。30分か40分くらい歩いただろうか。エスパルスドリームプラザに到着。しかし、鉄道好きの僕には何もすることがなく困つていた。ふるふる和中なかつまを歩いていると佐久間さくまが僕の肩をたたいた。

「おい、永島ながしま。見てみるよ。フェラーリ乗り場。」

笑いが噴き出た。当の佐久間さくまも笑いをこらえられないでいる。

「フェラーリつて。フェラーリ乗り場じゃないか。」

「こつから乗れるのは、フェラーリじゃなくて、フェラーリに変わったんだよ。」

こんな冗談誰なら受けるだろう。

15列車 熱海 国府津 清水（後書き）

高い歌声ってモーター音のことですよ。

電車を人に見立てた描写がまた多く出てくるときがあるかもしれない。
せん。

また、電車にも感情があるんですよ。

読者のみなさん。これからはたとえものといえどいたわってやって
と思う今日この頃です。

16列車 3 cars or 6 cars

16時30分ごろ。エスパルスドリームプラザの2階入り口に集合。そこから今度は道を一直線に進んで清水しみずに帰る。予定では乗る列車は17時20分発の列車である。帰路。僕、諫早いさはや、空河そらかわ、朝風あさかぜはさつさと歩いて一番先頭に立ち、その後ろに木ノ本きのもと、さらにその後ろに先輩たちが続く形になった。先輩たちとは距離が離れて、50mメートルぐらいあったと思う。

しばらく歩いて、長い歩道橋らしく物が見えた。その西側に目を向けると清水しみずの駅舎が見える。僕たちの前に現れた歩道橋は自由通路らしく清水しみずまで伸びている。中学生たちはすぐにその通路を伝って清水しみずまで走っていき、僕はそれを追う形になった。改札を通りに抜けて17時15分。十分間に合う。階段を下りてホームに向かった。ホームにはすでにその列車に乗る人たちの人盛りができていた。その頃先輩たちは、

「17時20分。まだ間に合うけど・・・。」

「そうだな。最後の最後ぐらいゆっくり帰らせてくれよだよなあ。」

「これじゃあ、死んじゃうじゃん。」

「できれば、もうちょっとあったほうがよかったなあ。」

電光掲示板に書かれている「3両」の表示にため息をついていた。

17時19分。その列車が入線。そのころには先輩たちもホームに降りてきて、列車を待つていた。

「最後に乗る列車はこいつですね。」

諫早いさはやが乗り込み、空河そらかわが乗り込む。僕もそれについて乗り込もうとした時、

「待て、その列車こいつに乗るな。」

サヤ先輩が待ったをかけた。

「おい、諫早いさはや。空河そらかわ。降りろ。」

その声を聴いて、下りるように促す。すぐに反応した二人はホーム

に降りて、数秒後にドアが閉まった。間一髪である。ドアが閉まった211系はホームから走り去っていった。

「サヤさん。なんで今の列車に乗らなかつたんですか。」
「諫早が下りるといった意味を聞いた。」

「今のは3両だぞ。あんな中に放り込まれたいか。」

「いわゆる。混むから乗りたくないってことだ。」
「アヤケン先輩が解説する。」

「なんです。それ。今に乗っていくっていう風になつてたじゃないですか。だったらあれに乗るべきでしょ。たとえ1両でも。」

「大丈夫。こんなの日常茶飯事だから。お前たちに今後の部活の予定表渡してあるだろ。あれ。今までなかつた日にやることつてなかつたか。」

善知鳥先輩の解説には何となく納得できた。4月の24日以降あつた部活は25日、26日、27日、28日、29日。予定されていた日は25日、26日、29日。27日と28日の部活は最初から予定になかつた。それをやっているのだ。そして、24日の部活も予定されていなかつた。つまり勝手に行われている部活があるのだ。「だから、予定表なんて気にしちゃいけない。予定表通りにやらないのがこの部活なんだから。諸君。分かつたか。」
「こつという部活で、そんなにルーズじゃいけませんよねえ。」
「いけないんだけどねえ。でもすぐになれるよ。」

この後聞いた話だが、善知鳥先輩たちが入部したときからこの状態だつたらしい。ほぼ伝統化してしまつているそうだ。

次に来る列車は17時37分発。普通浜松行き。これには行先の隣に6両とはいつていた。そのため、この列車に乗って帰ることになり、浜松到着は19時04分となつた。

17時37分の列車は211系を先頭にする6両編成。パンタグラフを見ていたナヨロン先輩の判断では後ろは313系ということだつた。

211系のシートに座つて、ポーツと外を眺めていると新幹線の

線路が隣に現れた。静岡しずおかに着いたのだ。その静岡しずおかには長居せずにくぐりに発車。この後「ホームライナー」で通過してきたすべての駅に停車しながら、浜松はままつを目指す。その間はどうしても暇になる。

「永島ながしま。柿ピーでも食べる。」

「おう、食べる、食べる。」

柿ピーがなんなのかは別にして、今は何かしていたほうが暇ではない。そう思って佐久間さくまから柿ピーをもらい食べる。

「木ノ本きののほんも柿ピー食べるか。」

「おやじか。お前は。」

「うるせえな。いいだろ好きなんだから。」

数分後。

「結局木ノ本きののほんも食べるのかよ。」

「そうじゃないって。なんか食べてたほうがまじってこと。なんかやることなすこと久しぶりすぎて体がついていけない。」

「あー、そう。」

「あー、もうこれが夕ご飯でいいや。」

「えっ、柿ピーが。」

「だって、この後夕ご飯のことなんか考えたくないもん。それにお父さんには夕ご飯食べてくるねっていえばそのあとはスルーしてくれるし。」

「なぜお父さんにメール。」

「ああ、うちイクメンだったから。お母さんがJRジェイアールで働いてるって言っただろ。だから、自動的にあたしの世話はお父さんになったわけ。」

「いや、育児休暇いくじきゅうかみたいなの取らなかつたのかよ。」

「取らなかつたらしいよ。お母さんが休んだのは私を出産する間の1年ぐらいで、私を産んだらすぐに職場に戻って運転やつたんだって。」

「木ノ本きののほんの父さんよくそれ了承したよなあ。」

「今考えてみるとかんなんだよ。お父さん昔よく私を連れて駅とか

に出かけてったから。だから、お父さんも鉄道マニアだったんだと思う。けど理由^{わけ}あって、仕事続けられなくなったんだと思う。」

「なんで仕事続けられなくなったんだよ。」

「そんなこと知らないよ。それに小さい時からそんなこと知っちゃったら運転手になりたいなんて思わないって。」

「……。」

掛川^{かけがわ}を過ぎると東海道本線は新幹線と並走する。

「なんか来ないかなあ。」

前の新幹線を見て、木ノ本^{きののもと}がつぶやく。

「なんか来てくれるといいな。でも新幹線つてさあ、なんか来てほしいなあつて思ってる時に来なくて、どうでもいいかって思ってる時に来るんだよなあ。」

「あつ、それよくある。なんで新幹線つてあんなにKY^{ケイワイ}なんだろうなあ。もうちよつと空気が読めればいいのに。」

「ハハ。空気読めか。……なんかわかる。」

すると前を新幹線が通過していった。特徴は鼻の先に光っていたテールライトだった。

「N700系^{エヌナナ}だな。」

「N700系^{エヌナナ}だな。はあ。この頃あいつ多すぎ。」

「これからあの手の車両しかいなくなるんだろうなあ。私N700系^{エヌナナ}あんまり好きじゃないんだよねえ。まだ700系のほうがかわいかったというか。」

「えつ、700系かわいいか。俺あれ一番最初に見たときなんじゃこりやつて思ってた車両^{やつ}だけど。」

「なんじゃこりやか。そこは人それぞれだもんなあ。……永島^{ながしま}さあ、自分が一番好きな車両つて何。」

この手の質問には正直困る。それぞれでいちばんがあるためだ。例えばJR^{ジェイアール}北海道ならキハ261系「スーパー宗谷^{そうや}」。JR^{ジェイアール}東日本なら253系「成田^{なりた}エクスプレス」など。他にもたくさんある。

「一番か。……答えるのに困るなあ。」

「あつ。じゃあ、新幹線でいちばん何。」

「100系と200系のH編成^{エイチ}。俺それが好きだな。」

「100系はどういう顔してるかわかるけどさあ、200系のH編成^{エイチ}ってどんな顔してる。いまいちよくわかんないんだけど。」

「H編成^{エイチ}って、あの100系の顔した200系だよなあ。」

佐久間^{さくま}が確認してきた。

「そうそれ。」

「あつ、なるほど。・・・じゃあ、永島^{ながしま}って「グランドひかり」の100系も好きなのか。」

「「グランドひかり」の100系は好きじゃない。鼻の下にあるひげが・・・。」

「あれって空気取り込み口なんだってなあ。俺もあんまり好きにはなれないなあ。」

「あつ。そうなんだ。知らなかった。」

「えつ、永島^{ながしま}なら知ってると思ったのに。」

「俺確かに電車には詳しいけど、そういう方面詳しくないんだ。それに今の今まで遠江急行^{えんぎやう}の駅と遠州鉄道^{えんてつ}の駅全部言えなかったから。」

山手線の駅は全部言えるけど。遠江急行^{えんぎやう}と遠州鉄道^{えんてつ}とは地元を走っている私鉄のことである。

「それふつう逆だろ。」

「だって、そうだったんだから仕方ないだろ。」

「でも、今なら言えるんだろ。」

「いや。まだちょっと怪しいところがあるけどなあ。順番通りに言える自信ねえし。」

こんな話をしながら211系に揺られた。浜松到着^{はままつ}は19時04分。定刻通りに到着した。

翌日。5月3日。この間は浜松祭り^{はままつ}も絡んで部活はない。毎日のように家の模型で遊んでいる。しかし、今日はちょっと携帯^{ケータイ}をいじって遊んでもいた。

「昨日、部活の歓迎旅行で国府津まで行ってきたよ。」

文面をこうして相手に送る。その返信は、

「ふうん。ところで、何か珍しい車両とか見た。」

「見てない。」

「そう。じゃあ、100系とかも見てないんだね。ナガシイの好き
なやつだけだ。」

「確かに。でも本物見て失神しても困るから。」

「失神じゃないだろ。その前に死ぬだでしょ。うれしすぎて。」

「ハハ。そうかも。」

「でも、ナガシイいいなあ。いろんなところに行けて。次行くとき
は何か撮ってきてよね。お土産はいらさないから。」

「何がお土産はいらさないだよ。いるじゃねえか。」

「まあ、いいじゃん。でも、このお土産だったら買う手間ないよね。」

「確かに。次臨地研修が夏にあるから、その時は何か撮って帰るよ。」

「じゃあ、どこ行くかわかったらメールしてよね。予約入れるから。」

「へいへい。」

そう送ってスライド携帯ケータイの端末を閉じた。

「さて、そろそろ貨物にでも変えるかなあ。」

寝そべった状態から体を起こして、車両子に入る。これを何十回も
繰り返してこの日を過ごした。他の日も同じで6日までの暇つぶし
には困らなかったが、ゴールデンウィーク中に出された宿題は何も
やっていなかった。とりあえず6日の午後に片づけて、次の日から
また部活だ。

5月7日。宗谷学園では、

「何、安希。」

「赤電あかでんって芝本しばもとから新浜松しんはままつまで乗るといくらかかる。」

「赤電あかでんって何。」

「えっ。萌ちゃんそれでも電車詳しいの。」

「分かんないものはわかんないんだから。そもそも赤電あかでんって・・・あつ、遠州鉄道えんてつのことか。」

「ようやっとその意味が分かった。」

「400円だよ。」

「400円ね。そのあと名古屋なごやまで行きたいんだけど、名古屋なごやまでいくらかかるかわかる。」

「ごめん。私詳しいの車両だけだから。」

「あつ、そうなんだ。じゃあ、「ひかり」か「こだま」どっちが速い。」

「えっ、「ひかり」だけど・・・。それわかんないってヤバくない。」

「ヤバくないって。これって知ってたほうがいいこと。」

「そういう意味じゃないけど、それくらいふつうじゃないってこと。つてごめん。話が脱線しちゃったね。」

（本当に萌ちゃんって電車のこと好きなんだな。これで、電車が彼氏あきとか言わないよねえ。）

安希あきはそう思いながら、自分のクラスに戻った。

クラスに戻ると友達に話しかけた。

「ねえ、梓すくも。梓すくもの言うこと本当だったよ。あれってすごいよねえ。」

「すごいというかすごすぎだよ。前なんか、電車なんか見分けられてふつうみたいなこと言われたから。」

「えっ、電車って違いとかってあるんだ。」

「そうらしいよ。この前なんか電車来たのにあれには乗りたくないとかって言ってたし。」

「へえ。」

今度はそのことを萌の中学からの友達に振ってみた。

「そのことだったらあたしたちはどうとも思っていないけど。」

「あれって受け流しとけばいいんだって。梓すくもも安希あきも真剣まことに受け止めようとするとそうなるんだって。聞き流しておけば軽い反応で

済むから。」

「萌ちゃんって昔からああいう子だったのか。」

「いや、少なくとも小学校1年生の時はああじゃなかった。」

「小1の時は……。つまり小2からああなっただっていうわけ。」

「そういうこと。萌よく電車に詳しい男子と休み時間中話してて、本人が言うにはそれだけで覚えちゃったらしい。新幹線のこととかいろいろ。」

「へえ。」

お弁当を食べ終えて、机にのめっている萌の姿を見る。

「でも、このごろ元気がないんだよなあ。彼氏と違う学校になったからかなあ。」

「えっ、あれで。」

「あつ、梓あずなたちが知ってるのは電車の話するときの萌だけ。中学の時とかもそうだったけど、授業とかになったらあれがふつつ。だから、電車の話してる時のほうが生き生きしてるように見えるだろ。」

「……。」

「本当はその人のことが死ぬほど好きなんだよ。なのに、何で別の学校に行ったんだかあたしにもわかんない。」

「……。」

ところどころ聞こえてくる言葉を背中受ける。ふと机の中からスライド携帯ケータイを取り出して、端末を開いた。待ち受け画面は阪急8000系。永島ながしまが好きな車両の一つである。

「……。」

5秒くらいの間8000系を見つめて端末を閉じた。

一方岸川学園では、

「結局ボイコットするとかみたいなこと言ってたけど、しなかったじゃないか。」

醒さめヶ井が呆めがれたように言った。

「するわけないだろ。1年生のいない歓迎旅行ってなんだよ。まあ、サヤ先輩がやりそうみたいだったけど。」

「善知鳥先輩が言つてたけど、サヤ先輩つて時間にとつてもルーズなんだつて。それだから、歓迎旅行の時に「サヤがボイコットした歓迎旅行」だつて先輩が言つたんだつて。」

「鉄研の部長が時間守れないつて死んでるよなあ。」

「あれで、将来なんになるんだか知らないけどさあ。」

「ハハハ。」

その頃3年生のほうは・・・、

「ハックション。」

「食事中にくしゃみするなよな。サヤ。」

「いや、誰かに噂されてる。まったく誰だよ。こんな時間に噂する

ゴミなやつは。」

「ゴミなやつつて。それお前おほい十八番だな。」

「ところで、今日部活あつたつけ。」

「ないよ。」

「ないのかよ。ホントゴミだな。」

その頃部室では・・・、

「お・・・お前。のぞきに来たわけじゃないんだから、ハンマー投げることないだろ。ていうか、それで窓が割れたらどうするつもりだつたんだよ。」

「そついうときは、のぞきに来たバカタカに弁償してもらつたよ。なんでそんなにあたしの下着姿見たいわけ。」

「見たいわけじゃねえよ。ちようど絢乃あやのが着替えてることが多いんじゃないか。つつか、そんなに見られるのが嫌なんならあつちの更衣室ういしつに着替えればいいじゃないか。あつちなら見られないんだから。」

「今ちようど体育でバレーボールやつてるんだからしょうがないだろ。あたし教室じゃなくてここで昼食べてるんだから。」

「一人で食事かよ。さびしい奴だなあ。」

「別に。教室で食べるとバカタカと一緒に食べないのかって冷やかされるから。」

「教室に帰ってくれば同じだろうが。」

その言動にあきれ閉じた目を開けると、

「何胸見てるんだよ。体育の後は制服が透けて下着の解像度がいいみたいな目で見てるなよ。」

「それ、お前の一方的な考えだ。」

「黙れ、このバカタカ。」

絢乃あやのは机の上に置かれていた小物入れの引き出しからポンド水を滴下する注射器を取り出した。

「バカやめろ。それはヤバいって。」

「バカタカ。どっちの目に打ってもらいたい。」

「どっちも嫌だわ。」

とまあ、今日も一日ふつうに過すごしている僕たち鉄道研究部てつどうけんきゅうぶである。

今回からの登場人物

そのだあき

蘭田安希

誕生日

3月10日

血液型

B型

身長

157

cm

16列車 3cars or 6cars (後書き)

この小説に出ているほとんどのキャラクターには電車からの由来があるんですよ。

今回の安希も東京〜広島間を走っていた「特急安芸」からきてます。

17列車 中間テスト

5月9日。歓迎旅行かんげいりょこうが終わって最初の部活。ゴールデンウィークの時浜松では盛大なお祭りがあるため、ほとんどの浜松市民はそっちへ貸し出される。浜松祭りとして有名である。凧上げや屋台の引きまわしなどなど。いろんなことをやっている。

今日の活動は文化祭に展示するモジュールというものの製作である。モジュールとは小さなレイアウトをたくさん繋げて一つの大きなレイアウトにするためのパーツのことを言う。それを作っているのだ。僕達がつけているモジュールは中に留置線を設けた駅のような風景のもの。まあ近くに駅はないためただの引き込み線と言った方がいい。それを作っているのだが、あれからほとんど進んでいない。それから少し日がたってテスト期間になる。この時はどうしてもモジュールの進行はストップしてしまう。それよりも少し心配がある。

「永島ながしま。今回のテスト勝負しようぜ。」

友達の宿毛すくもに誘われる。

「おう、いいよ。今回は絶対負けないからな。」

「よく言うよ。でも、今回はいい勝負になるだろうな。英語に至れば中学の復習だもんな。」

「ハハハ。で、ソッコウで悪いんだけど、数学教えて。」

「おい、数学こそ俺が教えてほしいわ。」

「まあ、そういわずに。」

「はいはい。そうしないと勝負になんないもんな。特にお前の場合は。」

宿毛すくもから数学、国語、英語、現代社会、生物。いろいろ教えてもらってテストで勝負する。45分後。テストが始まり50分のガチンコ勝負がスタートする。それを3時間。次の日に2時間。終わったらどうなるかというのは想像に任せよう。

テストが終了しテストが返却される。

「永島ながしま何点だった。」

宿毛すくもに聞かれてテスト用紙を見せる。

「マジかよ。この点数シートだぞ。」

「宿毛すくもは何点。」

「これ。でも永島ながしまの点数にはとどかないな。その点数取られると。

他ので挽回しなくちゃいけないじゃないか。」

「大丈夫。俺も国語が足引つ張るから。」

「その割にはいつも勝ってるじゃないか。」

「永島ながしま。何点だった。」

佐久間さくまが聞いてきた。

「まあまあだったよ。」

(こいつ。頭いいってこと知られたくないのかよ。)

数日後。テストの合計と平均点、クラス順位が出る。

「やっぱりこういう結果かあ。今回もまいりました。」

「いい加減にしてくれよな。俺こういうの好きじゃないんだよなあ。」

「

「順位だけはお前嫌いだな。俺が頑張ってるときにお前が手を抜いてくれればいいのに。」

「それじゃ勝負にならないだろ。」

「お前なら勉強しなくても大丈夫だって。」

「さすがに勉強はしないと無理。1時間くらい。」

「今回1時間も勉強してないよな。」

一方他のクラスでは、

「今回のテスト、5組の人が学年トップなんだって。」

「蘭らんそれどこから。」

「興津おきつ先生の話をちよつと聞いちゃったから。名前までは聞きとれなかったんだけどね。でも、そんなに珍しい名前じゃなかったと思う。珍しいやつだったら覚えてるし。」

(5組って。もしかしてあいつかな……。いやいや。バカっぽい

し、ないよな。」

「心当たりとかってあるの。」

「いや別に。」

「だよねえ。」

友達の室蘭にはこういったが、やっぱり気になった。

「だから聞いたんだけど。誰だかわからない。」

「何。どういうこと。」

「うちの担任の沖津さんの話だと5組の生徒が学年トップ亭ことらしいんだけど。誰か心当たりないかなあって思って。」

「永島。宿毛君だよねえ。学年トップって。」

「ああ、そうじゃない。宿毛頭いいし。」

だが箕島はこう思っていた。

（学年トップってこいつだぞ。木ノ本さんこいつが同じバカ友とかって思ってるのか。そして、同じクラスの佐久間はこの事実知らないんだ。）

「じゃあ、宿毛君っていう子が今回の学年トップなんだ。」

「ああ。多分ね。」

ふと、このとき室蘭が言った言葉が再生される。

（珍しい名前……。宿毛ってふつうに聞くような名前じゃないか。じゃあ、鈴木とかっていう名前だよねえ。だったら覚えてないのも裏付けるけど……。）

だが、そう思っただけで声にはしなかった。

「ていうか。今日からだよねえ。部活。」

「ああ、そうだな。」

「あー、これでまた文化祭まで休めなくなる。もうちょっと家でゴロゴロしてたいのになあ。」

「ゴロゴロって。永島の場合それ毎日やってるだろ。」

「ゴロゴロしてるから休めるんじゃないか。あー、家で遊びてえ。」

「永島の場合はもう遊ばなくてもいいだろ。普段から遊んでるようなもんなんだから。」

「ダメ。普段から遊んでるけど、遊び足りない。」

(いつまでこんな子供みたいなこと言ってるんだよ……。)
そのあと永島ながしまにどう話しかけていいのか。その言葉を失った。

6限目終了。これからホームルームをやって、掃除。今週は掃除担当ではないため、長いホームルームが終了したら、部室に即行で向かった。

「宿毛すくも。永島ながしまとテスト勝負してたみたいだけどどうだった。」

「あ。ああ、それなら、永島ながしまの勝ちだよ。俺は今回も負けた。」

(えっ。)

その会話を聞いて目が点になった。

(永島ながしま。あのとき学年トップは多分宿毛すくもだって言ってたよなあ。まさか、そういうの知っててああいう風に言ったのか。知られたくないのかよ。いずればれることなのに。)

「あいつ生物で満点取りやがったからなあ。俺も90点台は叩き出したんだけどシクツチまってな。それがあつちの決勝点って感じなんだけどなあ。」

「ところで、お前合計何点取ったんだよ。」

「えっ。俺が474点で、永島ながしまが475点だったけど。」

「はっ。おめえら最強じゃん。」

「まあ、今回は内容が中学からの布石で簡単だったっていうところもあるけどな。」

「お前からその学力でなんでここに来たんだよ。」

「永島ながしまは鉄研やりたいから。俺は併願校落ちたから。」

「マジかよ。俺あんなバカっぽい奴に負けたのかよ。」

「気落とすなって。俺もこの頃勝ててねえんだよ。」

「宿毛すくもに勝てないってもう無理じゃん。俺勝ってこないじゃん。」

「あきらめんなって。俺もいつかは抜いてやるうって思ってたんだ。あいつ1番嫌いだから。そうしてやれば、永島ながしまのほうは満足してくるんだけどね。」

「だったそれだけ。」

「だって。そうしなきゃ永島ながしまがうるさいんだよ。」

「永島ながしまってホントよくわかんねえな。」

「……。」

その話を耳で受けながら、掃除を終わらせると家に帰った。

17列車 中間テスト（後書き）

こういう人いたらウザいですね。

またこれって案外敬遠されがちなんでしょうか。

登場人物のほとんどが鉄道に興味があること以外はふつうだと思いますが……。やっぱりその知識量が掘り込みすぎてますかねえ……。

話は変わりますが、感想は受け付けておりますので……。感想がありましたらどうぞ書いてください。そうしていただけると嬉しいです。

18列車 模型選び

テストが終了すると部活は再スタート。これから文化祭までピッチを上げる。6月に入ると衣替えで、男子も女子もポロシャツに夏のズボン・スカートに替わる。6月初頭。僕達のモジュールが完成。ここまでくれば何をすることがない。

「名寄君。文化祭で使う車両を決めたいんだけど。」
「分かりました。」

すると、

「永島。車両庫行くけど、一緒に行かない。」
「行きます、行きます。」

ナヨロン先輩についてまた岸川寮に赴いた。

岸川寮に入つて階段を上がって右にかじをきると右側に5枚扉が現れる。ここには分けて鉄道研究部のものが詰まっている。

「とりあえず説明しとくけど、相談室4には展示で使うときのモジュールとかが入つてて、自習室1が車両庫。自習室2と3がモジュール保管庫。自習室4はどうでもいいもんが入ってる。」
そう説明してくれた。

アド先生が自習室1の鍵を開けて、ナヨロン先輩と僕が続けて入った。

「名寄君。6時間で4周回だから・・・。」
「10分に1回交代が1時間で6回。6時間で36回。それが4つで144回。それだけ選べばいいんですよ。」

「そうです。」

「じゃあ、適当にやっときますから任せてください。」
それを聞いてアド先生は他の部屋に言った。

「あのお。ナヨロン先輩。ここにあるものって全部アド先生のなんですか。」

「ああ、だいたいな。時折OBが寄贈した奴があるだけ。」

「あつ、223系とか「サンダーバード」とかいろいろある・・・。」

「自分が走らせたいやつなんでも入れていいよ。でも時折・・・。」

「それじゃあ223系と「サンダーバード」と「253系」^{ネックス}と100系。」

「ああ、ごめん。言っただけじゃなかった。走らせたいって言っても新幹線^{しんかんせん}はなしだ。新幹線^{しんかんせん}が在来線^{ざらいせん}走ることになるからな。」

「でも、E3（イースリー）系とか400系はありってことでよね。」

「確かに。そういう言い方するとそうなっちゃうな。・・・入れたいのか。」

「はい。」

「分かったよ。じゃあ2本はエントリーでいいな。」

それからというものの僕は2段ベッドの下を占領している箱の中から走らせたい車両を引き抜きまくった。キハ283系「特急スーパーおおぞら」。485系3000番台「特急はつかり」。E351系「特急スーパーあずさ」。383系「特急しなの」。373系「特急東海」。快速ムーンプライトながら「683系「特急しらさぎ」。787系「特急つばめ」。代表的なものはいれたい入れた。だが144も車両を選ぶとどうしてもネタが尽き気味になる。3年もこの部活にいるナヨロン先輩でも困るくらいだ。

「そうだな。今回は313系^{サンイチサン}の0番と211系^{ニイチイチ}の5000番つなげて中央線^{ちゅうおうせん}の快速やるっていうのもいいな。」

「ナヨロン先輩。去年の文化祭きて思いましたけど、313系に211系を連結した運用ってあるんですか。」

「あるよ。歓迎旅行^{かんげいりょこう}の時にも乗っただろ。御殿場線^{おでまがせん}の列車。後ろは211系^{ニイチイチ}だったけど前は313系^{サンイチサン}の3000番だったじゃないか。」

「あのおう、そんなこと言われても分かんないんですけど。」

「だよなあ。313系^{サンイチサン}ってややこしいからな。」

ため息をついて説明し始める。

「まず0番台が東海道線の快速で4両編成だろ。300番台がその2両編成バージョン。1000番台は0番台の中央線バージョン。1100番台はそれのLEDバージョンで、1500番台が1000番台の3両編成バージョン。2300番台は2両編成でダブルパン装備準備車。3000番台はダブルパンの2両編成。2500番台はここら辺の3両編成で5000番台が6両固定の快速用。8000番台は中央線のセントラルライナー用ってな感じだからな。まだいっぱいあるけど。」

「えっ。313系ってそんなに番台あるんですか。」

「ああ。でもこれなんか西日本の223系に似てるんだよな。」

「223系だったら分かります。0番台と2500番台が関空快速用で1000番台と2000番台が東海道線の新快速用。」

「あと6000番台のダブルパン車が地下鉄東西線に乗り入れることができて、ワンパンのやつは221系との共通運用。5000番台は「快速マリンライナー」で5500番台が霜取りようにダブルパンになった2両編成ってな。」

「あつ、223系の中にも知らないのがある。」

「永島なら知ってると思っただけどなあ。知らないんだ。この部活に入ってればいやでも詳しくなる。」

話しながら車両を選ぶ。

「そうだ。永島。貨物列車だったらどれがいい。2軸貨車だけの古きき国鉄貨物か、コキ50000形だけの旧高速貨物か、コキ100系だけのJRFの高速貨物か。もしくは鮮魚特急っていう」とびうお「か、タキ1000のタンク貨物列車か。」

「別に何がいいっていうやつはないですけど……。つつかそれだったら家にもあります。」
それを聞くとナヨロン先輩は何か思い出したようだった。

「あつ。そうだった。これ聞いてなかった。お前文化祭当日何持ってくる気。」

「えっ。考えてるのは「カシオペア」と「北斗星」と「トワイライ

トエクスプレス」と「出雲」と「瀬戸」……。

「寝台特急のほとんどな。」

「あとは「雷鳥」と「しらさぎ」ぐらいかな。」

ナヨロン先輩はしばらく考えてから、

「なら。「出雲」はDD51（デデゴイチ）の重連で持ってきてくれない。あと他に「カシオペア」や「北斗星」の牽引機はなにが来る予定になってる。」

「「カシオペア」はEF510の北斗星色で、「北斗星」はEF81の予定ですけど。」

「EF510（アオカマ）とEF81（ホシカマ）かあ。分かった。それで「雷鳥」っていうのはパノラマグリーン。それとも非貫通グリーン。」

「それって何か重要ですか。」

「いや、自分の中にあるイメージを膨らませてるだけ。永島だったら分かるだろ。模型は想像だって。」

「はい。何となく……パノラマグリーンですけど。」

「はい、了解……「ネックス」のさあ253系の12両編成持つてくれる。」

「できるにはできますけど。」

「じゃあそれも頼む。で持つてくる寝台特急は「カシオペア」、「北斗星」、「トワイライトエクスプレス」、「出雲」、あとは九州特急の何か自分が好きなの……って言うって分かんないか。「あさかぜ」とか東京から、大阪から九州に言った寝台特急のことこういうんだよ。それだけでいい。できれば、牽引機は全区間エントリーが望ましいけどな。」

「はい、分かりました。」

「大体こんなところかな……。これじゃあサヤ達のほう考えてなかったな。自分達のほうはこれで終わりでもいいか。よし永島。サヤ達のほうも考えるぞ。」

他に残っていて有名な車両や特急は883系「特急ソニック」。

小田急のHiSE、ハイエスイー LSE。エルエスイー 2000系「特急南風」。なんぷう キハ85「特急ひだ」。781系「特急ライラック」など。

「かわいそうだから221系でも入れといてやるか。あとE259系もこつち。225系もこつち。」

「こつちにも「北斗星」ほくとせい入れときましようか。あとは「カシオペア」も。」

「そいつら牽引するEF510（カシカマ）とEF510（アオカマ）が「いやだ、いやだ。」っていつてるぜ。」

「なんですかそれ……。」

「まあそれは冗談だけど。これも入れてやれEF210（モモカマ）」。

「いや、ナヨロン先輩ここはEF200のほうがいいですよ。」

「EF200（ハイカマ）。そいつやめとけ。スカイダイブ経験6回の強豪だから。」

「ともかくそれどういう意味ですか。」

「今は知らなくていい。そのうち分かる。」

そんなこと話しているうちにこちらもほとんどナヨロン先輩が決めてしまった。ここにはずっと所属していたから何がどうなっているのか分かっているのだろうか。それともただ自分の好みで選んだのか。

その日の帰りの列車。小楠おぐすに停車した時だった。

「あれ、ナガシイ。」

振り向くと萌の姿があった。同じ方面に通っているのだが、こつちであつたのは久しぶりだ。

「よーす。久しぶり。」

「なあ、萌。あたし邪魔見たいだからどっかいつてるか。」

萌の隣の人が聞いた。

「別にいいよ。ここにいても。」

「お前おぐすが小楠おぐすくるって珍しいな。」

「今日は友達とこつちに来ただけだから。」

「へえ。」

「そうだ。ナガシイ。そつち文化祭っていつある。」

「確か、・・・何日だった。」

「そういうと思ったよ。ナガシイそういうこと気にしてないもんね。6月13日でしょ。」

「ああ、確かそう。」

「見に行くからよろしく。家から何か持ってくるの。」

「「カシオペア」とか「北斗星^{ほくとせい}」とか。まあいろいろ持ってくるよ。」

「じゃあ、貨物も持ってくるわけ。」

「貨物は持ってかない。学校にあるみたいだから。」

「そう。じゃあ26両はやらないんだ。」

外を浜松方面に向かう列車が通り過ぎる。

「何系。1000系。それとも2000系。」

「パンタ見えないから分かんねえよ。多分普通だから1000系だろうな。」

「でも、1000系も2000系も関係なしに普通とか急行に使ってるよね。」

「確かに。最初から運用が分かっていたらこうやって苦労することもないんだろっけどな。」

「ハハ。・・・部活楽しい。」

「うん。先輩達はみんなハイテンションだし、1年生は多いし中学生からも入部があったくらいで。」

「へえ、多いんだ。その中に女子とかいる。」

「いるよ。同じ学年の中に隠してなければお前と似てる人もいるんだけどなあ。」

「.....」

このとき会話を聞いていた友達。黒崎^{くろさき}には端岡^{はしおか}が言った言葉が再生されていた。

(あのことって本当だったんだな。電車の話してる時のほうが生き生きしてるって。)

「へえ、そうか。かくしてなければ私と同じね。中に入るんだね。そういう人。」

「まあ、女子ならそういうところは意識しちゃう人もいるだろうな。」

「……。なんでそんな話すんのよ。暗くなるじゃん。」

「ああ、そうだな。じゃあなんか別な話でもするか。でも、何話す。」

「ナガシイ、2日に熱海行ってきたって言ってたじゃん。その時の話でもいいじゃん。」

「ああ、そんな時の話かあ。いいよ。」

話している間に芝本に到着。萌は小楠おぐすから乗ってきた友達と別れて、僕と帰路に就いた。

「文化祭に持つてくのは去年と同じで身分証でいいんだよねえ。」

「ああ。多分それだけでいい。」

「それじゃ6月13日見に行くから。」

そういって萌と別れた。

18列車 模型選び（後書き）

今回は会話がマニアックすぎてごめんなさい。

この先も時折このような列車が出てくるかもしれませんが、読んでくれる人には感謝。

19列車 運び屋

6月8日。岸川寮に集合。

「おい、諸君。運ぶぞー。やれーっ。」

サヤ先輩がみんなに指示を出した。するとまずアヤケン先輩が動いて、

「はーっ。」

相談室4から裏声。するとアヤケン先輩はとても大きく口を開けた木の箱を持って相談室4から出てきた。

「おめえらもやれー。」

アヤケン先輩に促されて僕達も相談室4に入る。相談室4にはさつきアヤケン先輩が運んで行ったのと同じ箱が5つ。1年生は2人ずつでこの箱を運び出す。だが、必ずと言っていいほどドアから出るときに問題になるのだ。箱を長いほうのままドアを抜けようとする^{っか}と問える幅。縦に持つと今度は自分達が問える。でも何とか抜けることができる。抜け出したら階段を下って寮の玄関まで輸送する。これをこの後何度も繰り返す。2階に戻ると今度は大きな箱の代わりに衣装ケース。部活では白い箱で通じている。これには引き出しの代わりにモジュールが入っている。それを2・3年生は2段。もしくは3段。1年生は1個ずつ運んでいく。

しばらく同じ動作を繰り返していたが、モジュールを乗せる岸川のハイエースの荷台が満タンになったため、まずこれを学校に運んでいくことになった。

「えーと。一人乗ってください。」

先輩達は行きだそうとしない。むこうで何かあるか分かっているのだ。

「えーい。全員右手を上げる。」

何が始まるのか・・・。

「最初はグー、ジャンケン、ポン。」

何が始まるのかと思えば、ジャンケンかよ。

「はい、ハクタカ行つてらっしゃい。」

「マジかよ。」

「じゃあ北斎院君きたさいけん。上にしまつてあるモジュール全部出してください。」

「へーい。」

ハイエースが寮から出ていったところで、僕達は2階に戻つてさつきから出している白いケースを下に運んでくる。玄関には白いケースが7段くらいになつた山が2個くらい。

「おーい。こんなに積むんじゃないよ。」

アヤケン先輩が注意する。

「アヤケンその持つてる奴また上のつけようぜ。」

「やるなつうの。」

「おつ、ナガシイいい所に来た。乗せろーつ。」

言われるがままに乗せる。

「バカ。下ろせ。もう乗せるな。」

「アケ先輩注意もいいですけど、運んでくださいね。」

しばらくすると第2陣でハイエースが戻ってくる。またハイエースが満タンになると第3陣に持ち越し、第3陣が来ると運び出したものはすべて乗りきつた。荷物が全部乗ると僕達は歩いてホールのところまで向かう。

鉄道研究部が展示を行うホールは僕達1年生が授業を受けている南棟ではなく北棟というところにある。ここの1階なのだ。

ホールの北側には第1陣で連れてかれたハクタカ先輩と第2陣で連れてかれた楠先輩が運び入れたものが詰まっている。僕達は第3陣が到着するまで待っている。待つこと数分。第3陣のハイエースが到着。後ろから荷物を降ろして、いっしょに運んできた車両も運び出した。

今日の部活はここで終了。これからの1週間はずっと文化祭の準備である。

翌日6月9日。今日部活動はない。6月10日。今日から本格始動。

「まずは作ったモジュールを運びこんでください。」
アド先生の指示で部室にある作ったモジュールを運びこむ。運びこんだら8日に運び入れたところにまず入れる。

「ええ、次は・・・。名寄君^{なよる}。1年生ひきつれて特教6の机をここに運んで来てくれる。あと事務室に頼んで昇降口下の長机も出して。」
「分かりました。おーい1年生と中学生行くぞ。」

まずはアド先生に言われた長机から。ナヨロン先輩曰くめんどくさいらしい。その長机を運び出すと佐久間^{さひくま}がこういうことをやった。

「永島^{ながしま}。バズーカ隊用意。ズドーン。」

「おいおい。」

それをホールに運び込む。軽いには軽いのだが、何回も往復すると手が痛くなる。3往復目で長机がなくなる。次は南棟1階の一番東の部屋特別教室6から机を運び出す。ここには2段重ねで学習机がぎっしりと埋まっている。

「うわあ。ゴミっていつけにあるなあ。」

「ゴミかよ。」

「とりあえずこれ運んで。一人2つずつでいけるだろ。・・・よし、行けーっ。」

今度は学習机を抱えて何往復。もう何回行ったり来たりしたかなんて数えてられない。ふつつなら軽い机でもずっしりと重く感じられた。

学習機が必要数に達すると次はモジュールが並ぶように机を並べていく。一つはホールにある長机とさつき運び出した長机で収まる。もう一つは学習機が長机の代わりになる。

「永島^{ながしま}。その机こつちに持ってきて。」

「アヤケン先輩。これはどつちに持ってたら。」

「木ノ本^{きののもと}。まだモジュールはいい。・・・ああ。あとそのゴミ落と

してもいいから。」

「ハクタカ。これ中にいれるから受け取って。」

「んっ。バカ。箱ごと中にいれようとするな。」

「ナヨロン。部誌間に合いそう。」

「サヤのバカ。なんで進めとかないんだよ。」

「おーい、ナガシイ。この・・・アヤケンこれなんだっつけ。」

「えっ。ああ、ゴミ2号だよ。」

「このゴミ2号をむこうのほうに運んどいて。そんでもってサメちやん。このアヤケンのゴミ3号はあっちに運んどいて。」

「あっ。アド先生。313系の5000番台のギアボックスください。」

「ナヨロン裏切るな!。」

「絢乃。ライダーこの向きでここにいれといて。」

「はいはい。」

「こつち一般人通行不可ね。」

「なんですか。そのハルヒ的な。」

「あっ、そうだサヤ。今年はみんなでコスプレする。」

「いいよ。コスプレなんかしなくても。まあ帽子だけはかぶりたいけどな。」

「じゃあナヨロンは全身ね。あとは帽子だけでいいか。」

「勝手に決めんなよ。」

「大丈夫。あれ着て似合いそうなのは1年生の中にもいるし。それにナヨロンが着るとなんか渋くなるんだよね。SL好きっていうのがその渋さを後押ししてる感じで。」

「どういうやつじゃ。それ。」

「ねえちよつと1年生集まって。」

「善知鳥先輩に言われて、ひとまずサヤ先輩達のところ集合する。」

「ねえ、みんな乗務員が着てる服、着てみたいって思わない。」

「ちよつと考えるところがある。なおこの問いについては醒ヶ井と箕島はやダ。木ノ本、僕、諫早、空河、朝風は帽子だけならと回答。」

「でも、一つだけ問題があるんだよねえ。今回は帽子だけっていてもこの数ないんだよね。去年作ったから8人分しかなくて。」

「善知鳥もよくやるよなあ。」

「逆を言うとは家庭以外ダメダメだからなんだけどなあ。」

「それは今関係ないだろ。でも何人でかぶるかなあ。女子のやつはあたしのアヤノンの分しかないし・・・、男子のやつは6人分しかないもんな。うーん。よし。あたしの独壇場で決めよう。えーとサヤはかぶるでしょ。アヤケンはずり外回りってことが多いからいいでしょ。ナヨロンは向こうの内勤だからかぶって、ハクタカもかぶる。」

あとはナガシイかな。でもあと一人余ってるなあ。・・・じゃあ残りはサメちゃんでもいいか。」

「ここまで考える頭があるんだったらもうちょっと進路のこと深く考えろよ。」

「うるさいなあ。いいだろ。で、あとは女子のほうか。ハルナンがかぶりたいうって言ったから・・・。アヤノン別にかぶらなくてもいいよねえ。」

「はい。」

「うーん・・・。やっぱりかぶせよう。」

「や・・・やめてください。あれかぶってるとなんか冷やかされそうで。」

「よし。かぶせよう。」

「嫌です。」

この時今まで部誌に取りかかっていたサヤ先輩が何かに気付いた。

「お前ら何やってんだよ。ちゃんと仕事しろ。」

「おいおい。それ今気付いたのかよ。」

「サヤ。本当に眼科が精神科医に行ったら。ヤバイよ。」

「眼科が精神科医に行くのはナヨロンだろ。この知識量と今更教師になりたいっていうこの頭どうにかし・・・。」

ポカッ。

「黙ってやれよ。」

「はい。すみません。」

今日はホール入り口手前に凹おっの集会を完成させるところまで進んだところで解散。この次は次の日にまわる。

6月11日。今日は真ん中に設置する大周会の二つ目。この周回は長方形で組成させる。

「ナガシイ。この「綾瀬車両区」あやせしやうくをむこうに運んで。」

ここで呼ばれた「綾瀬車両区」あやせしやうくとはモジュールに付けられたタイトルらしい。

「で、ハルナンはこっちの「青木海岸」あおきかいがんを運んでつて。それで、ミツシイは「青木海岸」あおきかいがんの片割れ運んで、サメちゃんはそこの「ピザ」お願い。」

ちなみに「ピザ」とは45cmセンチ四方のコーナーのことである。

「あおう、善知鳥先輩。このコーナー……。」

「コーナーじゃないつて言ったでしょ。「ピザ」「よ」「ピザ」。どこにでもいいから運んどいて。」

本人はどうしてもコーナーのことを「ピザ」と呼びたいらしい。

「それで、……ハクタカ。お前の作った「鷹電」たかでんのやつってどこにある。」

「それだつたらもう使いましたけど。」

「ここに1枚余つてんだけど。」

「善知鳥先輩バカですか。それは「鷹電」たかでんじゃなくて「貨物駅」かもつえきですよ。目玉あんのか。」

「ナガシイごめんね。ちよつとハクタカ待てー。」

「まったく。子供かよ。永島。この「貨物駅」かもつえき持つてつて。セツティングは俺がやるから、仮置きだけでいいよ。」

とまあごたごたがありながらも何とか完成。ここで今日の活動も終了。続きは6月12日に持ち越しである。

19列車 運び屋（後書き）

気づいたら文字数がえらいことに・・・。

このままいったら最終回までに文字数と読了時間が・・・。
自分でもこれはすごいと感心します。

あと展開が遅くてすみません。

それでも読んでくれる人には感謝です。

これからも根性で続けていきたいと思えます。

20列車 文化祭前日

6月12日。いつものように朝学校に登校する。

「はあ。永島ながしまいいよなあ。部活でクラス展の準備逃げられるんだから。」

「何。逃げたかったらお前も鉄研とかに入ればよかったのに。」

「いや。俺はもう部活には入る気なかったからな。こういう時に限ってそういうのが裏目に出るとは。」

「そういえば、俺たちのクラスってどんなクラス展やるの。」

「お前ホームルームの時に言ってたやつすぐに忘れてんだな。そこまではつきりした頭だったら俺も持ちたいよ。・・・お菓子みたいな作って売るんだって。」

「へえ。」

「でも、永島ながしまの場合は来れないの前に来たくないだよなあ。クラス展より部展のほうが楽しいだろうから。」

「まあ、確かに。」

「ならこつちから見に行くか。その時は差し入れ持ってってやるよ。」

「気持ちだけにしてくれ。」

「分かった、分かった。気持ちだけってことで投票は鉄研部に入れとくからな。」

「えっ、何。投票って。」

「本当にはつきりした頭だな。何も聞いてない。ある意味感心するよ。」

「いやあ、それほどでも。」

「ほめてないってこと分かってるよねえ・・・。」

「そりゃ当然。」

8時30分。普段通り点呼。9時00分。文化祭準備開始。部活としての集合は10時00分。それまでの間クラス展の準備をほん

の少しだけ手伝う。9時55分。南棟3階の部屋から目の前の階段を使ってホールに赴く。ホールにはもうすでに部隊は終結済み。僕達が最後に集まった。

昨日とおとといで模型を走らせる周回は完成している。今日やるのはこれから設置するプラレールの展示と周回に電気を流すための配線作業をすることだ。

「おい1年生。むここの武道場とかつていうところからベニヤ板持ってきて。」

サヤ先輩の命令でまずはベニヤ板。それを持ってくると次は学習机を等間隔で並べその上にベニヤ板をかぶせ、シートをさらにかぶせる。だが、このシートをかぶせる作業が以外と疲れる。

「ねえ、善知鳥先輩。ここ机ありますか。」

今机の上に乗っているが、足を降ろすところを間違えば机に頭を打つ。

「大丈夫。そこにはあるよ。」

善知鳥先輩が机の下に入って上にいる僕に安全だと信号を送る。それが終わったところでゆっくり足を降ろす。下の地盤がかたい。机の上だ。端まで来て、飛び降りる。もちろん端まで机があるわけではないので、ここも踏み外したら机に頭を打つ。とりあえず何の事故もなく完了。

次はOBが持っているというプラレールを設計図通りに敷設すること。設計図にはレールに当たるところが線で示されており分かりやすい。そしてその線に少し交差するように書かれているのは継ぎ目のことだという。

「とりあえずやるかあ。青木あおきさんもここもうちよつと詳しく書いてくれれば分かりやすいんだけどなあ。」

「まあそれでもやるしかないだろ。今日は青木あおき先輩手伝いに来れないんだから。」

「んじゃあ。ナガシイ。このレール類とにかくつなげまくって。直線レール5本。」

ブラレールは鉄道ファンたる者全員が通る道。いつもの手つきでレールを繋げていく。一方その時サヤ先輩達はブラレールをガンガン繋げていく。だんだん形ができてきて真ん中あたりに橋脚を10個くらい積み上げたタワーが完成した。

「おい、サヤ。そっちから何人が引き抜いていい。」

「ああ、いいよ。」

「永島、箕島。ちょっとこっち来て。」

ナヨロン先輩に呼ばれて凹の周回にやってくる。

「これから配線ってやるんだけどさあ。それやってくれない。そんなでやって覚える。以上。」

「あの。名寄先輩。それじゃよく解らないですよ。」

「さすがにいい加減すぎたかな。」

と言つて床に置いてある黒い箱を手を取つて僕達に見せた。そこには青と白のコードの先端に端子が1個ずつついているコードとつける端子が3つついているコードの2種類が入っている。またそのコードの中には赤と黒だったり茶色と白だったりと色にバリエーションがあった。

「これをファイダーってところにつないで、コントローラーのあるところまでつなげる。永島ながしまだったら分かるよなあ。」

「ああ、まあ。」

「それで繋げる時にやっちゃいけないのは内回りと外回りをこつちやに結線すること。そうしたらどつちかが逆走することになるからな。そこだけ気をつけてやれ。」

これだけ支持された。ようはつなげばいいのだ。

ファイダーというのはだいたいどういう恰好をしているかというところパターンあると言つていい。まず一つ目は線路にコードの端をくつつけているタイプ。二つ目は線路に電気を流せるようになってる専用の線路にくつつけるタイプ。あともう一つは線路の特定の場所に差し込んでくださいというタイプ。学校にあるのは2番目にいったタイプ。このタイプのファイダーはこの周回の中に4カ所。

コントローラーの位置からは柱の陰になってしまう部分。その次は一つ目のフィーダーのあるコーナーの反対側のコーナー。三つ目は二つ目のフィーダーがある一の反対側のコーナー。ここがコントローラーから一番近い位置にある。そして四つ目のフィーダーは三つ目のフィーダーの反対側のコーナーに設置してある。ここからさつきナヨロン先輩が見せてくれたコードをバンバンつないでコントローラーに結線した。

結線が終了したら次は電気が流れるかどうかのテスト。前にナヨロン先輩と選んだ中からEF210を取り出して外回りの線路に乗せる。アド先生曰く機関車とマイクロエース製の車両が滞りなく走れば問題ないそうだ。

コントローラーの電源投入。ディレクションスイッチを前進に連れてコントローラーのつまみをまわした。だが、EF210はピクリとも動かない。ライトもついていない。

「どうしたんだよ。こいつ。」

「あつ。永島^{ながしま}。そいつはゴミだ。モーターがいかれてるから。EF510（レトサン）にして。」

「あつ、はい。」

EF210を線路から外し、ナヨロン先輩が持ってきたEF510を線路に乗せる。気を取りなおして、再び電源投入。するとEF510は少しピクツと後ろに動いた。このままでは逆走になる。ディレクションを前進から後退にしてまたつまみをまわす。今度はちょっと前に進んですぐに滑り出した。コントローラーから離れて少しの間EF510の走っている姿に見入る。家でいつも見ている光景と分かっていても飽きない。

とりあえず何の滞りもなく一周。次はマイクロエースの箱を探してその車両を走らせる。とりあえず手に取ったのは783系という九州の特急車両。それを外回りに並べて同じ動作を行った。すると少しばかり突つかかかってしまうところがある。そこを木の板で修復しながら、783系を何周かさせる。その間に問題も解消。次は貨

物列車などの編成もの。これが途中で連結を解除しなければ完了。なのだが、毎回どこかで貨物列車は開放すると言ったので、これに完璧を求めることはできないようだ。

とりあえず貨物列車も何の滞りもなく1周。これで電気系統は完了だ。

この時にはプラレールのほうも50%がたで完了している。ふと時計を見ると12時13分となっていた。昼ごはんの時間だ。昼ご飯には持ってきた弁当。食べるのが面倒くさいと思いつながら、流しこんで13時05分作業再開。午後はプラレールの準備。遊びながらやっていたため15時ちょっと前に作業を完了。次は、体験運転のコーナりの設置である。

「諸君集まれ。」

善知鳥先輩が全員を衣装ケースが積み立てている前あたりに集めた。

「これから体験運転のやつを組み立てるんだけど、時間ないから全員でやろう。」

「だから、あれさつさと片付けとけって言ったのに。」

「さつさとっていう前に青木あおきさんいなかったからどう組み立てていかわかんなかったじゃん。」

「てめえら、時間がないならはじめようぜ。そんなところで時間くってるなよ。」

アヤケン先輩が話に歯止めをかけて、全員に複線の高架レールを手渡した。

「まずはそのレールつなげ。」

全員に行きわたったのを確認して指示を出した。

「あつ、待った。まだダメじゃん。おい、善知鳥ちちどり。白い子ない。白い子。」

「えっ、白い子。」

「ほら、アヤケン。白い子。」

「サンキュー。」

ナヨロン先輩から渡された箱の中には横2センチcmくらいしかない直方

体の白い物体がたくさん入っていた。アヤケン先輩はその1個を取り出して、

「まず、この白い子を高架レールの下の子の部分に取り付ける。2個くらい取り付けて、取り付け終わったらほかの高架レールをつなげる。これやって。後、下についてる突起下になるように取り付けなきゃダメだぞ。でないと、あーってなるから。」

「あーってどうなるんですか。」

「深入りしないでいいから、まずはやれ。」

さっき言われた動作を行って高架の直線レールをつなげていく。それを10何人でやると20本くらいの束が一気にできる。

「全員で直線レール量産してんじゃねえよ。こんないらなんて。」

「そのことに気付いたアヤケン先輩が量産を止める。」

「カーブレールだれかやれよ。カーブしない体験運転所作ってどうすんだよ。運転面倒になるだけじゃないか。」

「あたしそんなこと知りませーん。」

「知つとけ。」

「アヤケン先輩これどうするんですか。」

「多分6ペアぐらい、12本は使うかなあ。その束ねたやつをもう一度束ねて、4本にしたやつを俺にパスして。そのあとはどうにでもなるから。おい、善知鳥。橋脚のやつどこにあるかわかる。」

「橋脚ってあのラーメンみたいなやつか。」

「そう。食べるラーメンのやつ。それどこ。」

「お前の足元にあるだろが。」

「あつ、あつた。ごめん。」

「アヤケン先輩。言ったとおりにはやりましたよ。」

「あつ、サンキュー。うわつ、バカたれ。マガンなボケ。」

それを受け取ったら、新幹線しんかんせんのよく見る橋脚を3つ取り出し、線路の継ぎ目に取り付けてる。「カチャ」という音を立てて、何かがはまる。1個取り付ける作業が完了したみたいで、アヤケン先輩がそ

の位置から手を放した。すると橋脚は継ぎ目のところに礼儀正しくはまっている。さっきの音はこれがはまる音だったらしい。他の2か所も同じ作業で、はめ終わると、体験運転コーナーになるところの一番奥に置いた。

僕たちもただ見ているわけではない。僕は箕島^{みしま}が4本にした高架レールを受け取って同じように橋脚を取り付ける作業を行った。

「アヤケン先輩。他のもやっておきますか。」

「いや、これはもういいよ。ていうか、そっちに駅作ってくんない。」

「何駅がいい。綾瀬^{あやせ}駅とかでいい。」

「何でもいいけど、綾瀬^{あやせ}駅はやめて。出来ればサヤ駅とかのほうがいいんじゃない。」

「それ関係ないだろ。はあ。木ノ本^{きののほん}。多分その箱の中に駅舎の建物があると思うから、それとって。」

サヤ先輩が指差した箱の中を探してみる。すると汚れた白い駅が出てきた。その看板には「新大阪」と書かれている。どこをモチーフにしているかはすぐ分かるが、本物とは似ても似つかない。

「ありました。」

「サンキュー。後、そん中に白いプレートみたいなのがいっぱいあると思うからそれもとって。それに空いてる溝の部分にさっきの白い子を逆向きで入れて、ほかのプレートとドッキングさせる。それやって。」

サヤ先輩に促されて作業を開始。プレート同士をさっきのレールと同じ要領で取り付け、ほかのプレートを取り付けていく。それが4枚くらいになったところで善知鳥^{せんくう}先輩に手渡し、そのプレートをさっき掘り出してきた駅舎の上に設置した。さらにその上にレールとホームを設置。1面2線の島式ホームが現れた。

「よし、こっちは終了・・・。」

すかさずナヨロン先輩がツッコんだ。

「なわけないだろ。駅舎を境にして両方に垂れ下がってる高架駅が

どこにあるって言うんだよ。」

「狭い日本でも、そういうところくらいあるよ。」

「あるかもしれないけど、これはないだろ。駅舎過ぎたらすぐに地面まで下がるのかよ。実物にしても40メートルくらいしかないぞ。」

「なあ、善知鳥^{じゅんちう}。ボケるのもいい加減にしようぜ。こんな駅ないことには変わりないんだからさあ。」

この駅舎から急速落下するプレートの下に橋脚を設置して、垂れ下がりをなくす。これで、さっきからアヤケン先輩がつなげていた高架橋と連結。1周する体験運転コーナーが完成。すぐに配線がなされ、カーブの下にあるファイダー専用取付口に高架線用のファイダーを取り付け、コントローラーと結線。E1（イーワン）系新幹線^{しんかんせん}「MAX^{マックス}」と800系新幹線^{しんかんせん}「つばめ」をそれぞれ3両ずつおいて電気が通ることを確認。両方ともスムーズに走ったため走行テストも完了した。そして、なんとか前夜祭に間に合わせた。

20列車 文化祭前日（後書き）

話を作っていくとだんだんキャラクターに個性が・・・。

自分にはもうちょっと文才と考える能力が必要だと感じます。

なお次の話でも文化祭前のことなので・・・。本当に展開が遅くてすみません。この状態だと8月のイベントまで行くのにいったい何日かかるんだか・・・。

21列車 前夜祭

前夜祭。

「1年生諸君集まれ。これからも系の運転訓練やるぞ。」

運転訓練とは文字通りのことをする。なんで必要があるのだろうか。「注意事項は急発進、急停車しない。脱線したらすぐに列車を止める。の二つよ。」

「善知鳥が言えることか。」

「だから、2人ずつ来てまずナガシイとハルナン。次がミツシイとユウタン。次がサメちゃんとイサタン。最後がアサタンとソラタンだよ。」

凹の周回に入ってコントローラーのつまみを握る。線路上に置かれた車両はJR東海の車両311系と313系だ。つまみをゆつくり回すと311系のモーター車（3号車 モハ310形）だけがむなしく動き出した。

「列車は知らせてる時はもれなくマックスにしているから……。」
ポカッ。

「しちやダメだぞ。まあどうしてもこいつゴミだってゆう模型があったらやっていいけどな。」

三つ目の注意を受けて1周。1周したら訓練生交代。箕島みしまに代わって運転訓練終了。

1年生全員の運転訓練が終了すると前夜祭に入る。その前に先輩達が配置を決める。

「ナヨロン。そっち何人必要。」

「明日青木あおきさんも来るっていうからこっちは後2人くらいでいいよ。」

「じゃあ、そっちにミツシイとナガシイでいいでしょ。でハルナンがこっちの内勤で、中学生は新幹線しんかんせんの体験運転でしょ。あとは外回りでもいいでしょ。」

「それでいいな。」

「永島。箕島。ちよつとこつち入つて。」

ナヨロン先輩に呼ばれて凹の周回に入る。

「えーと、次はここにある車両どれでもいいからこの線路上に並べて。」

「リレーラーとか無いんですか。」

「あるにはあるんだけどねあれ青木さんの私物だとかって明日手伝いに来る人がいうもんで、基本使わないほうがいい。」

「なんですかそれ。」

「気にしないでいいよ。ともかくリレーラー使わずに線路上に早く乗せられればいい。」

僕は223系を探して内回りに、箕島は何でもよかつたらしく373系を手にとって外回りに置き始めた。これはなれないと少し難しい。特に機関車などの車輪の多い模型はすぐには言うことを聞いてくれない。僕はいつも家でやっている手つきで次々と車両を整列させていったが、箕島のほうはそうではないようだ。車両の高さに視線をおとして両手で丁寧^{みしま}に並べている。箕島が373系3両をレール上に設置し終わるとき、僕は223系8両のうち6両(3号車サハ223形)を置き終わり7両目(2号車モハ223形)に取りかかっている時。作業スピードが浮き彫りになる。10秒後ぐらいに作業を完了した。

「終わりました。」

「やっぱりやつてる人は違うなあ。」

ナヨロン先輩独り言のように呟いてから、

「永島。明日223系も持ってこれる。」

「別に必要なら何両でも持ってきてきますけど。」

「さすがだな。」

「おーい、諸君。」

善知鳥先輩がみんなを読んだ。

「これから、これでレールを磨いてもらう。」

善知鳥先輩が持っていたのは右手に綿棒、左手に「UNICLEANER」と書かれたボトルだった。これでやる作業は大体見当がつく。

「このレールクリーナーで線路を磨け。」
そう言っていた。

「さて、やるか。」

「正直これ面倒なんだよなあ。」

「何。永島家に模型でもあるのか。」

「ああ、じいちゃんが作ったこれの10倍くらいあるやつがな。」

「……。」

思わず顔が引きつった。

（さすが、永島家。それを作ったっていうと永島宗一氏か……。なんつう社長だよ。暇人なんだか。）

「へえ。根っからの鉄道好きなんだな。」

「ああ。でも……この構図ってちょっとやりづらいところもあるかも。」

やってみると案の定そういうところが出てきた。例えば凹の周回になっているほうでは駅構内。この駅の屋根は線路側に大きくせり出している。つまり綿棒が入り込める隙間が小さいく綿棒の頭も小さいため、レールと接地しにくいのだ。

「ナヨロン先輩、もうちょっと便利なやつってないんですか。TOXのクリーングングカーとか。」

「んな便利なものこの部活にあるけど、持ってきてない。時折、そこだけにレールクリーナーぶちまけるだけっていうのがあるから。」

「最低なクリーニングカーですね。」

「永島。その言い方はちょっと違うぞ。この部活はそういう不都合なことはゴミで片づけるんだ。」

「ああ、そうですね。ていうか、いまそんな話どうでもいいです。」

「ナヨロン先輩。これって他にどこやったらいいですか。」

「全部だよ。」

「全部。まだ、駅しかやってないのに。」

「ていうか、木ノ本もここに固まってるなよ。早くしないと6時までに終わらないんだから。」

「でも、時間通りに終わる例っていうのも少ないんですよ。」

「そう。時間通りに終わるっていうのも少ないし、予定した日にやらないっていう例まであるからなあ……。て、そんなことどうでもいいだろ。やれー。」

「はいはい。」

全体にレールクリーナーをやるのと同時進行で、モジュールには列車が走っている。今僕たちのほうには223系が走っている。

「永島。もうちょっとでそっちに列車が行くぞ。」

ナヨロン先輩から注意がある。僕はそれを聞いて手を引っ込めた。

223系はぼくのほうに接近してきたのだが、あるところを境にしてガクツとスピードが落ち、ついには止まってしまった。それもありがたいことに僕の前だ。

「ナヨロン先輩。223系止まっちゃいましたけど。」

そういうと、すぐにナヨロン先輩が駆けつけてきた。

「あー、もうこいつダメだな。」

そう言っただけで入っている5号車（モハ223形）を抜き取って、床を見た。

「永島。ちょっとレールクリーナーと綿棒貸して。」

綿棒とレールクリーナーを渡すと、ナヨロン先輩は車輪を外して、車輪の一つに綿棒の頭を当てた。そのあと車輪の上のあたりから延びる緑色の棒を少し回すという作業を開始した。それを1台車3回、2台車6回繰り返し返して、再び線路上に戻した。

「永島。走るかどうが見て。」

そう言い残して、コントローラーのほうに行った。

「永島行ってる。」

「まだ行ってません。」

そういったすぐ後、223系のモーター車がピクツと動いた。そし

て、ぎこちなくではあるが前に進み出した。

「ナヨロン先輩。走りましたよ。」

「了解。」

それを聞くとすぐに223系を止め、前と後ろに話された車両を連結。8両にして、走らせた。8両編成もゆっくり動き出し、何とか走ることが確認された。

「永島ながしま。これなんて言うやつ。まあ、特急じゃないのは見ればわかるけど。」

木ノ本きのもとが話しかけてきた。

「223系。関西の新快速だよ。これはライトの部分が広がってるから2000番台だね。」

「他のとどう違うんだよ。」

「明日223系の1000番台持つてくるからその時見せてやるよ。一発で分かる違いだぜ。」

「ふうん。そんなに違うんだな。」

「ああ。だって、テールライトのついてる位置も大きさも違うからな。」

「なるほど。」

「おい、木ノ本きのもと、永島ながしま。話してるのもいいけどちゃんと仕事しろよ。」

「だってもうレールクリーナーは終わったんだもん。」

「なんか別なこと探してやれ。」

そう言われて、ほかのことを探す。だが、結局レールクリーナーの仕事に落ち着いた。今度はEF510が牽引する貨物列車が走っている。

「なんかいつぱいつないでる。」

「おい、ナヨロン。加減しろよ。加減。つなげすぎだる前夜祭なのに。」

「いいだる別に。」

「1、2、3、4、・・・。」

木ノ本は隣でコンテナ貨車の数を数え始めた。何ともカラフルなものである。赤、緑、黄色、青、黒、ピンク。本物の貨物列車はここまでカラフルではない。

「15、16、17。全部で17両つないでる。」

「17両か。なんか驚くような数字じゃないね。」

「永島が驚く数字つてなんなんだよ。」

「えっ、32両とかそんぐらい。」

「32両つて。機関車にひけないだろ。」

「いや、引けるつて。1600ト級の貨物列車は計画上だけだけどあつたわけだし不可能じゃないつて。それに模型だつたら脱線しない限り何両でも引けるんだから。」

「じゃあ何。40両の貨物列車だつて可能とかっていうの。」

「ああ、言う。だけどうちじゃできないんだよなあ。26両しかないから。」

「十分あるじゃないか。」

その話はナヨロン先輩にも聞こえてたらしい。

「なになに。永島コキ26両あるの。じゃあ持ってきてくれよ。俺

17両じゃ物足りないつて思ってたんだ。頼む。」

「あつ、いいですよ。機関車どうしたらいいですか。」

「機関車は学校にあるやるでなんとかする。機関車つて走ればコキ引けるんだからな。」

「なんですか。その走ればいいみたいな考え方。」

「だつてそうなるだろ。模型の場合特に機関車は走りさえすればそのあとに何両続いても関係ない。だからそういう答えに行きつく。間違つてないだろ。」

「確かに。」

「うちのEF210（モモカマ）で最高のやつに引かせる。東海道・

山陽本線の長大貨物列車をやるうぜ。」

「いや、それだつたら学校のコキも使つて32両にするべきです。」

「バカ、32両なんてEF200（ハイカマ）が引ける量だぞ。3

390kWのEF210（モモカマ）に引けるわけない。」

「・・・考えてみればそうですね。EF200って定格出力6000でしたっけ。」

「そう。6000kWだから引けるの。」

「それ実際やってませんよねえ。」

「やる前に電気的問題があつてな。今の電気事情のままじゃだめだからやれないだけ。もっと電気の供給能力が上がれば、やれるらしい。」

「持つてくるか持つてこないかっていうところから結構話が脱線してるんですけど。」

「あつ。そうだったな。じゃあ、悪いけどそれもお願いな。」

「はい。」
18時00分。前夜祭終了。作業もやることがないため活動は終了した。

家に帰るとすぐに車両庫に走った。

（えっと、223系1000番台とコキ26両と「253系」と、

「カシオペア」と「北斗星」。なんかたくさんあるなあ。引き受けすぎたかなあ。）

うすうすそう感じながらも執事に頼みに行った。

「お願い。明日の文化祭でこれを高校まで運んでほしいんだけど。」

「そういうことでしたら、喜んでお引き受けしますよ。車両を運ぶついでに坊ちやまもお乗りになっただろうですか。」

「いや、送ってくれるのは芝本までいい。そこからは電車で行く。」

「はあ、しかし・・・。」

「いいんだって。そのほうが楽しいから。じゃあ、箱はもう車に積んどくから。」

そう言つて車両庫のほうへ走つていった。

その後ろ姿を見ていたのは執事ではなかった。

「なんか、昔駿君に引き連れられて浜松駅まで行つていた時と変わ

らないな。」

「隆たかのり則様。」

「和田山わたやま。手伝ってやれ。」

「……はい。隆たかのり則様。」

3箱目を運び出し出している姿を見ると昔同じようにここに通っていたいとこのことを思い出した。今自分の息子はその人と同じ学校にいるのだということ改めて実感した。

今回からの登場人物

永島隆則ながしま たかのり

和田山わたやま

21列車 前夜祭（後書き）

ようやく文化祭の前夜祭まで行きました。

これから2・3話かけて文化祭の中身。まだまだ先が長いなあ。
ネットにアップしている原作を作りながら思う今日この頃です。

22列車 当日

6月13日。文化祭当日。文化祭は9時からであるが僕達はいつも学校に行くように登校しなければならない。結局家の車で送ってもらった。こういう措置は模型の輸送のためである。運転手も手伝ってケースをホールに運び込む。

「よーす、ナガシイ。早いじゃん。」
ホールには既に3年生と中学生が集まっている。皆考えることは同じなのだろうか。

「ナヨロン先輩。言われたやつ持ってきましたよ。中に言われてないのも入ってますけど。」

「あつ、ありがと。これで今日1日は持つな。」
中で僕の持ってきた箱を受け取って中身に見入る。

（うーん。「北斗星」と「カシオペア」と「出雲」と「富士」。あとはEF510（アオカマ）……。これは「北斗星」に対応してるんだよな。それとEF81（ホシカマ）。いや、これが「北斗星」か。あとの機関車はその通りか。で、永島の言ってた言っていないやつっていうのが「しなの」。でも10両って。まさかな……。）

「何かありましたか。」

「いやなんでもない。……それと一つ聞くけど、これ全部走るんだよな。」

「昨日走行試験やってきましたから大丈夫ですよ。全部走ります。」
展示場に箱を入れてから8時25分までホールで遊んで、8時28分に体育館入り。8時50分ごろまでの開会式を経て、9時00分から文化祭開始だ。

「永島。外に5000番（313系）と300番（313系）の併結入れて。」

「はい。内何にするんですか。」

「373系か、311系か。それとも2500番（313系）と2

11系の併結か。迷うところだけど、ここは373系の「東海」だ
る。」

「ですな。」

「箕島。俺たちが行っていいよっていったらすぐに走らせて。」

ナヨロン先輩はすぐさま373系の箱を探して、線路に置く。先に
内回りの作業が完了し内回りから走りだす。だが、・・・、

「ヤベ。永島がパンタ車あっち向きで入れたってことはあれ逆じゃ
ん。」

「名寄先輩。止めますか。」

「もういいよ。直すの面倒だから。そのまま行っちゃえ。素人には
わからん。」

「箕島。外線も行っていいよ。」

「よし、永島次だ。」

「えっ、早くないですか。」

「一つの列車の走行時間は10分。10分の間に入れ替えしないと
いけない。もたもたしてられないよ。」

「じゃあ、次は「しなの」行きますか。」

「うん。じゃあ「しなの」外に出して、内回りは・・・0番(31
3系)と211系の併結でいいか。並べて。」

「10両でいいですか。」

「6両だろうが、8両だろうが、10両だろうがなん両でもいい。
持ってきた箱から「しなの」を取りだす。この「しなの」は基本編
成6両と付属編成4両の10両編成。編成は大阪〜長野間で走って
いる「しなの」の運用である。今からナヨロン先輩が外に取りだそ
うとしているのは中央本線(中央西線)である快速列車。東海道線
の静岡圏でもそうだが、ここでは313系という新型車両と211
系という従来の車両の併結運転が行われているらしい。

作業をしている間に9時00分。一般客の入場が始まり、たちま
ちホールは子供たちでこった返す。

「さて、ゴジラが入って来たぞ。」

そういうのは何となく分かる。子供は何でもかんでも触りたがるというのがある。これは模型にとって強敵だ。触るということは脱線の危険性が増すということ。普段脱線しないところでも脱線するらしい。ひどい時には走ってる車両を押さえつけるため走っている車両すべてが横転することもあるらしい。

とりあえずこのゴジラは外回りの人に任せるとして、9時05分内回りを373系「特急東海」から313系0番台（運用は1000番台）と211系の併結へいけつに変える。外回りは東海道本線の新快速しんかいそく列車から中央本線の特急「しなの」に変える。ポイントを変えて「しなの」が発車していくのを見送ってまた次である。次はJR東日本に移るらしい。253系「特急成田エクスプレス」とE231系（209系？）の総武線をこれまで走ってきた車両を片づけて線路上に出す。作業を行っていると、誰かに話しかけられた。

「おい、名寄なよいる。」

誰だろうか。その問いに答えようとしていると、

「青木あおきさん。青木あおきさん僕の独断でこっちだから入ってください。」

「マジかよ。そんでもって、これはどうにかならないのか。」

走っている「しなの」を指差した。

「素人には分からないから大丈夫です。」

「分かる人来たらどうするんだよ。」

「来ないことを信じましょう。」

「あのなあ。」

どうやら今来た人は青木あおきというらしい。左側に展開しているプラレールの持ち主なのだ。よくあんなに集めたものだと感心する。その人は机の下をくぐって僕達の周回に入ってくる。

「とりあえず紹介しとく。OBの青木洋輔あおきようすけさん。」

「それだけかよ。・・・まあよろしく。時折こっやってくるかもしれないから。」

「あつ、よろしくお願ひします。」

「で、名寄なよ。俺の「きたぐに」が入れる隙間はあるのか。」

「あつ、それ考えてなかった。」

「おい、考えとけよ。しょうがねえ。サヤのほうで走らせてくるか。」

「それやったら「きたぐに」が死ぬと思います。」

「そうだな。じゃあ、次こいつを行つちやえつて。走らせてちよ。」

「へいへい。永島ながしま。外回り「雷鳥らいちょう」出して。」

「あつ。はい。」

トミックス
TOMIXの「雷鳥らいちょう」の箱を開けて作業を開始したが、ナヨロン先輩が言ったあのことが少々気になった。

「ナヨロン先輩。これ持つてくるって聞いたときパノラマグリーンがパノラマグリーンじゃないかどっちかって聞きましたよねえ。なんでですか。」

「パノラマグリーンだと支持率がいいっていうかなあ。結構違うかな。」

「へえ。そうなんですか。」

「ああ、それもあるけど。パノラマグリーンとそうじゃないやつの違いも見ておきたかったっていうのもあるかなあ。まあ、それはさつき見て分かったけど。」

「どこがどう違うんですか。僕にはどうしても国鉄車は同じように見えるんですけど。」

「同じように見えるかあ。まあしょうがないよなあ。大体そういうものしか作ってなかったっていうのがあるからなあ。」

外側に「きたぐに」を並べながら続ける。

「パノラマグリーンってふつ々のやつに比べると窓が小さい。後、トイレのところにある行先表示がふつ々のほうはドア側の客室窓上にある。だから簡単に見分けがつくよ。でも、中には変り種があるからなあ。パノラマグリーンの最終編成あたりだと思っけど、あいつはほかのパノラマグリーンに比べて窓周りが広い。だからちよつと見分けづらい。」

「へえ。そんなに違うんですね。同じように見えるやつも似て非な

るものってわけですか。」

「まあ。そういうところだな。」

「雷鳥らいこうを出している間青木あおきさんは今走っている「しなの」に目をやっていた。」

「名寄なよろ。これ持つてるの誰だ。」

声をひそめて聞いた。

「永島ながしま。あいつだけど。」

「俺思っただけどさあ。これ明らかに南みなみさんのやつだよなあ。」

「永島遠江ながしま とうけい急行の社長の孫みなみだし、南みなみさんがその親戚みせってことじゃないのか。」

「……そういうことだよな。ものすごい大物が入ってきたじゃないか。それであの性格だから誰もそう思えない。そこがすごい。」
「ハハハ。」

その頃僕はというと、文化祭を見に来た鉄道マニアらしき人と話していた。

「この「しなの」は10両だから大阪から来るやつですよな。」

「ああ、はい。」

「私も高校生の時にねえ、この「しなの」で名古屋なごやから長野ながのまで行ったことがあってね。」

「へえ、そうなんですか。」

「私が乗ったときはまだ383系じゃなくて……。」

「381系の時ですか。」

「いやいや。もっと前。確かディーゼルカーだったかなあ。もう40年位前の話かなあ。」

そういうとその人は持っているカバンの中から携帯できるサイズのアルバムを取り出し、その車両を探していった。

「あつ、あつた。これだよ。」

指差した車両の真ん中には「しなの」、その下にローマ字で「SH INANO」と書かれている。今僕が親しんでいるヘッドマークとは全く縁のないものである。そして車両はどこかで見ることがある

ような顔をしている。車両は確かキハ181系。大阪〜鳥取間を結
んでいる「特急はまかぜ」と同じ車両のはずである。

「今じゃこれもねえ、はまかぜ」だけになっちゃったからねえ。
本当はこれにはもつと走ってほしいんだけどねえ。」

名残惜しそうに語っている。この人はキハ181系のことが好きなの
だろう。昔から親しんできた車両であることには間違いはないの
だ。

「そうですね。」

なんか暗い話になっていたので話を変えよう。

9時25分。583系「急行きたぐに」、485系「特急雷鳥」
に交代。

「ナガシイ。」

誰かに呼ばれる。今度は誰だかしつかりと分かる。萌だ。だが、そ
れを聞いて啞然とする人もいる。それは3年生と2年生。あとは木
ノ本である。

（今、ナガシイって呼んだよねえ。この人。）

（まさか。ナガシイって他の人から呼ばれてたあだ名。気に入って
んだな。）

（彼女か。）

「よーす。「雷鳥」走ってるじゃん。それも「きたぐに」と一緒か
あ。」

（この人分かってる。まさかとは思っけど編成違つとか言わないよ
なあ。）

「それで次はなに走らせるの。「カシオペア」。」

ちよつとナヨロン先輩に視線を向けた。ナヨロン先輩は首を横に振
って、持っている箱を掲示した。「ワム38000形」の貨物列車
と今自分が手に持っている281系「関空特急はるか」が次に走る
列車だ。

「まだ「カシオペア」は出さないよ。」

「最後まで出さないつもり。」

再びナヨロン先輩に視線を向ける。何もなかったけどいつか出すと
いうことだろう。

「この間には出るよ。」

「ふうん。」

背をかがめてホームの中をのぞきこむ。

「ホームに停まってるのは「ワム」と「はるか」かあ。」

（「はるか」はまだしも、「ワム」まで分かるなんて……。ふつ
うの人だったら「あつ、貨物列車だ。」で終わるリアクションなの
に。）

「あの「ワム」って駿兄ちゃんの。」

「ううん。部活にも持ってる人がいてね。これその人の私物なんだ。」

（今この人駿兄ちゃんって言った。間違いない。南さんのことこの
2人は知ってる。）

「んじゃあ、他のところもさらっと見てくるから。また来たらよろし
くね。その間に「カシオペア」走らせたりとかしないですよ。」

「しねえよ。俺の独断でやってるんじゃないから。」

萌は模型を見ながら、隣の周回のほうへ歩いて行った。

（あの人って永島のなんなんだろう……。）

今度は木ノ本のいる周回に来て同じように視線をおとした。する
と向こう側から緑色の先頭の車両がこちらに向かってくる。

「ねえ、これって「スーパー白鳥」。」

おそらくこれは私に聞いたのだろう。

「ああ、ちよつと……。ハクタカ先輩。これって「スーパー白鳥」
ですよね。」

「うん。そうだよ。」

「だって……。でもよく解るね。」

「昔からナガシイと電車のこと話してたから。特急だったら名前と
使われてる車両。あとはナガシイが好きな車両くらいだけだけ分
かるよ。」

(永島の彼女なのか。)

「それで、ナガシイの言ってた、隠してなければ私と同じっていうのは君かなあ。」

(あいつそんなこと言ってたのか。)

「まあ違うつてことはないよね。ナガシイと同じ上履きはいてるの。こん中に何人もいたけど、女子っていうのは君だけだったからね。」

「.....」

「あっ、名前言ってなかったね。坂口萌。また展示とかで会うと思っからとりあえず覚えといて。」

「永島から聞いてるんじゃないか.....。木ノ本様名よ。」

同じ鉄としてよろしく。」

「木ノ本さんね。よろしく。」

ふと永島を見て、

「やっぱり彼女創るなっていう方が無理だよなあ。」

「いや、別にあいつのこと彼氏とか思ってないから。」

「ふうん。木ノ本さんがどう思ってるか知らないけど、ナガシイは私以外に彼女を創らない。これは断言できるんだけどねえ。でも言っついてよかったかも。」

「.....」

「ただ、一つだけ問題があるんだよねえ。まだ本当のこと言ってないし.....。」

「おい、言ってないなら言えよ。」

「私が今言っただのはそういう意味もあるけど、違っ意味もある。あいつには秘密にしといてほしいんだけど。」

その内容を聞くと、

「秘密にしとく必要があるのかよ。それ。正直に話した方がいいだろ。」

「そうは思ってるんだけどね.....。ごめん木ノ本さん。この話はまたどこかで会った時にお願ひ。今はいろいろとまっずいから。」

(今のことは全部本当.....。)

ながしま
永島のいる周回のほうに歩いて行く後姿を見ながら心の中でつぶや
いた。

今回からの登場人物

おおき
青木洋輔

誕生日

11月1日

血液型

A型

身長

159

cm

22列車 当日（後書き）

話がブレていてすみません・・・。

展開は考えたところで成り行きといふことが多いので、これからも
そういうしが出てくるかもしれませぬ。

そんなのでも読んでくれる人には感謝。

根性でまずは高校1年生の最後まで持っていきたいと思えます。

23列車 話し合って・・・

一方僕達はというと展示に追われて、次に何を出そうか話し合っている。

「今はまだ11時。「カシオペア」とか行くには絶好の時間なんだろうけどな。」

「見に来てる人も多いし、今出しちゃえばいいじゃないんですか。12時になったら食料調達しにどこか行っちゃいますよ。」

「おい、名寄なよろ。ネタに困ったらこれ走らせればいいじゃん。」

「青木さんあおき。「ライトレール」はまだ。文化祭の最後の最後で暴走させるんだから。」

「「ライトレール」暴走させるって。それはどうだろうか。」

「でも、「ライトレール」はそういうところ走ってるんだよ。風景以外は問題ない。」

「いや、別な意味で問題があります。40km/hキロしか出ない車両がなんで400km/hキロ出すんですか。」

「そこは御愛嬌。」

「そんなことよりもまだ走らせてないやつだっていっぱいあるじゃないですか。223系とか、223系とか、223系とか。」

「お前、223系好きだな。」

「100系がいなければ1位ですから。」

「じゃあ100系暴走させようぜ。在来線だけど、ミニ新幹線がありならありだろ。」

「その片割れ何にするんですか。0系レイチャンですか。0系レイチャンはちょっと。」

「何0系嫌なのか。」

「そんなことはないです。でも、両方ともここに持ってきてません。」

「なんでそんな話になったんですか。もう「カシオペア」と「北斗星ほくとせい」出しますよ。」

「いや、待て。「北斗星」は「北斗星」でもバリエーションを持たせた方がいい。例えば「夢空間」とか「夢空間」とか「ゆうトピア」とか。」

「最後関係ないぞ。なんで「夢空間」って言ってる。「和倉」になるんだよ。おかしいだろ。」

「青木さんもナヨロン先輩もやめてください。オヤジギャグにもなりません。」

「よし。永島。何に牽かせる気。EF81（カシカマ）。それともEF510（アオカマ）。はたまたEF81（ホシカマ）か。」

「「カシオペア」はEF510（の）502号機で「北斗星」はEF81（の）133号機です。」

「分かった。並べろ。」

「ナヨロン先輩の承諾を受けて内回りに「カシオペア」を外回りに「北斗星」を並べ始める。すると、

「ナヨロン。次に行くつもり。」

「サヤ先輩がモジュール越しに話しかけてきた。」

「内回りが「カシオペア」で外回りが「北斗星」の1号だな。いや

編成の向き……。」

「なあ、「カシオペア」こっちに貸してくんない。こっちからは「北斗星」貸すから。」

「んなカオスにしたいなら「トワイライト」でやればいいじゃないか。」

「「トワイライト」だったら珍しさがないだろ。」

「その前に「カシオペア」貸してほしいかは永島に聞け。こいつのだから。」

「ごめん。「カシオペア」貸してくんない。」

「それだったら毎回家でやってますから。それに撤去すんの面倒だから嫌です。」

「1年生に拒否権は……。」

「ある。」

すると、潔くあきらめていった。サヤ先輩のおかげで作業が停滞していたが、作業を再開。すぐに2・1号車（スロネE27-200形・カハFE26形）と牽引機（EF510-502）をレールにのせた。ナヨロン先輩の腕時計で11時01分「カシオペア」が発。11時04分に「北斗星」が出発した。

「永島か。箕島。どっちか昼食べてこい。」

「えっ、でも。」

「大丈夫。こっちが編成順に片しとくから。」

「。。。。」

「じゃあ。僕が行きます。永島。運転変わって。」

と言うわけで、まず箕島が昼を食べに行くことになった。僕は箕島から運転を変わり、運転席についた。青木さんとナヨロン先輩は次の車両について何にするか話し合っている。

「ナガシイ。次はなに走らせるわけ。」

「永島。お前の「出雲」DD51（デデゴイチ）の重連で召喚して。」

「分かりましたけど。外回り何にするんですか。」

「外回りは泣く子も黙る「急行だいません」だぜ。」

泣く子も黙るのか。。。。

「だって。」

「「出雲」は聞いたことあるけど、「だいせん」って何。キハ58とか使ったやつ。それとも「きたぐに」みたいに583系使ったやつ。」

「おいおい。山陰本線は電化されていないんだぜ。583系走れるわけないじゃん。」

「あっ、そうか。。。ああ、ちょっと私バカになったかも。。。。」

「それ分からなかっただけでバカになっただけって言うなよな。また1から覚えようっていう人もいるんだから。」

（木ノ本さんのことだな。）

「へえ。1からね。」

「坂口じゃん。」

その声とともに来たのは宿毛だった。

「宿毛久しぶり。」

「宿毛。クラス展のほうどうなってる。」

「クラス展のほうはまあふつうくらいだよ。やってる位置が悪いっていうことはないけど、なかなか客の量が上がらないっていうかなあ。多分ほかのところと割れてるんだと思う。」

「クラス展何やってるの。」

「お菓子とかの販売。」

「楽しそうだね。」

「楽しそうだねって言っても坂口も来る気はないんだろ。ここにいるほうが断然楽しいから。」

「まあね。」

永島は「出雲」を線路上に出すために今は運転台にはいない。そのコントローラーを見つめていると、

「ねえ、宿毛。これいじっていいと思う。」

「ダメだろ。いくら模型いじれるからってそれはダメでしょ。」

「いいじゃん。少しくらいマックスにしたって。」

その会話は十分聞こえた。

「おい。そのコントローラーマックスにするなよ。家じゃないんだから。」

と注意されてしまった。

「はいはい。ただの冗談だから安心して。」

「お前の場合どこからが冗談でどこからが本気なのかわかんねえよ。」

「ほとんどは冗談のはずだから。」

「はずってなんだよ。」

「ハハハ。」

（永島のやつ。やっぱり坂口と話してたほうが生き生きしてるじゃ

ねえか……。そうか。鉄研だからこういう機会があるのか。だったら俺が心配するまでもなかったかもな。」

一方、他の区画では。

「ねえ。あの人ってさつきからナガシイと話してるけど、ナガシイの彼女かな。」

「善知鳥先輩には何でも彼女に見えるんですね。」

「永島のやつ。うらやましいなあ。」

「何。サメちゃんもナヨロンと同じで彼女募集中か。」

「えっ。まだ一度も縁がないですから。て言うか名寄先輩も募集中つて。彼女いないんですか。」

「頭いいけど、半分電車が恋人状態だからな。それで縁がない。ところで、佐久間はどこに行ったか聞いてないか。」

「多分他のクラス展とかに行っただんじやないんですか。」

「あのバカ。アヤノンだけに任せるんじゃない。アヤノンをいじれないじゃないか。」

(そのためだけに。)
また……、

「おい、アヤケン。貨物ぶつ倒れた拾って。」

「なあサヤ。これどこで落ちた。」

「ここの小楠貨物で倒れた。」

「小楠貨物かあ。よく俺こんなゴミ作ったな。」

「ゴミかよ。」

「あいよ。落ちてたコキはこれで全部。」

「バカ野郎。コンテナも落ちてどっかに吹っ飛んでる。探せ。」

「えっ。その状態じゃ何かダメなのか。」

どつという状態か説明しよう。左側からコンテナがあり、あり、なし、なし、なしの順になっている。

「この状態じゃ

になるだろが。」

解説不能のところだけ裏声でした。

「せめて、日本語しゃべれ。」

「日本語ですか何か。」

「ウソつけ。」

「ナヨロン先輩。また「雷鳥」^{ライチウ}行くんですか。」

「バーカ。またって言う言い方は何だよ。国鉄って言うのはようは頭だ。どんな編成考えるかで走らせるパターンって言うのは何百にもなる。「雷鳥」^{ライチウ}には「だんらん」をいれて、一番後ろに「ゆうトピア和倉」^{ピア和倉}をくつつけて、「雷鳥」^{ライチウ}に引っ張らせる。」

「そんな編成あるんですか。」

「あつただ。国鉄に正統性を求めるところでどうかしてるぜ。それがあからさまに出るのは客レとかディーゼルだな。キハ58にキハ10とかそういう方面を連結したとかっていう実績だつてあるんだ。・・・いや、くつつけたのはキハ40だったかな。」

「分かりました。ていうかそんなことどうでもいいです。」

12時42分。僕は持つてきた弁当を食べに一度管轄を離れた。

弁当を食べ終わって戻ってきたのは13時03分ごろだった。

「昼食食べてきました。」

「へーい。・・・永島」^{ながしま}223系の2000番台8両。内回りに出

して・・・。つていつても、外回りどうするかなあ・・・。」

「永島さん。次外回りなんか走りますか。」

諫早がクラス展をきり上げてやってきた。

「ああ、まだそれ決まってないんだけど・・・。内回りは223系の新快速^{しんかいそく}が行くみたいだけど。」

「じゃあ、ちようどいいですね。僕のこれお願いします。」

そう言ってKATO^{カトー}の箱を差し出した。箱の背には「223系2000番台 1次車 4両セット」と書いてあるが、表には「223系6000番台4両セット(宮原)」^{みやはら}とシールで直してあった。

「ナヨロン先輩。諫早^{いさはら}がこれ行ってほしいって。」

今の箱をナヨロン先輩にも差し出す。ナヨロン先輩も箱の背と表で表示が違うことを不思議に思ったかもしれない。だが、中身を見ると納得したようだ。

「諫早。これよくやったな。ダブルパンつてことは宮原にいる6000番（223系）だよな。」

「はい。」

「これだったら、もうワンセット繋げて、「丹波路快速」とか「直通快速」とかやった方が面白い。ここまでできてるんだし、これで終わらせるのはもったいないぜ。」

「名寄さんならそう言うと思って、もうワンセット持ってきてます。」

「えらい。なんか他に持つてる車両と違ってある。」

「今はないですけど、家に223系のパンタを全部シングルにしたやつと同じ6000番台の網干みほしにいるやつと211系の3000番台を無理やり5000番台化したやつならあります。」

「うーん。なるほど。でもそいつらは次だな。」

「ああ、あと名寄さん。もしカーブとかでこけたら「こけんじゃねえよ。ボケ。」とか言って言っといてください。僕が許します。」

「はいはい。でもこれこけないようになってるだろ。明らかに重量感違うし。」

「ああ、はい。くつつける方はモーターぶち抜きましたから。」

その時にはもう編成を理解していたらしい。

「永島ながしま。新快速を1号車（クハ222形）からこつちの方向で入れてくから6000番は8号車（クモハ223形）むこうで入れてつて。」

ナヨロン先輩から箱を受け取って言われたとおりに並べていく。レールに置いて行く順番は8号車からではなく1号車から。こうしないといれずらい。なぜかというところを並べる線路の隣に建物が隣接しているからだ。

「ナガシイ。手伝おつか。」

「いや、大丈夫。それに、これ人のだし。」

「223系の・・・2000番台。なんか顔似てるよねえ。」

「いや、こいつは2000番台じゃなくて6000番台。モーター

車のパンタ2つだし、ちょっと分かりづらいけど乗務員室扉のこのラインの下にオレンジのラインが入ってる。」

「ホントだ。223系も大家族だからなあ。分かりづらいね。」

「でも、先輩の話聞いていると223系もそんなに親戚たくさんじゃないみたい。313系のほうがもつと親戚たくさんなんだって。」

「ふうん。」

「ねえ、ナガシイ。」

善知鳥先輩に呼ばれる。

「何。ナガシイ、鉄研でもナガシイって呼ばれてるの。よっぽど気に入ってんだね。このあだ名。」

「・・・なんですか。」

「そつちにさあ138系か981系の「あずにゃん」ない。E253の「あずにゃん」走らないんだけど。」

(言ってることメチャクチャだし・・・)

「E253系なんていうやつありませんけど、それに138系とか981系ってどこどう間違えたらそうなるんですか。」

ここで正しい答えを皆さんには知らせておこう。もちろん、そんなこと知ってるよという人もいるだろう。まずE253系と間違えられたのはE257系。138系と間違えられたのは183系。981系と間違えられたのは189系である。

「永島。探してるのはこいつらだ。渡してやれ。」

さすがナヨロン先輩。善知鳥先輩の言いたいことはこの人にはしっかりと伝わっているようだ。

「ナガシイ。パス。」

善知鳥先輩が手を差し出す。僕も手を伸ばしたが、あと少しで届かない。

「ナガシイ、手伸ばせ。ゴムゴムのー、ピストル。」

「無茶言わないでください。ゴムゴムの実食べてるわけじゃないんだから。」

すると外回りをしていた楠先輩がリレーしてくれた。

「アヤノン。邪魔すんなよ。」

「善知鳥先輩。今自分何歳ですか。」

「善知鳥茉衣19歳。永遠の少年・・・ああ、いやいや。永遠の少女です。」

「・・・。」

「アーツ。EH200（ブルサン）の隣が困るー。」

何となくバルサンと同じ様な響きがする。

「・・・名寄先輩。内回りさつきからどこにいるか分かんないんですけど。」

運転業務についている箕島が疑問をぶつけてきた。

「えっ。新快速どっか行った。」

「ねえ、ナガシイ。223系あすこで横倒しになってるけど。」

萌がそう教えてくれた。指差している場所は運転台から死角になるところ。行ってみると、223系は全車両が脱線していた。1号車（クハ222形）、2号車（モハ223形）、3号車（サハ223形）と6号車（サハ223形）、7号車（サハ223形）、8号車（クモハ223形）は完全に、4号車（サハ223形）、5号車（モハ223形）はライダーのふちに受け止められる状態で横倒しになっていた。

「手伝おっか。」

「手伝つてくれるのは家だけで十分。ここはいいよ。」

脱線の復旧作業として、まずは3号車と4号車、5号車と6号車の連結を解除。そのあと1号車から3号車と6号車から8号車はすぐに線路上に仮置きする。そして4号車と5号車も線路上に仮置き。車両を仮置きし終わったら随時車輪をレールに乗せる。

「あつ、223系だ。」

ふと顔を上げると自分の前にいるのは萌ではなく小学生だった。その小学生は今ここから見える範囲をざっと見渡して僕にこう聞いた。「こっつてこっついう部活もあるんですね。中学からでも入れるんですか。」

「ああ、今年は中学から3人入ったからな。」

「へえ。ここつて頭いいほうがいいですか。」

「頭よくなかったっていいよ。僕みたいなバカでも入れたんだから。」

（んじゃあ。僕みたいなバカでも大丈夫なんだよなあ。よし。．．．）

「おいおい。僕みたいなバカっていうのはウソだろ。．．．それとも、鉄道バカとしてのバカか。それだったら裏付けるね。」

「アハハハ。」

5号車のモーターを線路上に置くと引つ張られる感覚を覚えた。車輪が明らかに動いている。

「箕島。コントローラー完全に止めてる。」

どうやらその声は箕島にはとどかなかつたらしい。まだ車輪が動いている。

「箕島つ。止めてつ。コントローラーの電源切つて。」

ちよつと声を張り上げていうと、青木さんがそれに反応してくれた。

「箕島。コントローラーのノッチオフにして。」

その声を聞くと箕島はつかんでいる新幹線のようなコントローラーのアクセルをもとの位置に戻す。するとこれまで電気をとっていた223系の車輪も止まった。止まったことを確認して、改めて5号車を線路上に乗っける。左側の台車、右側の台車の順に線路に乗っけて、

「223系、行っていいよ。」

そう指示を出すと、またも青木さんが反応して223系を走らせてくれた。

「こういう意味では家でやってるのより疲れるな。」

「いや、家でやってる時のほうがもっと疲れる。あれやるって言っても駿兄ちゃんと俺と萌ぐらいしかいないじゃん。3人しかいないから脱線しても気づきづらいつていうかな。逆にこの人数でやってるから運転班としては大助かりつてことじゃないかな。」

「ふうん。」

「呼吸間を置いて、さらに話が続く。」

「今走ってる223系ってちょっと短くない。家で走らせてるのが常時12両編成でしょ。あれ8両編成だよねえ。」

「常時12両なのはうちのレイアウトが全線複々線だから。新快速ってほとんどが12両編成で走ってるっぽいから。」

「いや、それは分かる。でも8両っていうこともあるのか。」

「あるんじゃないの。電車でGO!に収録されてる新快速全部8両編成だし。」

「2002年のデータだもんね。・・・外回り走ってる6000番台だっけ。あれは何。」

「あれって多分おおさか東線の「直通快速」か福知山線の「丹波路快速」だろ。どっちだか知らないけど。」

「「丹波路快速」は名前聞くだけでどこに行ってるのかなあってことは大体見当がつくけど、「直通快速」ってどこどこ結んでるわけ。」

「奈良と尼崎の間らしいけど。」

「奈良から尼崎までの直通ね・・・。なんかわざとらしい名前の付け方ね。」

「わざとらしいってなんだよ。」

次の車両選定に戻った。しかし、その頃にはもう決まっていたように、内回りにEF510牽引の貨物列車。外回りに「寝台特急トワイライトエクスプレス」がスタンバイしていた。

23列車 話し合つて・・・（後書き）

223系のことが多く出てきますが、自分自身223系のことばかりだからです。

個人的には223系1000番台がお気に入りですが・・・。

こんな話どうでもいいですね。

なお、これからも223系は大量に出てきます。

やっぱり好きなもの書いてる時が一番ノリノリですね。（笑）

24列車 暴走 富山ライトレール

EF510と「トワイライトエクスプレス」が走りだしてからは、次に何を走らせるかの議論。

「在来線にE3（イースリー）系の「つばさ」と「こまち」を走らせて何とか時間稼ぎにして、次に旧国鉄いけばいいだろ。「ぎんりん」とか「ぎんりん」とか「ぎんりん」とか。」

「お前さつきから」とびうお。「ぎんりん」にこだわり過ぎ。少しはもつとほかのやつにしろよ。あのキハ58使って、多層建てでもやればいいじゃないか。」

「多層建てすか。やるのはいいですけど、相方が困り・・・。」

「そんなのいくらでもあるだろ。485系使って「つばさ」でいいじゃないか。」

「いくらなんでも、それはないでしょ。」

「あのう。内回りに「スーパーはくと」で外回りに「スーパーおき」か「はまかぜ」出せばいいじゃないですか。」

「ちよつと待て。今外回りに貨物列車出したんだからさあ、あれを徹底的にいじればいいじゃないか。」

青木^{あおき}さんが口をはさむ。

「えっ、EF510（レトサン）の後にEF210（モモカマ）出して、EF81（コチカマ）の重連でED76（ナロカマ）の単機みたいなことするんですか。別に嫌とは言いませんけど、ずっとあれをまわしているっていうのはちよつと。」

「えっ、いいじゃないですか。面白いですし。」

「でもEF510（レトサン）から始まるっていうのはちよつとっと思っんですよ。そういうことするならなおさら「3099レ」か「3098レ」みたいなことするべきだと思います。」

「また面倒くさいこと思い付くなあ。」

この後ナヨロン先輩から教わったことだが、「3098レ」と「3

099レ」は日本一長い距離を走る貨物列車らしい。走行区間は福岡おが札幌さっぽろまで。途中日本海縦貫線にほんかいしゅうかんせんという短絡路線を通ってもその走行距離は2000km以上になるといふ。

「ていうか、貨物だったら他にもいじりようありますよねえ。機関車変えるだけじゃなくて貨車変えてどうにかするっていうのも。」

「確かに一つの手だけど、変えるの面倒くせえじゃん。」

「おいこら。鉄道マニアがそんなこと言っているのかよ。」

「じゃあ、僕が変えるでやっていいですか。」

「ああ、それだったらやってもいいけど、何にする気だ。タキ。ワム。トラ。」

「タキ。」

「了解。並べろ。つってもその隣に困るんだよなあ。そうなるにあの「トワイライト」もいじらないと。」

「EF210（桃太郎）に牽引させて、東海道線っていうことにしちゃえばいいじゃん。」

「それ言ったらほとんどの列車そうなるじゃないですか。209系ケイレクの隣にEH200（ブルサン）のタキ走らせて根岸線ねぎしせんとか。その隣にE231系エイニサチ走らせて湘南新宿ラインしやうなんしんじゆラインとか。」

「んなこと言ったらはじまんねえだろが。」

「あのう。外に113系とか行けばいいんじゃないでしょうか。しばらく黙っていたが、ポンと手を叩いて、

「その手があったか。」

「そこ感心されても……。」

その後もこんなギャグみたいな決め方をしながら、走らせる車両を決めてホームに並べる作業。こんなことをしている間にも時間はどんどん過ぎて14時30分になった。

「さて、そろそろやるかなあ。」

「えっ、ナヨロン先輩あれ冗談じゃないんですか。」

「冗談なわけないだろ。やると言ったらやる。次の周回で、内回りキハ56（キハゴロ）と外回りキハ22（キハニニ）を停車させる。

やるぜ。」

そういつて車両の入った箱を詮索。箱を三つ取りだして箱を開けた。中には小ぢんまりとした白い車両が入っている。色はそれぞれ違って一つは赤、二つ目は緑、三つ目は紫だった。そのうち二つ。赤と緑をいつもの手つきで線路の上に置いて気動車の到着を待つ。気動車が到着するとポイントを直線に変更。

「箕島^{みしま}。運転変わって。」

珍しくナヨロン先輩がコントローラーのつまみを握る。すると、一気につまみをまわした。停車していた車両は勢いよくホームを飛び出していった。

「あつ。ナヨロンのやつ「ライトレール」走らせてやがる。」

モジュールに比べてとてもちっちゃい車両を善知鳥^{ぜんちどり}先輩が発見する。

「ナヨロン。それはあたしの専売特許よ。勝手に使うな。」

「うるさい。ときにはいいだろ。」

「おい、名寄^{なよろ}。新しい仲間。」

「おお。万葉線^{まんようせん}。」

内回りを止めて同じ線路上に青木^{あおき}さんから貰った車両を置く。この車両は「ライトレール」とよく似ているが、少し違う。置き終わると再びつまみをマックスにした。すると、今度は外回りと駅の反対側に止めて紫の「ライトレール」を置いた。当然、こちらも置き終わると暴走させた。

なぜか走らないけど、この「ライトレール」の暴走は子供たちには好評のようだが、部員には好評ではない。むこうの管轄の人が出てきて、レールの上に手でトンネルを作った。

「あつ、バカ。取るな。」

「ハクタカ。そっちの「ライトレール」取って。」

「永島^{ながしま}。「ライトレール」死んでも守れ。」

なんなんだろうか。この状況。

「ハクタカ取るな。」

「ヤダよ。人には散々編成違うとか言っというて自分はこんなことし

てるんだから。」

「いいだろ。間違つてないし。」

「そこ違うだろ。根本が間違つてますよ。」

ハクタカ先輩は走ってきた内回りの赤い「ライトレール」の速度に合わせて、トンネルを作った右手を滑らせる。滑らせるのと同時に「ライトレール」を掴んで、レールの上から外し、自分達の周回へ持つていった。

「ちくしょう。一つ持つてかれた。楠くすのき そっちに取られたの取り返して来い。」

「絢乃あやの。取つたらお前の恥ずかしい話クラスにはらすぞ。」

「この。バカタカ。」

「ちよつとアヤノン邪魔。取れないじゃん。」

「ちよつ、どこ触つてるんですか。」

「永島ながしま。箕島みしま。死んでも守れ。」

と言つた時にはもう遅い。紫色の「ライトレール」は善知鳥うつくし先輩に取られてしまった。

「サヤ、「ライトレール」取つたぞー。」

「オツシヤー。」

「よーし。こつちもやるぞ。」

「家でやるときにはないすさまじさだね。」

萌もえが話しかけてきた。確かに。家でやっている時はこんなことはない。ただ普通に車両がゆつくりと走っているだけである。もちろん、新幹線はゆつくり走つてないが。

「確かに。でも、楽しくていいよ。こういうこともあつて。」

「ハハ。・・・ナガシイが持つてきたやつ大活躍だったね。」

「ああ、ちよつと持つてきすぎたかなあつて思つてたけど、そうでも無かつたよ。先輩なんかもつと持つてきてもらった方が良かったかもなあつて言つてたくらいだし。」

「駿兄しゅんせいちゃんの223系も持つてきてたけど、あれどうするの。横倒しになつちやつたし。」

「あれも部活のやつ。顧問のなんだって。」

「へえ。顧問のやつねえ。って顧問の先生持ちすぎじゃない。どのくらい持つてるのよ。」

「数えてなかったから分かんないけど、うちの父ちゃんくらい持つてるよ。」

「あつ、じゃあ結構持つてるんだね。」

「……。」

「今日部活の先輩といろいろ話してたけど何話してたの。」

「次にどれ出すか話し合ってた。」

「へえ。」

「まあ、それも話してたけど、電車の雑学とかもいろいろ話してた。」

「

「へえ。例えば。」

「「雷鳥」のパノラマグリーンとパノラマグリーンじゃないやつの見分け方とか。SLのこととか。話してた先輩俺の知らないことも知ってたもん。ついてくのが精いっぱいだった。」

「ナガシイ、でもついていけなくなることもあるんだ。それなら私があの人と話したら全然じゃん。」

すると、後ろから声をかけられた。

「トモ。よーす。」

「駿兄ちゃん。来たんだ。」

「あつ、南さんお久しぶりです。」

善知鳥先輩がいつものテンションより冷えた口調で話しかけてくる。

「えっ、知り合いですか。」

「知り合いも何も、俺はこのOBなんだけど。」

「ウソ。」

「ウソって、ナガシイ気付いてなかったんだ。」

「ああ、今初めて知った。」

このころには全員気付いた模様で3年生と青木さんが寄って来て何かいろいろ話し始めた。

「ナガシイ。バカ。」

「ああ、そうだったのか。暁あかつきフェスタに行ったときとかどっからか現れてくるから、なんでかなあって思ってたんだけど……。」

「おいおい。いくらなんでも鈍すぎ。」

「ていうか。駿しゅん兄ちゃんくんの遅かったな。」

「なんかいろいろやってたんじゃないの。そうでなきゃおかしいって。ふつうならここに直行する人なんだから。」

「……。それもそうだな。」

「ナガシイ。いつになったら帰れるわけ。この後に片付けやるんでしょ。」

「ああ、18(6)時くらいだと思うよ。でも。この部活予定表通りにやらないからなあ。いつ終わるか分かんない。」

「それダメでしょ。」

「ハハ……。まあね。」

この時木きのノ本もとは二人の様子を見ていた。二人とも笑顔を交えて話しているのだが、なぜかその顔がいつもと違うように見える。ただ話しているだけなのに、ただ話しているように見えないのだ。

(永島ながしまには坂口さかぐちさんの存在が大きいんだ……。坂口さかぐちさんも言っていたこと。お互いを理解してるからあすこまでの自信になるんだ。でも、それを理解してるなら、なんであのことを永島ながしまに言えないの。)その思いだけがのつた。

15時。文化祭終了。そのあと部展、クラス展のグランプリ、優秀賞が発表される。クラス展の結果はグランプリ3年6組。優秀賞2年5組。部展のグランプリは吹奏楽部。優秀賞は生物部だった。「あー。去年は優秀賞だったけど今年は優秀賞すら取れないってホントゴミだな。吹奏楽部のばか野郎っ。」

「まったくだ。」

「サッカーボールが表抜いたんじゃないのか。」

「え。なんで。」

「チート使ってたのがばれたんじゃないのか。」

「あれのどこがチートよ。部員のやつと後輩のやつかき集めて一気にどっさつと投票しただけじゃん。」

「はたから見ればチートみたいに見えるってことか。」

「まあ、そういうこと。」

善知鳥先輩とサヤ先輩は息を大きく吸って口に手を当てて、

「クソサッカーボールのばか野郎ー。」

「バカ。職員室に聞こえるだろ。」

「なんで。聞こえるように言ったにきまつてるじゃんねえ。」

「そうそう。このくらいしなないと意味がない。」

「意味がないの前に全員片付ける。」

青木さんが仕切って、片付けさせるように促す。

「ところで、この箱4箱誰のだ。」

「あつ、それ永島の。」

「あ。すぐ片付けます。」

(萌はもう帰ったんだな。)

心のどこかでそれを思った。17時片付け完了。この後はアド先生のおごりで一人一人にペットボトルが配られ、500ミリリットルのジュース、お茶を全員で飲み干す。それを飲み干し終わると、

「よし。野郎ども。次は臨地研修だー。」

サヤ先輩が気合い入れに叫んだ。

その声に続けて、先輩たちが。1年生の大半もそれにつられて返事をした。

その帰り、正門を出ると予想してなかった光景を見た。

「萌。まだいたの。」

「いいじゃん。一緒に帰っちゃダメ。」

「ダメじゃないけど……。まだいるとは思ってなかった。終わるの分かんない部活が終わるのってふつうまつてるかなあって。」

「まっっちゃダメとかっていうことはないんだし。ていうか、そんな話どうでもいいし、帰ろ。」

「おう。」

さつきから頭の中に響き続けているものがある。坂口さかくちから語られた道のり。あれは固い愛の証か、固い絆の証か。

今回みなみしゅんからの登場人物

南駿 誕生日 3月15日 血液型 O型 身長 176

cm

24列車 暴走 富山ライトレール（後書き）

こういうのってないことは承知です。

作者が狂っててすみません。

なお、今回で文化祭のエピソードは終了です。これから1回別なレをはさんで夏の大イベント臨地研修の話になっていきます。現実と大きく違っても読んでくれる人には感謝感激です。

まずは高1の終了まで根性で書き上げるといった以上自分の精神力をもって根性で完成させていきたいと思えます。

25列車 難読質問

6月14日。文化祭の片づけ。モジュールを随時量に運んで、車両のほうは図書館準備室に入れた。その片付けが終了すると、2階昇降口のちようど下にあるピロティに集合するよう言われた。

「よし、諸君。これからみんなを広報課と総務課と模型課に分けるからちよつと待っててね。」

前にナヨロン先輩が言っていた班決めである。だが、形式上その形をとるだけで、活動上関係ないらしい。

「えーと、まず醒ヶ井は総務課でいいだろ。後は、……。」

「少なくとも永島は模型課だな。」

「佐久間はなんかメカニック関係得意そうだし、広報課でいいだろ。」

「残りのミツシイとハルナンはどうするんだよ。」

「残りってそれだけじゃないだろ。中学生だってそうだ。ああ、あと諫早も模型課だったな。」

「なんか有能なやつが引き抜かれてるような気がするけど。」

「気のせいだつて。」

「じゃあ、箕島は総務課で、は広報課……。」

「木ノ本広報課っておかしいだろ。木ノ本もどっちかって言ったら模型課じゃないのか。」

「おう、ナヨロン。さっきから人引き抜きすぎ。」

「分かったよ。じゃあ、あとはそっちで決めて。もう引き抜く当てもないから。」

「じゃあ、模型課はもう人回さなくていいね。」

「ちよつと待て。せめて3人。3人は模型課来てほしいんだけど。」

「引き抜く当てあるじゃないか。」

「それじゃあ、ハルナンも模型課で、アサタンが総務課で、ソラタンが広報課でいいね。」

「ああ、それでいいよ。」

会議が終わったらしくサヤ先輩がこちらを向いた。するとそれぞれにどこどこに行けと指示を出し完成まで持つて行った。

「よし。そつちの一番左のやつが総務課。真ん中が模型課。そしていちばん右が広報課だ。とりあえず何班にいるっていうのは覚えといてちよ。」

そういうことだそうだな。

「で、これからの部活のために全員に書いてほしいものがあるんだけど……。」

サヤ先輩はさつきから持っていた紙を全員に配った。その紙にはこんなことが書いてあった。例えば「ロングシートとクロスシートどちらが好きか」、「このJRに一言」など。他にも「川内」の読み方、48という数字でピンと来るものなど50個の質問が書かれていた。

「この質問に回答してくれ。出来たら、俺に渡して。これを俺たちの部員紹介のページにアップするから。」

「はい。」

渡された問題に取り組む。内容は様々。最初は初歩的物から始まり、あとになればなるほど少しずつ内容が難しくなっている感じもする。

「なあ、永島。これなんて読むかわかるか。」

木ノ本が聞いてきた。シャープペンがさしている文字は「川内」。

「あつ、それ東北の都市と同じ読み方するよ。」

佐久間が口を挟んできた。

「確かにそうだな。」

「東北の都市。何、盛岡とか仙台とか。」

「今思いつきり答え言ったよ。」

「えっ、ウソ……。」

「答えは簡単なほうだな。」

「簡単なほうかぁ……。なるほど。そう読むのね。」

思いついたらしく、その答えを書いた。書き終わると、

「なんかこういうのって紛らわしいよね。こちら辺で言ったら新居町あらいちを「しんきよちょう」って読んじゃうってところかなあ。」

「あれ駅の読み方「あらいちよう」じゃなくて新居町あらいちだからな。さらに紛らわしいぞ。」

「あれなんてまだまだ優しいほうだろうな。難読駅なんて日本中探せばいくらでも出てくる。同じ九州新幹線きゅうしゅうしんかんせんの難読駅といえば「出るに水」って書いて出水いすみとかっていうのもあるね。他に僕が知ってるのは・・・これかなあ。」

紙の白紙を使って「長万部」と書いた。

「なにこれ。「ちようまんべ」とかって読むのか。」

(この読み方って絶対坂口さん知ってるよねえ。)

「いや。これふつうに読むってこと考えちゃいけない。難読だから。佐久間さくま分かる。」

「え。これの読み方なんてわかるわけねえよ。」

「醒ヶ井さめがい。箕島みしま。これの読み方わかる。」

「知るかつ。」

「えーと、これって何「まんべ」だったっけ……。ダメだ。「長」の読み方がわかんねえ。」

醒ヶ井さめがい、箕島みしまの順に回答を得た。

「何やってんだ。」

後ろから善知鳥先輩うしろが覗き込んでいた。

「これの読み方わかるかなあってやってたんです。」

善知鳥先輩うしろは「長万部」の文字を見るとすかさずナヨロン先輩を呼んだ。

「ナヨロン。これなんて読むかわかる。」

ナヨロン先輩にはすぐに分かってしまったみたいで鼻で笑っていた。

「簡単じゃん。「長万部おしやまんべ」だよ。「カシオペア」とかの停車駅だよ。」

「ナヨロンそういう方面からのこういうのは得意だからなあ。」

「よし、俺からも問題作ってやる。これなんて読むかわかるか。」
書いた漢字は2文字で「青木」。

「えっ、ナヨロン先輩。これバカにしてるんですか。」

「全然。これぞ簡単すぎて難しいっていう問題だぜ。阪神にはこう書いてすつごく意外な読み方させてる。まず、この答えは封じしておくか。全員これ「あおき」って読むって思ってるだろうが、これは「あおき」って読まない。」

「はっ。これ「あおき」意外に読み方あるのか。」

「バカ。善知鳥は黙ってる。」

読者の皆様にはこれの答えを教えておこう。もうすでに出ています。分かってる人はもう言うまでもないでしょう。

「さあ、どうだ。」

「ダメです。「あおき」意外思いつきません。」

箕島がギブアップするのを待っていたかのように全員ギブアップ。

「読み方は簡単なんだけどなあ。」

そういうとナヨロン先輩は青の上に大の字を書いた。

「こいつは「あおぎ」って読むんだぜ。他にもこういうのはどうだ。」

今度は「杉津」と書いた。

「これは「すぎづ」。」

「違うんですよねえ。これってもっと別な読み方でしょ。」

「ああ。」

「僕。これは分かります。「すいづ」ですよね。」

この問題には箕島が回答した。

「ああ、これ答えられちゃうと持ちネタがないなあ。俺が知ってる難読駅って言ったならこれくらいかなあ。」

「ナヨロン。それ嘘だよねえ。」

「箕島は歴史関連が得意そうだ。それだったら「水城」とか出して
もすぐ分かっちゃうだろう。」

「……。」

「いや。水城はふつつか。それだったら原田のほづがわかりづら
かなあ。」

「なことどっちでもいいわ。ていうより、みんな書けた。」

「あ、はい。お願いします。」

「みんな早っ。」

「どうやら終わってなかったのは醒ヶ井だけだったみたいである。」

「それが全員書き終わったところでアド先生からまた新たな発表が
あった。」

「えーと、今日から部長が北齋院君から鷹倉君に変わります。部長
としての仕事はまだ引き継がないようですけど、新しい部長ですの
で、みなさん歓迎しましょう。」

「みんなは拍手でそれに応対した。」

「よっ。ハクタカ。よいよでしゃばって教えられるとも思ってるの
か。」

「思ってますんよ。むしろでしゃばって教えたいのは善知鳥先輩じ
やないんですか。」

「って違うか。でしゃばって教えるのはアヤノンか。」

「えっ、何であたしになるんですか。」

「だってしそっじゃん。」

「絢乃は絶対にそういうことしません。」

「なんでハクタカがかばうんだよ。さすがにアヤノンす……。」

「それ以上何も言わないでください。」

「えっ、どうして。」

「いいから、何も言わないでください。」

数日後。岸川高校鉄道研究部のホームページを開いてみた。

(この「N・EX」。ナガシイだよなあ。これも本当に好きだよな
え。)

そのページには結構面白いことが書いてあった。

25列車 難読質問（後書き）

全体的に文章が説明文であることを謝罪します。
作品上そうなってしまうところがあるのでご了承ください。

関係のない話ですが、今自分が作っている原作は高1の11月頃の内容です。まだまだ原作も発表分も先が長いなあ……。
そんなのでも読んでくれる人には感謝。
読者のために根性で頑張ります。

……後書きがほとんど同じ内容ですみません。

26列車 まとまらない(前書き)

現実と大きく違う個所が多々あります。すみません。

26列車 まとまらない

正式な部員と認められた。そのような感覚に浸っているのもわずかの間。これから僕たちは本当にイベントに体を傾けていく時期になった。その鉄道研究部一大イベントというのは毎年恒例臨地研修である。

「サヤ、今年どこ行くこうか。」

善知鳥先輩がサヤ先輩にどこに行くこうかと聞いた。

「そうだなあ……。去年は東北だったし、おとしは四国だったしなあ。アヤケン、ナヨロンはどこがいい。」

「九州でよくない……。」

ナヨロン先輩が提案する。

「おっ、ナヨロンさえてる。」

「うっさい。」

「九州かあ……。うん、いいかも。」

「よし、みんなで九州に行こう。」

「じゃあ、僕からそうアド先に言っとくよ。」

「サヤお願いね。」

「で、どうする。九州って言うてもどこに行くんだよ。」

「行くなって……。博多か小倉あたりだよなあ。」

「エー。」

「エーって……。病むこと確定なんだから文句言わない。」

「だって精神的に病ませるのはどうなんだよ。ハクタ力達はともかく1年生は耐えられないだろ。まああたしも耐えられないけど……。」

「そんなこと言うてたらどこにも行けないだろ。それにその心配はないよ。」

「どうして。」

「木ノ本は撮り鉄だからそんなこと考えなくていいだろ。永島は電

車が好きだから入ったんだから問題ない。他は・・・、どうにでもなるからいいや。」

「ナヨロンってそういうことよく一発で見抜けるな。」

「見抜いてないよ。勘なんだから。」

「そんなことはどうでもいいよ。」

「じゃあ、博多行ってくつてアド先に言っつていいな。」

「まだ、言っつてなかったの。」

「善知鳥が嫌だつて言うからだろ。」

「はいはい、分かったから早く電話してよ。」

今日の定例会はこれで終わった。

(また遠いところまで行こうとするなあ。)

そう思っつているのはアド先生だ。この頃は遠いところに行っつていない。

「まあ、できるだけ抑えましよう。」

独り言を言っつた。抑えるというのは旅費。これができれば学校への申請は簡単である。

6月17日。今日は放課後に部活がある。今日からは夏の臨地研修にっつての話し合いだ。

「今年どこ行くんだらうな。」

僕から見える人全員にこの問いをしてみた。

「できれば東北がいいな。」

「四国かな。」

「やっつぱ北海道だろ。」

「どこでもいいよ。」

木ノ本、箕島、佐久間、醒ヶ井の順に回答があつた。言っつてはないが僕もできれば東北がいい。

「ああ、どこになるんだか気になるなあ。」

すると教室のドアが開いた。全員の顔がそつちを向く。

「先生じゃないんだから、みんなでこつち向くなよ。」

見ると楠先輩だつた。もちろん顔はあきれていた。

「絢乃先輩。去年は東北のどこに行つたんですか。」
荷物を置こうとしている楠先輩に木ノ本が聞いた。

「去年は確か……。」

「「ばんえつ物語号」に乗ってきたよ。」

今度は楠先輩の後ろで声がある。声の主はハクタカ先輩だった。

「ハクタカ先輩達つて結構いい所行つてますよね。」

「そうかもな。」

ハクタカ先輩はそう言つて去年の旅行の説明を始めた。

「去年は東京まで各駅で出て、夜新宿から出る「ムーンライトえちご」に乗つて新潟まで行つて、その後「ばんえつ」に乗つて、戻つてきたんだよなあ。」

「それより「ばんえつ物語号」つてどんな感じでした。」

木ノ本が興味ありげに聞く。

「それは……。」

「ダメだよ、そんなこと聞いても。だつてハクタカ「ばんえつ物語号」の中で爆睡してたもん。」

「ええ、なんで爆睡してたんですか。」

「「ムーンライトえちご」の中で徹夜してたんだつてば……。」

（よくやるなあ。）

「それでも、最初くらいは覚えてますよねえ。」

「それも無いね。座つた瞬間に寝たから。」

（何やつてるんだか……。）

この話が終わるころには3年生も中学生も集合していた。全員が集合するとすぐに本題に入った。

「今年はみんな博多の病院に行くぞー。」

「オー。」

テンションの上がる先輩達。なんで博多にまでいって病院に行かなければならないのか。

「あのなあ、普通に言えつて。」

「そうそう、いくら1年生が鉄研色に染まったからつて伝わらない

だろ。」

ナヨロン先輩とアヤケン先輩がツツコンでいたが、何か通じてきた。「それって、今年の臨地研修は博多はかたに行くってことですよねえ。」
思ったことお口にしてみた。

「おお、さすがナガシイ。」

何となく分かりたくなかった。でも、九州きゅうしゅうに行けるのはうれしい。

「よし。んじゃあ工程言うぞー。」

またサヤ先輩たち恒例のあれが後にはまっているのだろうか。

「まず八カグチに6時45分集合。7時06分に出るふつうで豊橋とよはしまで行って、豊橋とよはしから7時49分発の特快米原行きに乗って米原まいはらで乗り換え。米原まいはらから9時50分発の新快速で大阪おおさかまで行って、大阪おおさかで昼休憩。昼ご飯食べたくないやつは食べなくていいぞ。それで12時00分発の新快速播州赤穂行きに乗って途中の相生あいおいで降りる。相生あいおいからふつうに乗って途中の糸崎で乗り換え。いと先から「シテイラナ」とかっている……。」

「略すなよ。」

「いいじゃん「シテイラナ」で。そいつに乗って広島ひろしまで降りたら17時55分発の「レルスタ」で博多はかたに19時06分だ。」

「だから略すなつて。」

「もうどうでもいいわい。次行くぞ。2日目は自由研修で、全員で乗るやつはオリオンとかつていうバスの21時40分発のやつ。こいつに乗って大阪おおさかが多分7時30分。三日目は大阪おおさかに着いたら自由で全員で押しかけるのは15時30分発の新快速しんかいそく。これで米原まいはらに着いたら米原まいはらで乗り換え16時59分発の特快とっかいに乗って豊橋とよはしに18時59分。そのあとはふつうであーって浜松はままつに戻ってくるっていう工程こうりょうだぜ。」

「そんなんで通じだのかよ。」

「多分通じた。問題ない。」

「多分つて……。おい。」

今ここにその工程を聞かされた。

「それでもつて、2日目と3日目は自由行動があるから、その班を決めてくれ。」

何とも展開の早い部活である。

その後、善知鳥先輩の言っていた自由行動の班を決めた。班は北斎院、善知鳥班。名寄、箕島班。綾瀬、醒ヶ井班。鷹倉、楠班。佐久間、諫早班。そして、永島、木ノ本、空河、朝風班となった。この班で行動し、いろんなところに行ってくる。班が決まると次はその中身を立てる。

「どこ行くつうか。」

「そうだな。九州行けるんだし、いろんな所行きたいよな。」

「いろんなところつて言つたつて駄だろ。俺駅以外そんなに行きたいつて思わないし。」

「それは私も同じ。城廻とかは箕島が喜びそうだけど、私たちはそつういうがらじゃないしね。」

「向こう行くんだつたら九州特急とか見れるか。」

「納得だ。お前好きだもんな。ほれてるものが違つと思うけど。」

「それ言つたら空河だつて同じだろ。キ八にほれてるじゃん。」

「。。。。。」

「ほれてる、ほれてないつていう話じゃないだろ。今はどこに行くかだろ。全員どこに行きたいんだよ。」

「正直博多から離れたくないつていうのが本音ですな。」

「博多だとディーゼルが見れない。熊本とかそつちに言つて「ゆふいんの森」とか「くまがわ」とか見たいなあ。」

「私は「かもめ」と「つばめ」と「有明」と「ハウステンボス」と

「みどり」の写真が撮ればいいなあ。」

回答は朝風、空河、木ノ本の順。

「そんな都合のいいプランなんてあるかよ。」

「そうだけど。つうか、まだ永島がどうしたいかつて聞いてないよ。」

「俺……俺は鳥栖とかに行つて寝台特急とか向こうに行く特急撮つてたいなあ。」

「全員なんか写真撮りたいっていうのは変わらないんだな。」

「そうだな。」

「でも、具体的にどこに行きたいかっていうのは出てませんよねえ。」

「それはもう出てるも同然じゃないのか。朝風は本音を言うと博多から離れたくない。空河はディーゼルカーが撮ればどこに行こうが関係ない。木ノ本は特急。俺は寝台特急と特急。それで、朝風が博多から離れたくないっていう理由は寝台特急の「富士」と「彗星」と「あさかぜ」、「出雲」、「瀬戸」意外完全網羅できるからだろ。」

「永島さんよく分かってます。」

あたりを見回して時刻表を持っている人を探す。

「醒ヶ井。時刻表貸して。」

「前にあるだろ。それでいいじゃん。」

「お前のほうが近いんだからお前がそつち使えばいいじゃん。」

強引にも醒ヶ井が使っている時刻表をもらつて最初のほうにあるブルーのページをめくつた。これの前には新幹線。真ん中に新幹線と特急の接続。後ろのほうには特急のダイヤ。一番後ろには寝台特急の時刻が記載されている。僕が開いたのはブルーのページの一番後ろ。つまり、寝台特急の時刻表が記載されているページだ。

白の青の境目のページを開くと載っているのは「カシオペア」「北斗星」「はくつる」の時刻。次のページをめくると左のページから

「出雲」「瀬戸」「北陸」。右のページに「あけぼの」「ゆうづる」

「日本海」「トワイライトエクスプレス」の時刻が乗っている。さらにページをめくると見開きに大きな時刻表が現れる。左ページは

下り。右ページは上りの時刻。載っているのは「富士」「はやぶさ」

「さくら」「みずほ」「あさかぜ」「あかつき」「彗星」「なは」。

「これで分かるな。」

「今思ったけど、寝台特急フルトレって結構いっぱい走ってるんだな。」

「今でも定期列車が18往復36本。不定期が2往復4本設定されてますからね。」

「計40本か。多いなあ。」

「そんなでもありませんよ。過去には「明星みちほし」と「ゆうづる」がそれぞれ7往復14本設定されていた時代がありますから。」

「えっ。それだけで14往復28本。多すぎじゃない。」

「確かに多すぎですね。そのあと「明星みちほし」は4往復8本。「ゆうづる」は5往復10本に整理されてますから。」

「それでも多いだろ。」

「そんな話今はどうでもいいだろ。それよりこっち。いつか仕上げなきゃいけないんだから。」

「そうだった。ごめん。」

「別にいいよ。木ノ本きののほんの場合そういうこと話してたほうが楽しいだろ。久しぶりなんだし。盛り上がればいいじゃん。」

「盛り上がるのはこれが終わった後。そう決めました。さっさと終わらせちゃおう。」

「だな。」

今度は見れる寝台特急しんだいとうきゅうの整理だ。実際に行動ができるのは7時30分から8時以降。その時には方に来る寝台特急しんだいとうきゅうは物の見事でない。

「あつ。寝台特急フルトレのそんなに空気を読んでくれないみたいだな。」

「寝台特急フルトレのKYケイワイ。」

「まあ、KYケイワイって言っても時刻表がこの通りですから。」

「そうですねよ。どこかに行ってからまたとれるかもしれないじゃないですか。」

「そうだな。」

僕はしばらくその時刻表を見つめ続けていた。これは……。

「これって3日目にまわしちゃえばいいんじゃないか。」

「どういうことだよ。」

「3日目にまわすと東京発着とうきょうはつちやくの寝台特急フルトレは見れないにしても大阪発おおさか

着の寝台特急は見れるっていうこと。」

「ああ、なるほど。」

「でもそれって大半を捨てるってことですよねえ。」

「だってそうしなきゃダメだろ。いくらなんでも5時31分の「なは」はまず撮れない。」

「撮れないこともないんじゃないか。早起きすればいい話だし。」

「それはそうだけどね。」

「木ノ本さん。電車に12時間乗った後にまたホームに行ける自信あるんですか。」

「自信はないけど。ふつうに考えてできるってことじゃん。」

「やめとけて。木ノ本まだ体が慣れてないだろ。歓迎旅行の時も20(8)時からホームにいてずっと寝てなかったんだろ。電車の中で爆睡だったじゃねえか。」

「そうでないところもあつた。これからずっとそれしてけば……。」

「いつか体壊すぞ。やめろ。」

「……。分かったよ。今回はやんないことにする。」

「で、話し戻すけど、「さくら」や「はやぶさ」や「みずほ」まで待つてたら広い範囲行動できない。」

「「さくら」と「はやぶさ」と「みずほ」が博多はかたに来るのって何時だよ。」

「全部9時台。そんなじゃ「さくら」が一番早くて、「はやぶさ」が一番遅い。」

「でも9時ならまだいろんなところいけるよねえ。」

「……。」

「確かにそうですけど、もうちょっと現実つてものを考えたほうがいいんじゃないんですか。大体「さくら」、「はやぶさ」、「みずほ」が時間通りに来るっていう保証はないじゃないですか。」

「それは安全神話の日本が何んとか……。」

「何ともならない時だつてあるってこと。事故と天災にはどこをど

うあがいても勝てない。」

「そうですね。もし寝台特急フルトレが事故を起こさなくても貨物が事故を起こしたら同じことですよ。」

「そう。だから、今回は東京発着とうきょうはつちやくの寝台特急フルトレは切り捨てていいと思う。ここでも見れるんだから。だったら見れない大阪発着おおさかのやつを見たほうがいいだろ。」

「……。」

「それもそうですね。普段見れるやつ見たって機関車きかんしゃが変わってるだけだし。」

「でも、機関車きかんしゃ変わってるんだったらそっちも見たくない。こっちじゃ見れないんだしさあ。」

「確かに見れないけど……。」

全員黙り込んだ。ここ浜松はままつで見れる機関車きかんしゃはEF66をはじめとする直流専用ちよくり専用の電気機関車でんきかんしゃ。九州きゅうしゅうで見れるのはED76などの交流電りゅうでん気機関車きかんしゃ。EF66やEF65には青を基調とした塗装。ED76は赤をまとっている。それだけでも違うのだが……。

「ダメだ。好きなもの同士集まりすぎてるからこういつときまともなねえ。」

結局今日は何も進まなかった。

26列車 まとまらない(後書き)

今回から臨地研修シリーズの話です。

ストーリー中に出てくるみたいに寝台特急がいっぱい走ってたらなあ。新幹線より乗ってて飽きません。

27列車 立案(前書き)

残酷な発言がございます。

27列車 立案

翌日。

「今日も2日目、3日目の打ち合わせかあ。なあ、木ノ本きのもと。なんか考えてきた。」

話題を木ノ本きのもとに振ってみた。

「考えてみたんだけどさあ、昨日けつ鳥栖とすに行くっていう話に最後なつてたじゃん。だったら鳥栖とすまで行ってそこでしゃさつでもすればいいと思う。」

「しゃさつ。」

木ノ本きのもとの言葉にあった「しゃさつ」という言葉が気になった。まさか……。

「おい。まさか人殺すなんてしないよなあ。」

「するわけないじゃん。永島ながしまならすぐに通じると思ったけど、通じなかったかあ。」

「なんだよその言い方。まるで俺が鉄道バカみたいに聞こえるじゃないか。」

「実質そうじゃん。」

「まあ、否定しないけど。で、何それ。」

「車両撮影しゃうしやうしえい。略して車撮しゃさつ。」

「……。紛らわしい略語作ったなあ。車両撮影しゃうしやうしえい。略して車撮しゃさつかあ。」

「そう。すごいだろ。」

「どこもすごくないけどな。」

「それをスパツというなよ。」

「そんな話はどうでもいい。で、どんなの考えてきたの。俺はその工程知りたい。」

「まず、8時12分の快速かいそくで鳥栖とすまで行く。後は車撮大会しゃさつたいかい。戻ってくる列車は鳥栖とすを15時23分に発車する快速かいそく。そのあと16時0

9分発の博多南線に乗って博多南まで行って総合車両所を見ってみる。それで帰りは18時04分の列車っていう感じなんだけど。」

「……。」
「なんか反応してよ。」

「別に悪くないんじゃない。それで通してみる。」

「通すのはいいけど、まずは朝風と空河の反応見てからだろ。」

「多分反対しないと思うけど。」

「いや、空河が反対しそうで怖いんだよ。空河ってディーゼル好きだろ。私の計画の中ディーゼル出てこないから……。」

「鳥栖で「ゆふいんの森」も見れる。それがキハ71だかキハ72だかは知らないけどな。」

「なんだ。なら問題ないじゃん。」
「だから、きつと大丈夫だよ。朝風が見たい寝台特急も見れるしな。」

「このことを早速空河たちに振ってみた。」

「なんか反対とか。こんなところ行くなんてゴミじゃんとかっていうところない。」

「別にはないです。「ゆふいん」見られるだけでも十分ですから。」

「ないです。木ノ本さんがとうございます。」

「いやあ。それほどでも。」

「浮かれてんな。通らなきゃこれボツ。また1から作り直さなきゃいけないんだから。」

「計画を手帳サイズのノートに書いてアド先生に提出してみた。すると……、」

「なんだよこれ。鳥栖まで行って写真撮って戻ってくるだけかよ。」
「ダメだしたのはアド先生ではなくサヤ先輩だった。」

「えっ、ダメですか。」
「木ノ本が聞き返す。」

「ダメってわけじゃないんだけど、行動が小さいっていうのかなあ。俺たちは門司港のレトロうんたらとかっていうところまで行くことと」

思ってるんだよ。」

「永島。門司港ってどー。」

「えっ。門司港って……、」

鉄道知識が0に等しい木ノ本にはどういいう説明をしたらよいのか。

ちよつと考えて、

「山陽新幹線の小倉って知ってる。」

「小倉……。小倉。」

どうもわからないみたいである。他に通じる言い方は……、

「九州渡つてすぐ。」

「……。イメージわかないけど、何となくわかった。その近くのな。」

「うん。」

「そつちの話は済んだか。」

するとサヤ先輩はさっきの説明を続けた。……。いや、違う。

「俺たちそこに行くまで「クソニック」に乗ることになった。」

「「クソニック」って……。サヤ先輩その呼び方やめましょう。」

「いいだろ。別に。「ハイパー」に問題起こす「やつらに乗るよりはましだ。」

これには首をかしげた。僕が知っている中で「ハイパー」がつく電車や車両が見つからない。それがわからないようだと思したようです。ナヨロン先輩が耳打ちしてくれた。

「783系。あれの愛称「ハイパーサルーン」。」

(なるほど……。)

「サヤ先輩。話が脱線してます。」

「えっ。あつ。話それた。ごめんごめん。」

「ところで、この計画は変えたほうがいいってことですか。」

木ノ本はそう聞いていたが、僕にはもうこれでは通る気はしなかった。

「もういいよ。また計画練ろうぜ。」

「なつ、永島。」

木ノ本きのもとは僕を呼び止めようとした。しかし、さっさと席に戻った僕を見ると僕たちのほうへもどってきた。

「聞こえてたと思うけど、この計画じゃあ通らなかった。なんか他にいい案ある。って言ってもすぐには出ないよなあ。」

「……。」

「永島ながしま。」

考え込んでいるさなか誰かに呼ばれた。僕を読んだ人は佐久間さくまだった。振り向いてみれば僕のすぐ後ろにいる。

「何。」

「お前らどこに行くってなってる。」

「鳥栖とりすに行こうっていう話になってたけど、どうも通りそうになかったから鳥栖とりすに行くことはやめた。お前らはどこ行くの。」

「「つばめ」に乗って熊本くまもとまで行ってくる。」

「「つばめ」っ。」

班全員の声がそろった。「つばめ」は博多はかたと西鹿児島にしがきこうしまを結ぶ特急しゅうごくの名前。使われている車両は787系という車両で全体がシルバーに塗装されている。外見は何となくロボットを連想させそうな顔をしている。

「あ……あれに乗るのか。」

「ああ、それもここだけの話……で乗る。」

「おい。それはやっちゃダメだろ。」

「考えてることが幼稚ちういといつかなんといつか。見つかったらどうすんのよ。」

「え。見つからなければどうということはない。」

「……。」

「いや、そういう問題じゃなくて……。」

なお、今ここで話されていたことは絶対に真似しないでください。犯罪はんざいです。

「熊本くまもとって言うってたなあ。熊本くまもと行って何するんだよ。」

「あすこって路面電車走ってるじゃん。それにでも乗ってこようか

なあと思つて。」

(熊本……)

「へえ。そうなんだ。」

佐久間とも会話はここでお開き。自分たちの計画に戻つたが、何も進行しないのは変わりない。なら……

「先に3日目の計画作つちまおうぜ。」

「そうだな。2日目迷つてたつてしようがないもんな。」

「じゃあ、3日目どうするか……」

全員頭を回転される。中に浮かんでくるのは昨日言った「あかつき

「彗星」「なは」をこの日に見る。

「まず、寝台特急を見るのは必須だろ。」

「そうだな……ん……」

「一つ気がかりなことが浮かんだ。もしこれが本当だったら……」

「バスが大阪に着くのつて何時だつて。」

「ゴミバスが大阪に着くのは7時30分ですよ。」

「……」

「どうかしたのか。」

「まずい。俺たち寝台特急にも見放されたかも。このままいつたら

「あかつき」と「彗星」は見れない。」

「え。行つてる意味がちよつとよく分かんないんだけど。」

「おいおい。これくらい理解しようぜ。」

「木ノ本さんにもわかるように説明します。まず「彗星」の大阪到

着が7時16分。「あかつき」の大阪到着が7時24分。」

「あ。なるほど。そういうことが……。つて。えー。」

「死ねばいいですね。そのバス。」

「ほんとだよ。でも、バスのおかげで間に合うかもしれない。」

「なんで。」

「よく考えてみてくださいよ。鉄道は1分1秒でも遅れたらいけない。その代りにバスはそれに縛られない。どうしても高速道路の道路状況に左右されるからです。つまり、渋滞が続いていれば7時3

0分以降の到着になるということ。もし道路がスカスカですいすい通れる状態なら到着は7時30分より早くなる。」

「つまり、朝風あさかせが言いたいのは道路がスカスカの状態であることを祈つとけってこと。」

「まあ、そんな感じですよ。僕が思うにバスはゴミですから。」

バス好きの人ごめんなさい。

「よし。もし渋滞はまったらいらぬ車ロケランで破壊するか。まず木ノ本きのもとがそれを言った。」

「ダメですよ。ロケランで破壊したら残骸が残るじゃないですか。」

「何。残骸を残さないで車を吹き飛ばす方法でもあるのか。」

「核爆弾に決まってるじゃないですか。いらぬ車はすべて核爆弾で破壊する。」

「それ、私たちまで被ばくするからやめような。」

「分かった。残骸が残らなきゃいいんだろ。」

「うん。まあ、そうだな。って永島ながしまも核爆弾で破壊するとかつていうこと思いついたのか。」

「いや。核爆弾だとしても俺たちが被ばくするじゃん。バスにクレーンをつけていらぬ車を放り投げる。今は車社会車社会とかつて言ってるけど、これからは鉄道社会になるんだぜ。地球にたまりすぎた車を一扫するにはもってこいのイベントじゃないか。」

「それ余計時間かかります。世界の車一掃するなら、全部の車の床下にプラスチック爆弾ディーエヌディーかTNTを下にくっつけて、ある段階で爆破する。こうすればエンジン死ぬ。燃料タンク死ぬ。基盤死ぬの3弾攻撃が可能になる。」

車好きの人ごめんなさい。

「それやったら全員鉄道利用に切り替わるな。」

「鉄道利用に切り替わってもどうせ新幹線しんかんせん利用でしょ。」

「なんか不満なのか。朝風あさかせ。」

「不満に決まっています。そんなことしてもどうせ早い乗り物にしか流れないんですから。もっと旅を楽しむとかつていうこと考えない

んですかねえ。だから現代人は視野が狭いんですよ。この年で言うのもなんですけど、僕は昔を見直す必要があると思いますね。」
（この年って。まだこいつ12だぞ。言うことはすでにおっさん化してる。）

「さっき視野狭いって言いましたけど、僕本当に現代人は視野狭いと思うんですよ。なんでそんなに早くいききたいって思うことだってありますから。」

「早くいって何が楽しいってことだな。」

「そうです。今は楽しいなんてどうでもいいっていう人がたくさんいるから新幹線しんかんせんがもうかって、それに並行してひっそりと生きている路線がどんどんさびしくなっていく。」

「でも、その対策は見つからないってことだよなあ。」

「そうなんですよねえ。どこどうやったらまがった心が折れるのか。その答えが見つからない。」

「そんな話どうでもいい。さっさと3日目上げちまおうぜ。」
そのあと話し合って3日目の計画を立てた。結果は車両撮影やうりょうさつえいの王道となった。

部活終了後。

（はあ。今日はすっかり遅くなっちゃったなあ。結局2日目の私の案はボツ。他にどんな計画立てるっていうのよ。はあ。）

心の中で溜息したかしないかの時。誰かにぶつかった。思いっきり頭と頭が衝突した。

「痛っ。」

思わず声が出る。おでこをこすりながら、

「ごめんなさ……。」

目を開けてみると、どこかで見たことのある顔だった。

「坂口さん。」

相手も目を開けると、

「木ノ本さん。」

お互いの名前を呼びあった。

27列車 立案（後書き）

今回は本当に謝罪するのだと思います。

と言っておきながら、主人公たちがあんなことを言っているのほ
うがなんか楽しい気がします。

話は変わりますが、このレの前までの文字数を原稿用紙の4000字
で割ってみました。その結果原稿用紙に空白なく文字を埋めても3
38枚相当になることが分かりました。いつの間に関分ってこんな
に書いたんだろう・・・。

28列車 進路の密勅

頭をぶつけた彼女は坂口さかくちだった。先日行われた文化祭でもう顔は知っているが、こうして会うのは初めてだ。

「ごめんね。ちゃんと前見て歩いてなかったから。」
坂口さかくちがまず謝った。

「いや。分かるよ。ここに来たら絶対あっち向いて歩くのがふつうだからなあ。」

ここは遠鉄百貨店と浜松駅はままつ前のMAY ONEの間メイワン。遠鉄百貨店側から見て左手側に遠鉄バス浜松駅はままつ前。右手側には浜松駅はままつの1番線が顔をのぞかせている。坂口さかくちも木ノ本きののもともここを通る時は必ず浜松駅はままつ側を見たまま歩き、何か列車が来るといふアナウンスが聞こえたら足を止めてくるまで待つ。それが4月からの日課になったのだ。

「あつ、やつぱり木ノ本きののもとさんもやるんだ。」

「ここを通るときにタダで通るなんてことできるかよ。」
するとホームからアナウンスが聞こえてきた。しばらくそのアナウンスに耳を傾ける。その声はこういつている。

「間もなく、1番線を、貨物列車が、通過します。黄色い線の内側までお下がりください。」

「貨物かあ。どうせEF210（桃太郎）だろうなあ。」

「そうとも限らないんじゃない。EF66とかEF200が貨物列車引くことだってあるし。それにEF65だってゼロじゃないよね。」

「（ほんと。前会った時もそうだったけど、坂口さかくちさん進路間違えたんじゃないのか。このレベルだったらふつうに岸川きしかわに来ていいレベル。今鉄研やつても十分通用する。）

「じゃあ訂正。高い確率でEF210（桃太郎）だ。」

1・2分その場で貨物列車の通過を待つ。すると豊橋側とよはしから甲高いホイッスルの音が聞こえ、前面が青で、パンタグラフの形がV字形

になっている機関車を先頭に貨物列車が通過していった。

「EF210（桃太郎）。」

「違うよ。EF200だよ。今は。パンタグラフがV字形になってたでしょ。EF210のシングルパンタはああいう風になってないよ。」

（パンタグラフだけで機関車の違いが分かるってどういう人……）

いつか自分もそうなるんだと薄々感じながら、いま隣にいる同じ女子鉄を見つめる。

「どうかした。私の顔に何かついてる。」

「いや。そんなことないけど……。ていうか、どっか座って話さない。ずっと立ってるってつらいでしょ。」

「そうだね。どこ行こうか。」

「そこら辺のベンチでいいだろ。」

これは坂口のほうは嫌だったらしい。

「だってお腹すいたもん。それとも、家にこちそうが待ってるの。」

「それない。ちよっと待って家に電話する。」

坂口さかくちに断わって家に電話し、夕食をどっかで食べていくという確約を取り付ける。その後坂口さかくちと一緒に近くのマックスに入った。

テーブルに座ると対岸に座ろうとしている坂口さかくちの姿が目に入る。

そして、文化祭で言った言葉が再生された。

（私……。将来は運転手になりたいと思ってるんだ……。）

その時彼女はこういった。永島ながしまも将来は運転手になることを見据えているのだろう。そして彼女もそうなりたいと思っている。こういう状況なら同じ岸川きしかわに通学するのがふつうのはず。なのに、なぜ彼女は岸川きしかわではなく宗谷そうやに通学しているのか。そのことがどうしても気になった。

「なあ、何で永島ながしまと同じ岸川きしかわじゃなくて、宗谷そうやに通ってるんだ。」
いつの間にかその口が勝手に開いていた。

「ナガシイがさ、私の夢をかなえるためには宗谷そうやに行くのが一番だ

って言われたから。」

(理由はそれだけ……)

「なんで。坂口さかくちさんが成りたいのは電車の運転手でしょ。今それに一番近いことができるのは岸川きしかわじゃない。なのに。なんで宗谷そうやなんだよ。」

「……。」

坂口さかくちからの回答はなかった。また言葉をつづけようとする。

「あのさあ。木ノ本きのもとさんならいえることかもしれないけど、将来自分が電車の運転手になりたいって言える。」

「……。そ……それは。」

ほんの少し前の自分が思い浮かぶ。少なくともその時の自分にはこんなことは言えなかった。

「私には……ナガシイには口が裂けても言えるようなことじゃない。ただ……。ストレートに言えばいいんだけど、どうしてもこれはなんか言っちゃいけないような感じがする。」

「なんでだよ。」

(永島ながしまが見てたのは坂口さかくちさんの表面だけなんだ。だったら早くその気持ちに気付かせてあげなきゃ。永島ながしまは……私が入部を決めたときこういった。何に興味持とうがそんなの関係ない。なら、何に成ろうがそんなの男女関係ない。そもとれる。)

「あんたの彼氏はこういつてたぞ。何に興味持とうがそんなの男女関係ないって。同じことだろ。何に成ろうがそんなの関係ない。何ためらってるわけ。本当になりたいって思ってることなら話すべきだろ。」

「……。」

また坂口さかくちからの回答はない。しばらく黙り続けて、

「本当のことだから、いつか話さなきゃいけないとは思ってる。でも……、ナガシイにはずっと嘘ついてきたことになる。普段そう見えなくてもナガシイ嘘とか嫌いなもの。ずっとナガシイをだまし続けた、私を簡単に認めてくれると思う。」

(あいつならそんなこと気にしないと思うのに。やっぱり古い付き合いだから。それならこういう状況でどういう答えが返ってくるかはわかるはず……。なるほど。返ってくる答えが怖いから言えないんだ。)

「怖いんだな。」

「うん……。」

坂口さかくちの声は一段と小さくなった。

「分かるよ。」

同じような境遇にずっと立たされていた自分を語りたくなる。

「私もずっとそう思ってた。私は成っていいのかって。周りの大人はさあ、みんなその考えに拍車をかける感じでそんなのなるなか、もつと女の子らしいことしなさいとかって言ってくる。どんどん周りに道を崩されて、ついにはそんなのになっちゃいけないって思えてもきた。でも、ちゃんと見方もいるんだってわかった。私の母さんもそうだけど、ちゃんと自分が好きなように導いてくれる人もいる。今の私はいつのおかげでいるようなもの。」

「……。」

坂口さかくちは黙ったままにいる。木ノ本きのもとがさらに続けようとすると、

「もういいよ。」

坂口さかくちがその先の言葉を遮った。

「ナガシイが言ったこと半分は本当だった。閉じこもってなければ私と同じって。でも私も同じだったんだなあ。ずっとその重圧に押しつぶされて言えなかった。」

萌もえは自分に言い聞かせるように独り言を言った。言い終わると瞬きをして、

「木ノ本きのもとさんのおかげで私も迷いが晴れたと思う。ナガシイの言うことは当たってる。これからはもう迷わない。自分が思ったように進む。」

「……。」

「でも……。思ったように進むって言っても私はどこに進んでい

いのかわかない。浜松はままつにある国際観光こくさいかんこうとか大原おおはらとかに行つてもろくなものにはなれない。だから、木ノ本きのもとさんにナガシイの進路のことを詮索してもらいたいんだよねえ。」

「ずっこけそうになる回答こたへだった。」

「なんで。すぐに永島ながしまに話すとかじゃないの。」

「今話して何がどう変わるのよ。私がただその進路に行きたいって言つても変わるのは3年後。だったらそこまでにやること、知つておきたいことがあるの。」

（確かに。坂口さかくちさんには鉄道関連の進路でどんなものがあるかなんてわからない。そのために永島ながしまの詮索……）

「調べてほしいのはナガシイの進路のこと。進路がわかれば後は私
が何とかする。もちろん、その時に言わなくちゃいけないことも話
す。それに、もしそれまでの間に話すきっかけができればその時
い
う。」

「でも永島ながしまの進路がわかつて、行きたいって思つてる学校がいく
つもあつたらどうするの。」

「そこは、大丈夫。ナガシイは行く学校は必ず一つだけに絞る。そ
こ以外行く気ないから。」

これも疑わしい情報だ。でも、永島ながしまが岸川きしかわを単願で受験したとい
うことは……。ならば坂口さかくちがこういうことも分かる。

「だから、答えが出るのは少なくとも3年生の春。その時までに進
路が決まつてなかつたらその段階でそれは言う。」

「でも、そこまでは永島ながしまには話さないってことだよなあ。」

「それはそうだけど……。でも、進路のことなんて今から考えて
る人なんて私以外いないと思つし。」

（そういう問題じゃなくて……）

「それに、私を本気にしてくれたのは木ノ本きのもとさん。私、今までこん
なに本気でこの進路のことなんて考えたことなかった。でも今は違
う。夢を実現させるためならなんだってする。でも、そこまで行く
工程を知らなかつたら何にもならない。協力してほしいの。」

「……。」

ため息が出た。心のどこかで、押されきった感覚があるからだ。

「分かった。同じ進路を志す仲間として協力する。」

「決まり。じゃあ、メアド交換しよう。」

坂口はポケットから携帯電話を取り出した。形は何かどこかで見た

ことがある。……永島の携帯電話と同じなのだ。

「あれ、同じ携帯。」

「あっ、そうなんだ。ナガシイの場合性能とかそういうので携帯選
ばないからなあ。多分形だけで見ればこれかなあって思ったんだけ
ど、マジで同じとは思わなかった。」

「……。」

(坂口さんには永島の思考回路全部がコピーされてるのか。)

「て、そんなことどうでもいい。」

自分が言いだした言葉に歯止めをかけて、赤外線受信の機能を起動
させる。

「ああ、あと。私のことは萌って呼んでいいからね。」

自分も携帯を出そうとしているときにそう言われた。

「木ノ本さんって何て呼ばれたい。部活の中じゃハルナンだったよ
ねえ。でもハルナンは嫌だよねえ……。じゃあ、榛名ちゃんとい
い。」

「……。なんでもいいよ。つうか、いまその話関係ないでしょ。」

この後二人はアドレスを交換し、進路が確定するまで永島には秘密
で計画を押し進めていくことを正式に決めたのだ。

翌日。宗谷学園では……、

「うーん。確か今日浜北で入れ替えた編成が1001で、上島で入
れ替えたやつが2003で、八幡で入れ替えた編成が1007と1
005で、乗ってきた編成が2004と2002。今日は1001
と1005と2002が車庫に入って、2003と1007と20
04がふつうに走る……。」

今日はなぜか独り言を言っている。それが気になって黒崎が話しか

けた。

「今日はどうしたの。なんかさっきから1001がどこの言ってるけど。」

「えっ。ああ。帰りに乗る電車何かなあって思って。」

(やっぱりそれなんだ。)

「帰るときに乗る電車なんてわかるの。」

「そんなの簡単だよ。たくさん乗ったらどういう運用してるか一発で分かるし。」

(それが一発で分かるって。相当イッテルよなあ。)

「でも、遠江急行だけはわかんないなあ。あれ先頭の右側のところに小さく編成番号が書いてあるだけだから。あれさえわかればどういう運用してるかわかるのに。」

「……。」

話には到底ついていけないと思いその場を離れた。

「15時42分に来るのが2003で、54分に来るのが1007。16時06分に来るのが2004。部活もやってないからそこまで待つのはちよつとなあ。」

「……。」

席がちよつと離れている萌の友達。端岡に今のことを振ってみた。

「ねえ、夏紀。萌どうしちゃったのよ。」

「何。何か変なことでも言ってるの。」

「変なことって言えば、少し変かなあ。さっきから1001がどうのこうなのとか一人で喋り捲ってるし。」

「……。」

「ねえ、早くどうにかしたほうが……。」

「いいよ。あのままです。」

端岡から返ってきたのはまずそれだった。

「多分、何かに目覚めたんだと思うなあ。元気がないってちよつと心配してたけど、あれだったらすぐに立ち直るね。」

「……。なんだよそれ。萌が独り言多い時は元気っていう一種の

「バロメーターか。」

「そんな感じかなあ。」

「何に目覚めたんだろうなあ。」

黒崎が端岡に聞いた質問の回答は蘭田から返ってきた。

「きつと電車の運転手だよ。」

「えっ。まさか。あれって男の子が成るもんだろ。ふつう女の子が就くような……。」

「確かに。女の子が就くとしたら新幹線の乗務員とかだろうな。」

「でも、今ならそんな関係ないんじゃない。ていうかそこで差別とかしてたら絶対問題になる。それに私たちに偏見があるかもしれないじゃん。」

「……。そうだな。」

「ああ、もういいや。2003(こいつ)で。」

「……。」

28列車 進路の密勅（後書き）

ちよつと強引過ぎたかなあ・・・。
でも、アマチュアの小説ですし、アマチュアみたいなまわし方って
いうのもアリなんですよねえ・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0514x/>

MAINE TRAFFIC

2011年10月28日17時08分発行